

特別史跡熊本城跡復旧事業報告書 1

－重要文化財長堀復旧等に伴う確認調査－

2 0 2 1

熊本市熊本城調査研究センター

特別史跡熊本城跡復旧事業報告書 1

－重要文化財長堀復旧等に伴う確認調査－

2 0 2 1

熊本市熊本城調査研究センター

序 文

熊本城は、加藤清正により築城された城郭で、西南戦争で大小天守や本丸御殿等が焼失するものの、宇土櫓をはじめとする櫓群や門、塀などの重要文化財建造物が残る全国有数の城跡です。また、重層的な石垣等を有する城跡は学術上の価値が特に高く、我が国における文化の象徴たるものとして評価され、特別史跡に指定されています。

これまでに熊本城ではその価値をより一層高めることを目的に、平成9年度（1997）に策定した『熊本城復元整備計画』に基づき、本丸・二の丸地区一帯の復元整備を行うなどの取り組みをおこなってきました。その中で、平成28年（2016）4月に「平成28年熊本地震」が大分県の一部と熊本県内全域を襲いました。熊本城においても重要文化財建造物13棟、再建・復元建造物20棟などの倒壊・一部損壊や石垣の3割に崩落・膨らみ・緩みが生じるなど、甚大なる被害をもたらしました。

この非常事態に接し、本市ではいち早く平成30年（2018）3月に『熊本城復旧基本計画』を策定しました。本計画は、文化財としての価値の保全を前提として、被災した石垣、建造物の復旧をはじめ熊本城の効率的・計画的な復旧と戦略的な公開・活用を着実に進めていくために策定したもので、現在、本計画に基づき復旧事業を進めているところです。

本報告書は、熊本城復旧基本計画に基づき計画された特別見学通路の設置及び重要文化財建造物長塀の復旧に伴い事前に実施された確認調査の成果をまとめたものです。熊本城の今後の復旧並びに保存・活用の参考になれば幸いです。

最後になりますが、本報告書を刊行するにあたって、これまでご指導、ご協力いただきました方々に深く感謝申し上げます。

令和3年（2021）3月

熊本市長 大西 一 史

例 言

- 1 本書は、平成 28 年熊本地震で被災した特別史跡熊本城跡の復旧事業に伴って実施した発掘調査報告書である。本書には特別見学通路設置に伴う確認調査、重要文化財建造物長堀の復旧に伴う確認調査を掲載している。
- 2 発掘調査は平成 29・30 年度にかけて熊本城調査研究センターが実施した。
- 3 発掘調査期間は、①特別見学通路設置に伴う確認調査【平成 29 年度】平成 30 年（2018）2 月 1 日～26 日・【平成 30 年度】平成 30 年（2018）7 月 7 日～24 日、②重要文化財建造物長堀の復旧に伴う確認調査【平成 29 年度】平成 29 年（2017）11 月 6 日～平成 30 年（2018）1 月 31 日・【平成 30 年度】平成 30 年（2018）8 月 9 日～31 日である。
- 4 発掘調査は、①特別見学通路設置に伴う確認調査【平成 29 年度】真鍋貴匡（文化財保護主事 香川県から派遣）・原田健司（文化財保護主事 長野県松本市から派遣）、【平成 30 年度】和田達也（文化財保護主任主事、静岡県浜松市から派遣）、②重要文化財建造物長堀の復旧に伴う確認調査【平成 29 年度】北原治（文化財保護参事、滋賀県から派遣）、【平成 30 年度】岩橋隆浩（文化財保護参事 滋賀県から派遣）、河本愛輝（文化財保護主事）が担当した。
- 5 整理作業・報告書作成は、平成 29 年度～令和 2 年度（2017～2020）にかけて熊本城調査研究センターの作業室内等で実施した。
- 6 発掘調査（現場作業）における実測図作成・写真撮影は各担当者が行った。整理作業における出土遺物の 1 次選出も各担当者が行った。
- 7 現場作業における土層および出土遺物の色調標記は『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著）に基づく。
- 8 座標数値は、国土調査法第Ⅱ座標系数値である。
- 9 整理作業・報告書作成における遺構図作成は熊本城調査研究センター職員が行い、遺物実測図作成・遺物写真撮影・本書版下作成は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に業務委託した。
- 10 本書は、第 2 章（一部）・第 3・4 章（遺物ほか）を矢野裕介（熊本城調査研究センター文化財保護主幹、熊本県から派遣）、第 2 章（一部）・第 5 章を金田一精（熊本城調査研究センター主査）、第 3 章（平成 29 年度調査・飯田丸遺構ほか）を真鍋貴匡、第 3 章（平成 29 年度調査・東竹の丸遺構ほか）を原田健司、第 3 章（平成 30 年度調査・遺構ほか）を和田達也、第 4 章（平成 29 年度調査・遺構ほか）を北原治、第 4 章（平成 30 年度調査・遺構ほか）を岩橋隆浩・河本愛輝が分担執筆した。なお、第 1 章と第 2 章 1・2 については、熊本城調査研究センター刊行の「特別史跡熊本城跡 総括報告書（歴史資料編・調査研究編）」及び「特別史跡熊本城跡 平成 28 年熊本地震被害調査報告書」「熊本城復旧基本計画」より該当箇所を転載し、一部改変を加えた。
- 11 本書の編集は矢野が実施し、金田が補佐した。
- 12 本報告にあたり、調査区、トレンチの名称について、以下のとおり変更した。
【第 3 章】飯田丸・調査区 1～5→トレンチ 01～05、東竹の丸・調査区 1～4→トレンチ 06～09、調査溝 1～3→トレンチ 10～12
【第 4 章】トレンチ 1～5→トレンチ 01～05、トレンチ 6～8、10→トレンチ 06～08、10
- 13 図面、写真、出土品は熊本城調査研究センターに保管している。
- 14 本書の絵図・古写真等の掲載許可にあたり下記の方々にご配慮を賜った。記して感謝申し上げる。
(50 音順、敬称略)

熊本県立図書館、熊本市立熊本博物館、公益財団法人永青文庫、国立国会図書館

目 次

第1章 特別史跡熊本城跡の概要	1
1. 特別史跡熊本城跡について	1
2. 地理的環境	1
(1) 概要	1
(2) 金峰山塊の岩質	4
(3) 熊本城跡の地形	5
3. 歴史的環境	6
(1) 周辺遺跡の概要	6
(2) 熊本城と城下の変遷	10
4. 特別史跡の構成要素	13
(1) 地区区分	13
(2) 構成要素	14
5. 平成28年熊本地震と被災状況	15
(1) 平成28年熊本地震について	15
(2) 熊本城跡における被害の状況	16
第2章 復旧事業について	21
1. 事業の概要	21
2. 石垣・建造物等の復旧方針	21
(1) 石垣の復旧基本方針	21
(2) 建造物等の復旧基本方針	22
3. 事業対象箇所の経緯	22
(1) 特別見学通路設置	22
(2) 長堀復旧	23
4. 事業体制	24
(1) 事業の体制	24
(2) 事務局	24
5. 熊本城文化財修復検討委員会	26
6. 委員会等での協議事項	26
(1) 特別見学通路	26
(2) 長堀	27
7. 事業工程	27
(1) 特別見学通路	27
(2) 長堀	27
8. 事業費	27
(1) 特別見学通路	27
(2) 長堀	27
(3) 報告書(令和2年度)	28
9. 現状変更	28
(1) 特別見学通路	28
(2) 長堀	28
第3章 特別見学通路設置	29
1. 事業対象箇所の設定・名称	29
2. 発掘調査	29
(1) 調査の目的と方法	29
(2) 基本層序	32
(3) 遺構・遺物	32
(4) 小結	67

第4章 重要文化財長堀の復旧	75
1. 事業対象箇所の設定・名称	75
2. 被災・修復履歴	75
3. 復旧方針	82
4. 発掘調査	83
(1) 調査の目的と方法	83
(2) 基本層序	83
(3) 遺構・遺物	83
(4) 小結	120
第5章 総括	129
1. 特別見学通路確認調査	129
2. 長堀確認調査	131
写真図版	133

挿図目次

第1図 熊本城跡位置図	2
第2図 熊本市周辺の地質図	3
第3図 熊本市域の山地と金峰火山	4
第4図 三河川の流路と城下町のイメージ	5
第5図 茶臼山ト隈本之絵図(写)(熊本博物館蔵)	6
第6図 熊本城周辺遺跡分布図	7
第7図 熊本城周辺図	11
第8図 特別史跡熊本城跡地区区分図	13
第9図 熊本城被害箇所全体図	17
第10図 事業対象箇所図	23
第11図 飯田丸・東竹の丸変遷図	30
第12図 飯田丸・東竹の丸トレンチ配置図	31
第13図 飯田丸トレンチ01配置図	33
第14図 飯田丸トレンチ01平・断面図1	34
第15図 飯田丸トレンチ01平・断面図2	35
第16図 飯田丸トレンチ01出土遺物1	36
第17図 飯田丸トレンチ01出土遺物2	37
第18図 飯田丸トレンチ01出土遺物3	38
第19図 飯田丸トレンチ02平・断面図	39
第20図 飯田丸トレンチ03平・断面図	39
第21図 飯田丸トレンチ03出土遺物	40
第22図 飯田丸トレンチ03～05配置図	41
第23図 飯田丸トレンチ04平・断面図1	42
第24図 飯田丸トレンチ04平・断面図2	43
第25図 飯田丸トレンチ04出土遺物1	44
第26図 飯田丸トレンチ04出土遺物2	45
第27図 飯田丸トレンチ04出土遺物3	45
第28図 飯田丸トレンチ05平・断面図	45
第29図 飯田丸地点1(礎石)	46
第30図 飯田丸元塩蔵内北側礎石群(露出石材)	47
第31図 元塩蔵内北側礎石群礎石3(板碑)	48

第 32 図	東竹の丸トレンチ 06 配置図	49
第 33 図	東竹の丸トレンチ 06 平・断面図 1	50
第 34 図	東竹の丸トレンチ 06 平・断面図 2	51
第 35 図	東竹の丸トレンチ 06 出土遺物 1	52
第 36 図	東竹の丸トレンチ 06 出土遺物 2	53
第 37 図	東竹の丸トレンチ 06 出土遺物 3	53
第 38 図	東竹の丸トレンチ 07 配置図	54
第 39 図	東竹の丸トレンチ 07 平・断面図 1	55
第 40 図	東竹の丸トレンチ 07 平・断面図 2	56
第 41 図	東竹の丸トレンチ 07 出土遺物 1	57
第 42 図	東竹の丸トレンチ 07 出土遺物 2	58
第 43 図	東竹の丸トレンチ 07 出土遺物 3	58
第 44 図	東竹の丸トレンチ 08 平・断面図	59
第 45 図	東竹の丸トレンチ 09 平・断面図	59
第 46 図	東竹の丸トレンチ 09 出土遺物	59
第 47 図	東竹の丸露出石材 1 平・断面図	60
第 48 図	東竹の丸露出石材 2～4 平・断面図	61
第 49 図	飯田丸トレンチ 10～12 平・断面図	62
第 50 図	飯田丸トレンチ 10 出土遺物 1	63
第 51 図	飯田丸トレンチ 10 出土遺物 2	63
第 52 図	飯田丸トレンチ 10 出土遺物 3	63
第 53 図	飯田丸トレンチ 11 出土遺物 1	64
第 54 図	飯田丸トレンチ 11 出土遺物 2	65
第 55 図	飯田丸トレンチ 12 出土遺物 1	65
第 56 図	飯田丸トレンチ 12 出土遺物 2	66
第 57 図	飯田丸トレンチ 12 出土遺物 3	66
第 58 図	飯田丸・東竹の丸出土瓦刻印	69
第 59 図	重要文化財長堀概要図	76
第 60 図	竹の丸地区の旧日本陸軍・米軍施設図（昭和 35 年整備前の状況）	77
第 61 図	長堀周辺の石垣番号図	78
第 62 図	長堀控石柱の種類と修復時期（昭和 52 年以前）	79
第 63 図	長堀控石柱の種類と修復時期（平成 29 年現在）	80
第 64 図	長堀トレンチ配置図	84
第 65 図	長堀トレンチ 01 平面図・石垣（H545）修復履歴	86
第 66 図	長堀トレンチ 01-①平・断面図	88
第 67 図	長堀トレンチ 01-①土層断面図	89
第 68 図	長堀トレンチ 01-②平・断面図	90
第 69 図	長堀トレンチ 01-③・④平・断面図	91
第 70 図	長堀トレンチ 01-③・④土層断面図	92
第 71 図	長堀トレンチ 01 出土遺物 1	94
第 72 図	長堀トレンチ 01 出土遺物 2	95
第 73 図	長堀トレンチ 01 出土遺物 3	96
第 74 図	長堀トレンチ 01 出土遺物 4	97
第 75 図	長堀トレンチ 01 出土遺物 5	98
第 76 図	長堀トレンチ 01 出土遺物 6	98
第 77 図	長堀トレンチ 01 出土遺物 7	99
第 78 図	長堀トレンチ 02 平面図	100
第 79 図	長堀トレンチ 02 土層断面図	101
第 80 図	長堀トレンチ 02 出土遺物 1	103
第 81 図	長堀トレンチ 02 出土遺物 2	104
第 82 図	長堀トレンチ 02 出土遺物 3	105

第 83 図	長堀トレンチ 02 出土遺物 4	105
第 84 図	長堀トレンチ 03 平・断面図	106
第 85 図	長堀トレンチ 03 出土遺物 1	107
第 86 図	長堀トレンチ 03 出土遺物 2	107
第 87 図	長堀トレンチ 04 平・断面図	109
第 88 図	長堀トレンチ 04 土層断面図	110
第 89 図	長堀トレンチ 04 出土遺物 1	111
第 90 図	長堀トレンチ 04 出土遺物 2	112
第 91 図	長堀トレンチ 04 出土遺物 3	112
第 92 図	長堀トレンチ 05 平・断面図	113
第 93 図	長堀トレンチ 05 出土遺物 1	114
第 94 図	長堀トレンチ 05 出土遺物 2	115
第 95 図	長堀トレンチ 05 出土遺物 3	115
第 96 図	長堀トレンチ 06 平・断面図	116
第 97 図	長堀トレンチ 07 平・断面図	117
第 98 図	長堀トレンチ 08 平・断面図	118
第 99 図	長堀トレンチ 10 平・断面図	119
第 100 図	長堀トレンチ 08・10 出土遺物	120
第 101 図	長堀出土瓦刻印	122
第 102 図	飯田丸土層対照図	130
第 103 図	控石柱集成図	132

表目次

第 1 表	熊本城周辺遺跡一覧表	8
第 2 表	石垣の概要（熊本城域の史跡指定地外を含む）	14
第 3 表	重要文化財建造物の概要	14
第 4 表	再建・復元建造物の概要	15
第 5 表	地震の震源及び規模等	16
第 6 表	熊本城の被害状況（熊本城域の史跡指定地外を含む）	16
第 7 表	特別史跡指定地内石垣被災面積一覧表	16
第 8 表	重要文化財・再建・復元建造物被災箇所一覧表	18
第 9 表	石垣被災箇所一覧表 1	19
第 10 表	石垣被災箇所一覧表 2	20
第 11 表	熊本城文化財修復検討委員会名簿	26
第 12 表	飯田丸・東竹の丸刻印瓦一覧	69
第 13 表	飯田丸・東竹の丸出土遺物観察表 1	70
第 14 表	飯田丸・東竹の丸出土遺物観察表 2	71
第 15 表	飯田丸・東竹の丸出土遺物観察表 3	72
第 16 表	飯田丸・東竹の丸出土遺物観察表 4	73
第 17 表	飯田丸・東竹の丸出土遺物観察表 5	74
第 18 表	長堀控石柱・控石柱設置坑など修復時期一覧	81
第 19 表	長堀刻印瓦一覧	123
第 20 表	長堀出土遺物観察表 1	124
第 21 表	長堀出土遺物観察表 2	125
第 22 表	長堀出土遺物観察表 3	126
第 23 表	長堀出土遺物観察表 4	127
第 24 表	長堀出土遺物観察表 5	128

第1章 特別史跡熊本城跡の概要

1. 特別史跡熊本城跡について

熊本城は、熊本市の中心部に位置し、天正16年（1588）に肥後に入国した加藤清正が茶臼山丘陵全体を取り込んで築城し、明治10年（1877）の西南戦争では政府軍が籠城した平山城である。13棟の櫓や城門が残存し、石垣や城壕の多くが旧規を保つとして昭和8年（1933）に建物は国宝に、石垣や空堀、水壕などが史蹟「熊本城」に指定された。昭和25年（1950）に文化財保護法が制定されると、重要文化財と史蹟「熊本城跡」に名称が変更となり、史蹟は追加指定を経て昭和30年（1955）に特別史跡に指定されている。城域は約98haと広大で、現在ではこのうちの約57.8haが史蹟指定地となっている。

昭和57年度には『特別史跡熊本城跡保存管理計画』を策定し、特別史跡としての熊本城跡を良好な状態で保存していくことを最優先に考え、残存する遺構の維持保存はもとより、城域の境界を明確にするために石垣や堀の積極的な復元なども行うべきであるとまとめている。また、平成9年度には『熊本城復元整備計画』を策定し、地域の貴重な歴史遺産であり文化の象徴でもある熊本城跡の価値をより一層高めるため、城域全体を対象に史実に基づいた建造物・遺構の復元・修理を行うことを決定した。この復元整備計画は短期・中期・長期に分けて進められ、短期スケジュールの第1期で西出丸（奉行丸）一帯を対象として復元整備が実施された。続く第2期では対象地区を飯田丸一帯とし、五階櫓の復元とともに石垣の膨らみが著しい箇所や明治初期に撤去された部分の石垣解体修理及び復元整備が実施されている。第3期では本丸御殿建物群の大広間・大御台所棟及び数寄屋の復元整備が実施された。

こうしたなか、平成28年（2016）4月に発生した「平成28年熊本地震」は、重要文化財建造物13棟、再建・復元建造物20棟の倒壊・一部損壊、石垣の3割に崩落や膨らみ・緩みが生じるなど、熊本城に甚大な被害を及ぼした。これを受けて平成30年（2018）3月に『熊本城復旧基本計画』を策定し、現在、復旧事業を進めている。

あわせて平成29年度には、熊本城跡の本質的な価値とそれを構成する諸要素を再確認し、そのうえでより適切な保存・管理のあり方や、現状変更等の取扱基準を定めて活用・整備の方向性を示した『特別史跡熊本城跡保存活用計画』に改訂した。熊本城跡の本質的な価値は、熊本城にまつわる歴史資料や城域の縄張、石垣、歴史的建造物などの諸要素で構成され、これらを堅実な調査によって史実に正しく解釈することで不変の価値と認識できるものとなる。特別史跡である熊本城跡の保存活用は、その上で保存や整備、啓発を図っていくことが特に肝要となる。

2. 地理的環境

（1）概要

熊本市は、熊本県の県庁所在地として発展し、平成20年に富合町、平成22年に植木町・城南町と合併した結果、人口が73万人に達し平成24年度に政令指定都市に移行した。この合併により市域は大幅に拡大し、面積は熊本県の5.3%にあたる約390km²を占めるに至った。以下に、熊本城周辺を中心に熊本市域の地勢について概観する。

市域は大きく分けて、有明海と内陸部を隔てている中央西側の金峰山塊、市城南西側にあつて有明海に望み、台地と山地で縁どられた広大な熊本平野、北部・東部・南部にかけての台地（火砕流台地・河岸段丘）で構成される。市域には、東西に貫流する白川、南東から東西に貫流する緑川の水系があり、熊本平野に望む台地は両水系によって開析され、活発な沖積作用により熊本平野は形成された。

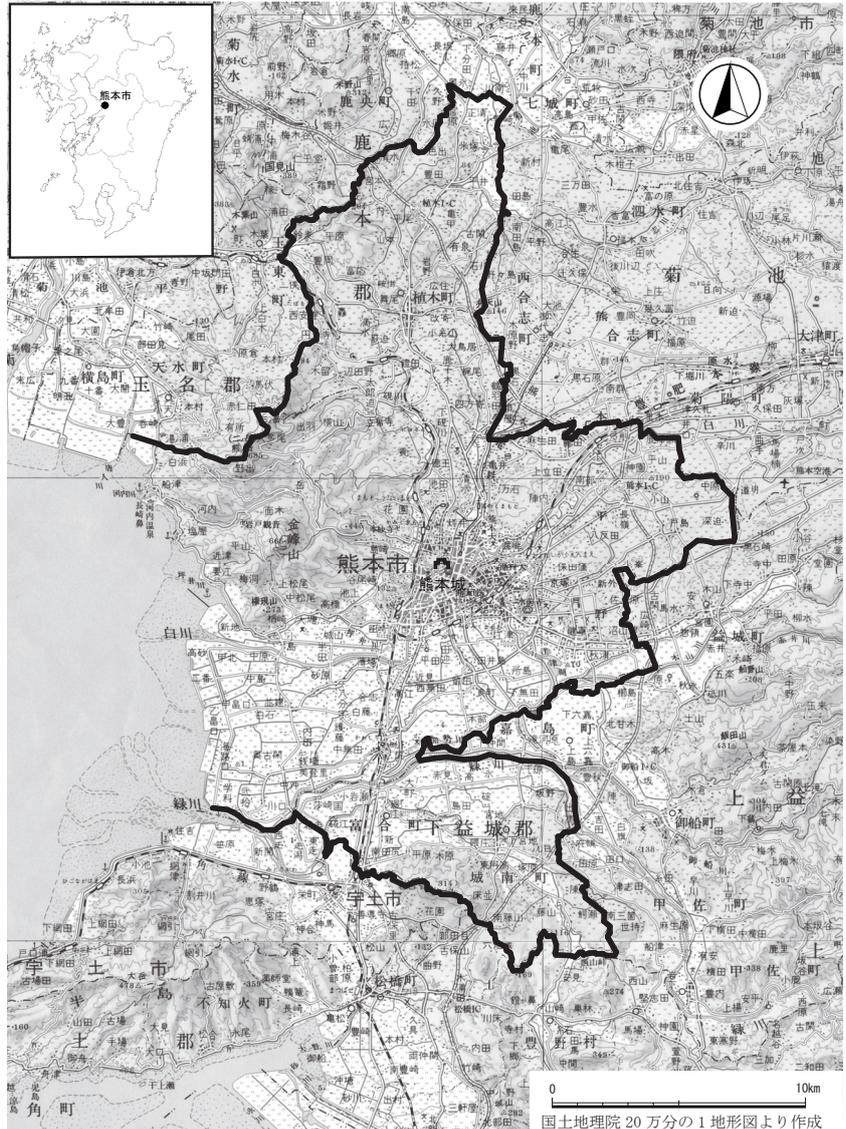
東部の台地は、先端の熊本平野から北へ向かって標高を増し、阿蘇外輪山西側斜面へと続く。北側の台

地も熊本平野から北へ向かってやや標高を増しながら続き、国道208号線・県道30号線付近を境に標高を下げて、山鹿盆地・玉名平野に望む。先の道路付近が分水嶺境界となり、境界から北側は木葉川や合志川などの菊池川水系の河川に開析されている。

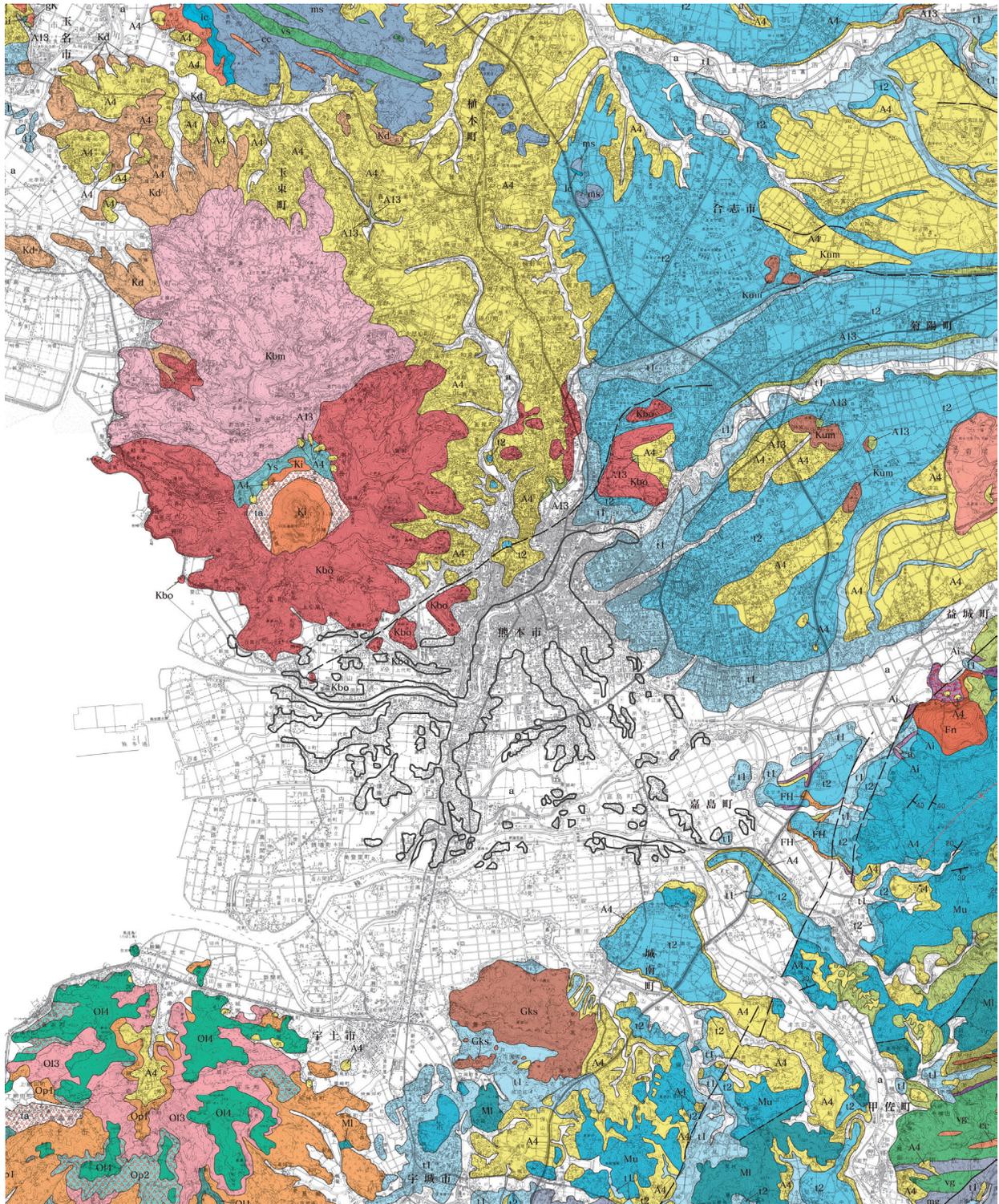
熊本城跡は、通称京町台地先端の茶臼山に立地する。この台地は、阿蘇火山起源の火砕流堆積物が基盤をなす。阿蘇火山からの火砕流は、数万年の間隔をおいて4回起こり、最大規模であった約9万年前といわれる最後の火砕流（以下、「Aso-4」と略す）が熊本市域を広範に厚く覆っている。京町台地より東側の台地は、さらにAso-4以後の砂礫層に覆われているが、この砂礫層は京町台地までは到達していない。このため、京町台地を含めて金峰山塊までの間はAso-4の端部の様相を呈し、火砕流が金峰山塊にのり上げた格好になるため、噴出源である阿蘇火山に対して逆傾斜の地形になる。火砕流は花岡山にも到達し、その先は沖積平野の下に潜っている。この火砕流による堆積物は、深い部分では溶結し硬質の溶結凝灰岩となり、浅い部分は溶結が進まず軟質の非溶結凝灰岩となる。熊本城域においては、熊本県立第一高等学校（以下、「第一高校」という）グラウンド・藤崎台県営野球場（以下、「藤崎台」という）・清爽園（明治時代に整備された庭園）などの崖面に非溶結凝灰岩の露頭が確認できる。

Aso-4の後は、地形に影響するような大きな火山活動は無く、熊本市域の洪積台地は主に阿蘇火山や雲仙火山起源の火山灰に覆われている。火山灰層の上位は腐食の集積した黒土層で、黒ボクと呼ばれる現在の表土となる。下部は粘性の強い褐色土で赤ボクと呼ばれる。黒ボクの下位には、約26,000～29,000年前とされる鹿児島湾の始良大噴火に起因する始良丹沢火山灰が混入し、肉眼でも火山ガラスの結晶を観察できる。その上位に、7,300年前の鬼界カルデラ大噴火に起因する鬼界アカホヤ火山灰が確認される地域があり、遠隔地の火山活動による火山灰が人類史を区分する鍵層となっている。

火砕流堆積物と火山灰によって形成された京町台地は、白川水系の坪井川・井芦川とその支流により開析され、河川の主な流下方向である南北方向に長く伸びる。河川の浸食は非溶結凝灰岩だけでなく溶結凝灰岩も樹枝状に開析し、京町台地は急崖に縁どられる特徴的な地形を呈している。台地表面の起伏は弱く、基盤である火砕流堆積物と同様に北東から南西へ緩やかに下がりながら熊本平野へ至る。



第1図 熊本城跡位置図



熊本県地質図（10万分の1）説明書（2008）より加筆引用

凡例

- A4：阿蘇-4火砕流堆積物 Kbo：金峰火山古期噴出物 A13：阿蘇-1~3火砕流堆積物 t1：低位段丘堆積物 t2：中位段丘堆積物
 Ki：金峰火山新期堆積物 Ys：芳野層 ta：崖錐堆積物 Kbm：金峰火山中期噴出物 Kum：熊本層群 Ai：赤井火山（砥川溶岩）
 Mu：御船層群上部層 FH：布田層・花房層 MI：御船層群下部層 vg：苦鉄質火山岩類 cc：結晶質チャート um：超苦鉄質岩類
 Gks：雁回山層 O11：大岳古期輝石安山岩溶岩 O13：大岳新期角閃石安山岩溶岩 O14：大岳新期輝石安山岩溶岩
 Op1：大岳新期角閃石安山岩火砕岩 Op2：大岳新期輝石安山岩火砕岩

※黒線の範囲は自然堤防の範囲を示す。

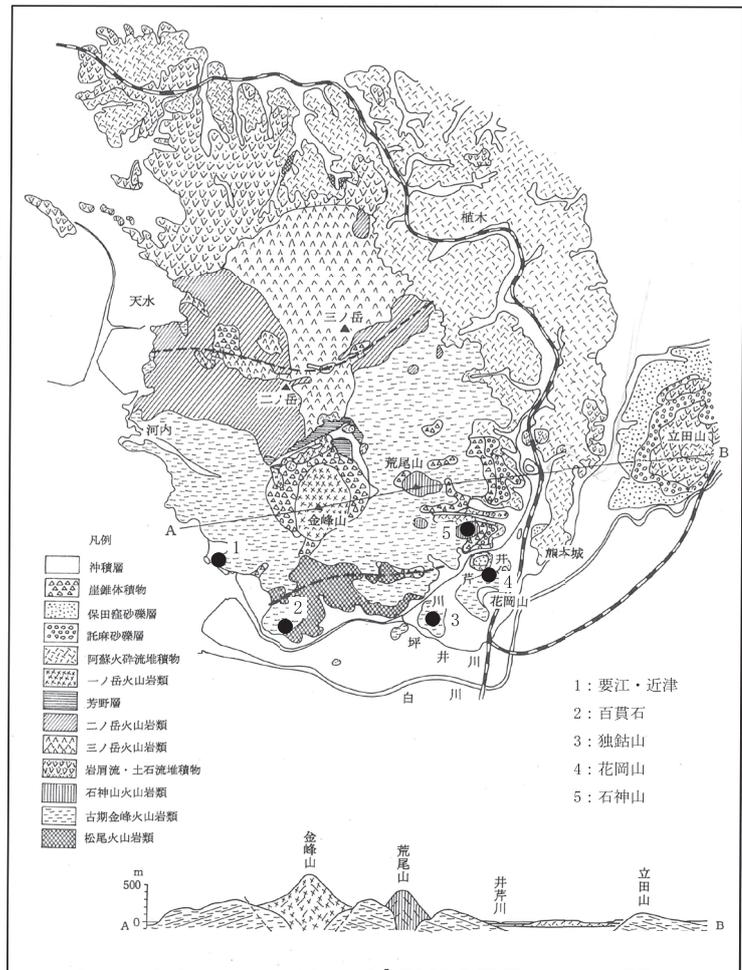
第2図 熊本市周辺の地質図

(2) 金峰山塊の岩質

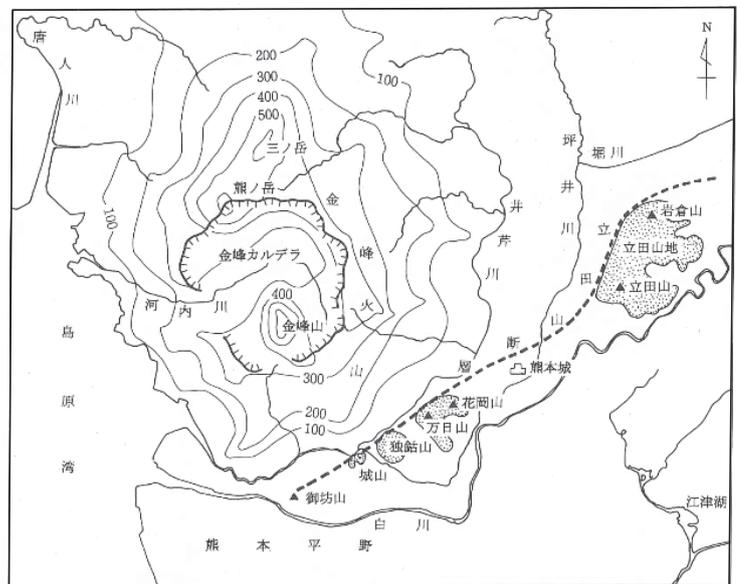
熊本城跡の石垣の大半は輝石安山岩である。これは金峰山塊で産出される安山岩の一つで、立地も含めて金峰山塊が主産地と想定されている。実際に、矢穴の痕が残る転石も確認されている。以下に石垣石材の生成に絡む金峰山塊について記す。

金峰山塊は、一つの大きな成層火山ではなく、多くの火山の集合体である。火山の活動は2期に大別され、古期噴出物としては、80～120万年前の活動による松尾山火山岩類・古期金峰火山岩類・石神山火山岩類があり、新期噴出物としては、三ノ岳火山岩類・二ノ岳火山岩類・カルデラ形成後に成長した一ノ岳（中央火口丘）火山岩類がある（第3図上）。古期噴出物の岩質は、玄武岩・輝石安山岩・角閃石安山岩など多様であり、うち角閃石を少量含む輝石安山岩が主体をなす。これは、粘性の強い溶岩噴出によって生成されたもので、肌理が細かく、割るのにも適していることから、加工石材として現在も広く利用されている。現在の安山岩類の採掘場は、古期噴出物から形成される地域、すなわち外輪部の南東―南―西側で数箇所が知られる。

外輪部とはやや離れるが、地質的に同質の火山噴出物で構成された丘陵がみられる（第3図下）。岩倉山・立田山・花岡山・万日山・独鈷山・城山・御坊山で、北東―南西方向に並び、南西になるにつれて、順次、面積・高度が小さくなる。この丘陵群は、西側・北東側斜面が急であるのに対して、東側・南西側斜面が緩やかな非対称な断面形を呈する傾向を示す。これは丘陵群にそって立田山断層が存在することに起因しており、本来、外輪部であった丘陵群が断層活動によって金峰山塊から切り離されたためと考えられている。熊本城が立地する茶臼山もこの並び上に当たる。現状では安山岩の露頭はみられないが、昭和35年（1960）の天守再建に先立つボーリング調査で、天守東側地下約35mに安山岩塊を含む層が存在するとされている。先述の丘



金峰火山の地質と砕石推定地



熊本市域の山地分布図

※熊本市『新熊本市史 通史編第1巻』1998より転載

第3図 熊本市域の山地と金峰火山

熊本城が立地する茶臼山もこの並び上に当たる。現状では安山岩の露頭はみられないが、昭和35年（1960）の天守再建に先立つボーリング調査で、天守東側地下約35mに安山岩塊を含む層が存在するとされている。先述の丘

陵群と同様に金峰山塊から切り離された後で火砕流に覆われ小高い地形になった可能性が高い。

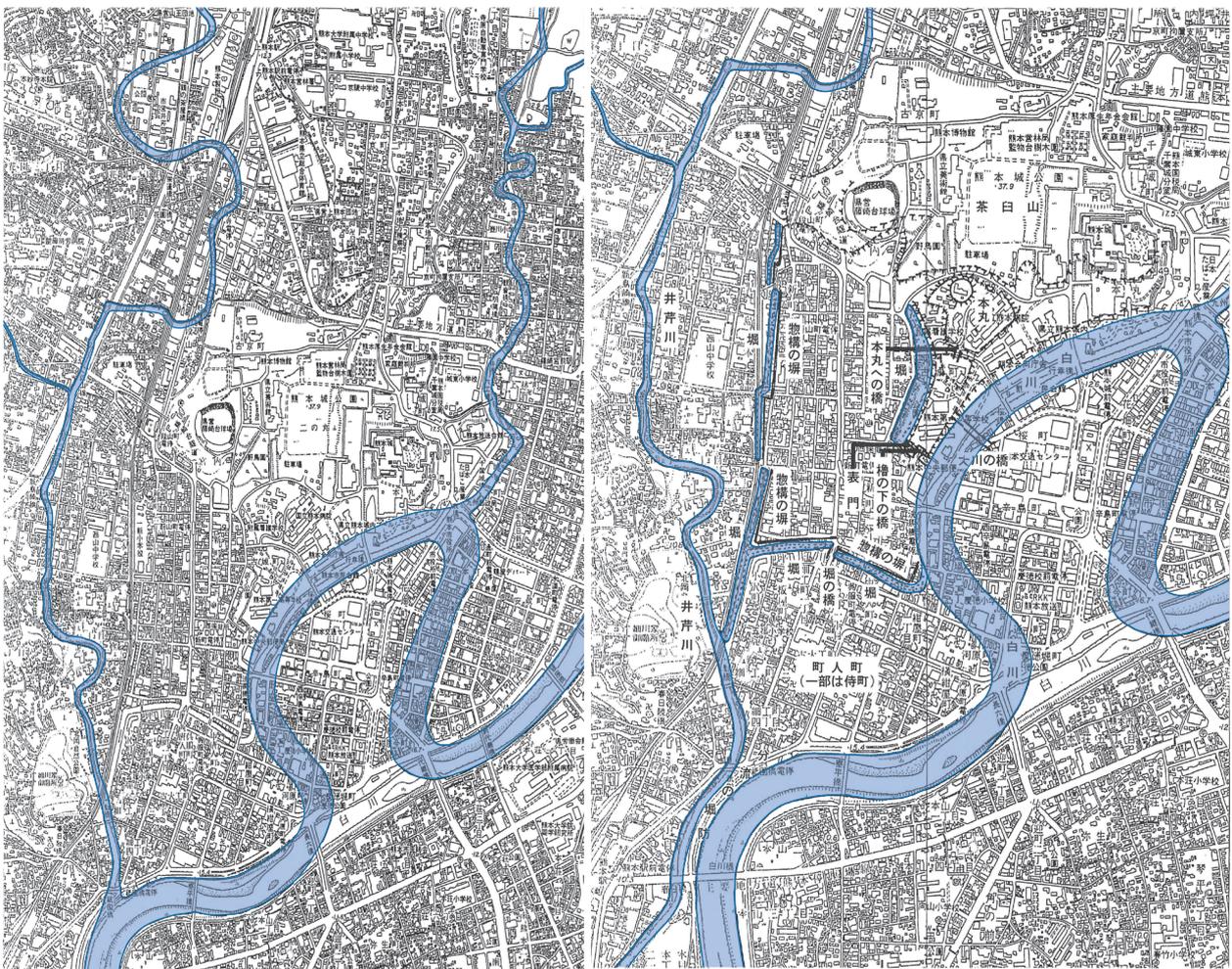
立田山断層は、熊本城の北側付近を走ると想定されている。城内と京町を分ける新堀も、立田山断層に起因する丘陵の狭隘部を利用したとされ、京町台地と茶臼山丘陵を分ける高低差もこの断層によるずれとも考えられている。なお、地質図（第2図）によれば津浦・高平・徳王付近にも同質の噴出物が表示されている。

熊本城石垣の石取場の推定については、富田紘一氏の研究（富田紘一『熊本城の歴史と探訪』第6回加藤清正の熊本城築城『熊本城復刊68号』2007年）がある。これによれば、石垣採石により地形が大きく変化している可能性が高いことから、大量の熊本城石垣の供給を賄い得た場所として、坪井川河口付近の要江・近津を主要採掘地の有力候補としている。この他、岩石学的成果の援用、『肥後国誌』等の伝承、矢穴の痕跡を認める転石などの存在から、石神山・花岡山・独鈷山・百貫石付近などを採石地として紹介している。

（3）熊本城跡の地形

京町台地の先端は、現在の新堀橋付近で東西幅が狭くなり、古来より茶臼山とも呼ばれていたように独立丘陵状を呈している。平面形は、河川開析による大小の弧の連続で構成されており、全体としては現在の第一高校を要とした扇形の地形で、東の千葉城、西の藤崎台、清爽園などの崖面にAso-4火砕流堆積物の非溶結凝灰岩露頭がみられる。

崖面の形成は海進や河川等により削られたものだが、富田紘一の研究成果（富田紘一「白川・坪井川流

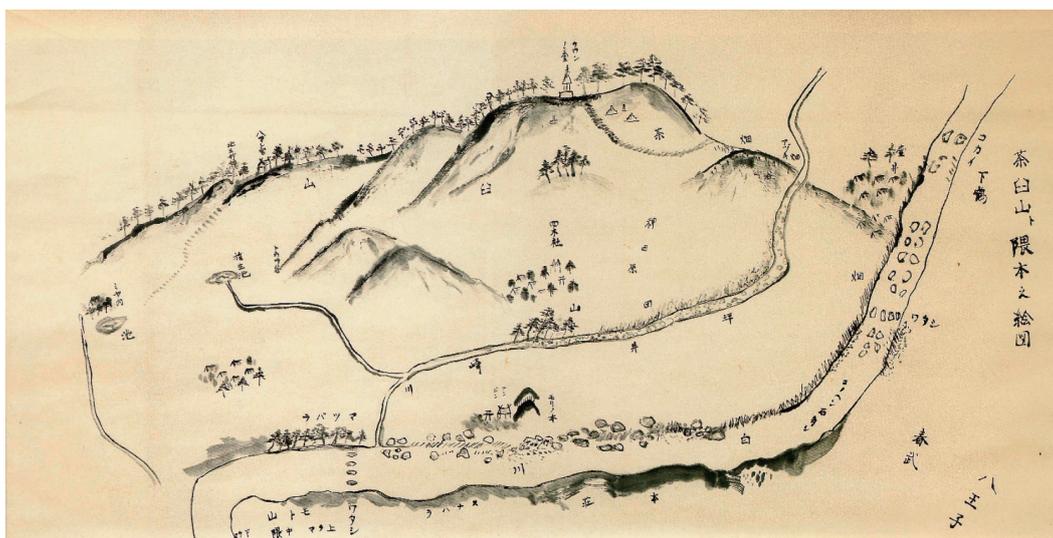


三河川原流路推定復元図

隈本城と城下町の概念図（慶長初年頃のイメージ）

※富田紘一「白川・坪井川流路と城下町の形成」『市史研究くまもと』第7号 熊本市 1996年より一部改変

第4図 三河川の流路と城下町のイメージ



第5図 茶臼山ト隈本之絵図(写)(熊本博物館蔵)

路と城下町の形成」『市史研究くまもと』第7号 熊本市 1996年)によれば、熊本城築城時、白川も京町台地に接して流れていたとされる(第4図)。「慶長国絵図」(公益財団法人永青文庫蔵)などをもとに、現在熊本城跡の南を流れる白川が、世継橋から北側へ大きく蛇行し、市役所付近で坪井川と合流して、これを17世紀初頭に加藤清正が白川を直線化し、現在の流路に付け替えたとするもので、旧白川跡想定地となる下通筋には、現在でも帯状窪地がみられる。この河川の流路変更と合わせて城内の南崖面を概観すると、第一高校のグラウンドに面した崖面、国立病院機構熊本医療センター(以下、「国立病院」という)と桜の馬場の間の段差、桜の馬場と奉行丸の間の段差、東竹の丸の高石垣と連続した高低差の大きい弧状の地形は、白川・坪井川の浸食面であった可能性を想定できる。実際、桜の馬場の発掘調査や第一高校校長官舎建設に伴う発掘調査の際に、流路であった部分を2～5mほどの厚さで埋め立てていることが確認されている。埋立前は、白川・坪井川に削られた崖面が連続していたのであろう。飯田丸は、浸食面と思われる地形の一部に当たると思われるが、曲輪はやや南へ突出した地形となっている。

築城前の旧地形を知る資料としては、「茶臼山ト隈本之絵図」(熊本博物館蔵)(第5図)がある。築城前の地形が独立丘陵状に描かれ、「クワンノン堂」など築城前の土地利用状況を示している。しかし、先の白川の蛇行の表現もなく、いつ頃の景観として描かれたものかわかっていない。ただ旧地形は、この絵図にあるように、現在の本丸付近を最高所として東には急に、西へは緩やかに下がる地形であった。

3. 歴史的環境

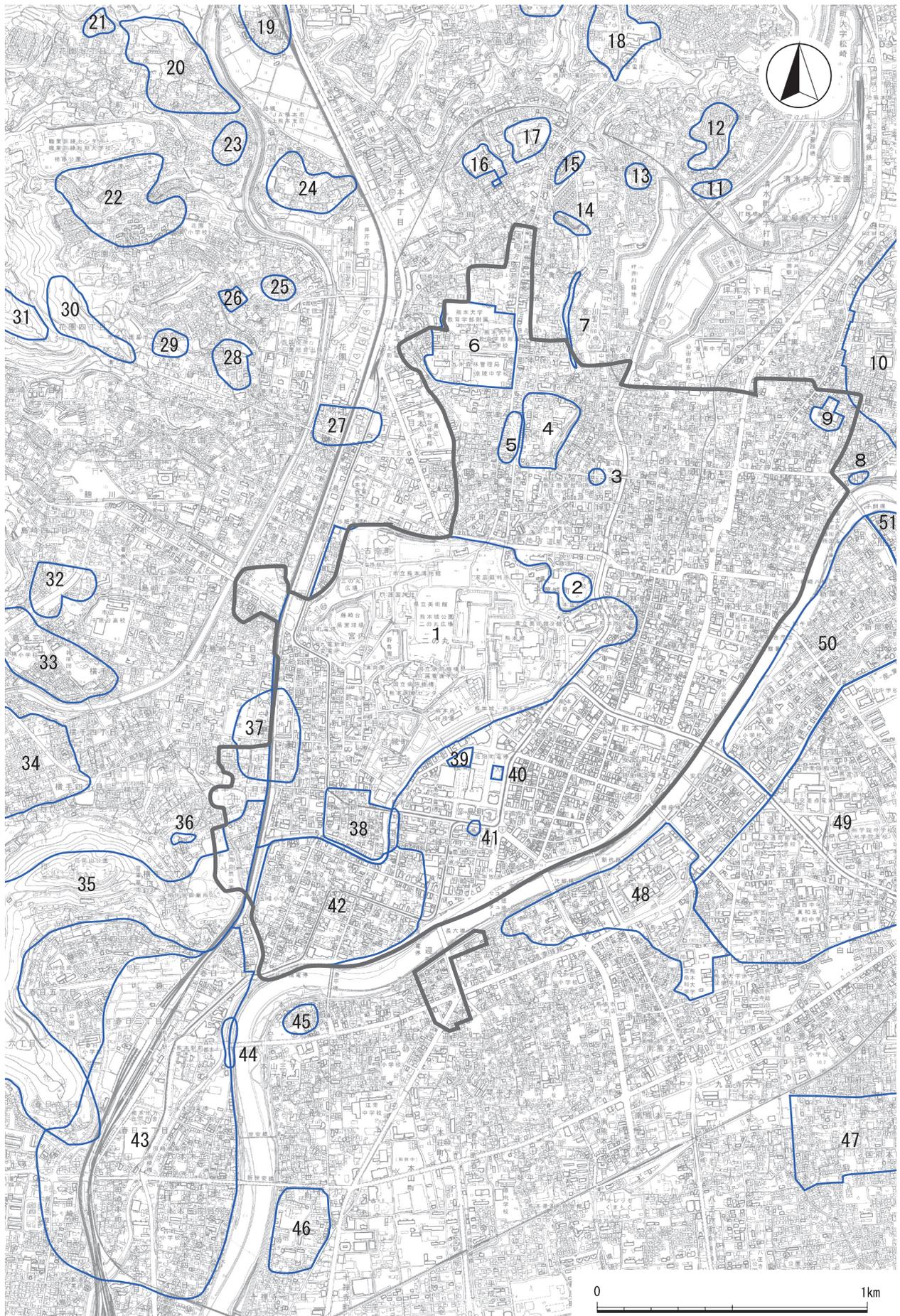
(1) 周辺遺跡の概要

熊本城跡の土地利用の概略としては、古代から中世に国府所在地である二本木遺跡群をはじめ各所へ向かう官道などの交通の要所、中世の寺院、戦国期の城を経て、近世城郭の築城となり、近代の軍用地を経て現在に至る。城下町は、中世までの国府を核とした二本木遺跡群の町屋・寺院を、加藤清正が古町に移して隈本城時代の城下町と融合し、現在に至る。

以下に、熊本城跡遺跡群周辺の旧石器時代～中世について、時代ごとに記す。

市域における旧石器時代の遺跡は、金峰山麓・立田山麓にみられ、山麓から派生する丘陵裾部でも近年出土例が増加しているが、熊本城周辺域ではまだ出土例がない。

縄文時代の遺跡は、金峰山丘陵に濃密に分布する。特に後晩期の遺跡が多く、井芹川上流には太郎迫遺跡や四方寄遺跡など著名な遺跡もある。熊本城跡遺跡群周辺域では、二本木遺跡群で中期から晩期の土器・石器、京町台遺跡群で晩期の遺物、熊本城跡遺跡群の西縁部に当たる段山遺跡で打製石斧や磨製石斧が採



第6図 熊本城周辺遺跡分布図(第1表に対応)

第1表 熊本城周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	主な時代	備考
1	熊本城跡遺跡群	縄文～近代	特別史跡熊本城跡・段山遺跡・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群・古城横穴群・茶臼山廃寺・藤崎宮跡
2	藤園中学校校庭遺跡	弥生中期	甕棺出土
3	内坪井遺跡	弥生	
4	伝大道寺跡遺跡群	弥生～近代	
5	京町2丁目遺跡	近世	
6	京町台遺跡群	縄文～近代	伝赤尾丸城跡
7	寺原横穴群	古墳	
8	子飼遺跡		
9	七棟町遺跡		
10	黒髪町遺跡群	縄文～平安	
11	打越貝塚		
12	打越遺跡群		
13	舟場山古墳	古墳	
14	稗田横穴群	古墳	
15	津浦一ノ谷横穴群	古墳	
16	池田城跡		
17	池田町遺跡（池田小学校遺跡）		
18	池田山伏塚遺跡群		
19	北島遺跡群		
20	柿原遺跡群		
21	シブラ墓地		
22	経塚遺跡群		
23	柿原宮ノ原廃寺		
24	池亀遺跡		
25	井芹遺跡（井芹甕棺遺跡）	弥生中期	
26	井芹城跡	中世	
27	牧崎遺跡（牧崎甕棺遺跡）	弥生中期	1966年、甕棺14基出土。
28	中尾丸城跡	中世	
29	本妙寺北遺跡		
30	本妙寺A箱式石棺群	古墳	
31	本妙寺B箱式石棺群	古墳	
32	石神原遺跡	縄文	
33	千原台遺跡群	縄文	
34	戸坂遺跡	弥生・古代	
35	花岡山・万日山遺跡群	古墳・近世	花岡山箱式石棺群・万日山古墳・万日山東古墳・万日山山頂古墳・妙解寺跡
36	吉祥寺横穴群	古墳	
37	新馬借遺跡	古代・中世	
38	船場町遺跡	弥生中期	1977年、下水道工事中に甕棺出土。
39	山崎古墳	古墳	消失、位置不明瞭。
40	花畑邸跡	中世・近世	加藤・細川時代の藩主邸宅の一部、世継神社跡地
41	辛島町遺跡		
42	古町遺跡	弥生～近世	
43	二本木遺跡群	縄文～近世	北岡神社古墳・北岡神社横穴群・春日町遺跡・古町小学校校庭遺跡・鮑田国府推定地
44	石塘遺跡（白川橋遺跡）		
45	本山城跡	中世	
46	世安池田遺跡		
47	出水国府跡	奈良～平安	
48	本庄遺跡（熊大病院敷地遺跡）	縄文～近代	
49	大江遺跡群	縄文～中世	
50	新屋敷遺跡	縄文～中世	
51	大江白川遺跡		

（第6図の黒線は、『平山城肥後国熊本城廻絵図』（熊本県立図書館蔵）の城下の範囲を示す）

集されている。島崎遺跡でも同時期の遺物が出土している。また、熊本城跡においても地蔵門の脇から縄文時代後期の土器がまとまって出土している。

弥生時代の遺跡は、市域全体で早・前期は少なく、中期から急増する傾向がある。早・前期の資料は、二本木遺跡群から出土している。縄文時代晩期で途切れて弥生時代に連続しない遺跡が多い中で、この二本木遺跡群は、縄文時代晩期から継続して弥生時代早・前期の資料がみられる。扇状地と低地の境界に立地している点など、縄文時代から弥生時代への過渡期を考える上で注目される。弥生時代中期の甕棺も出土し、後期には壕や多数の竪穴建物群が出土している。銅鏃の出土例もあり有力な集落が形成されていたようである。二本木遺跡群の南に位置する八島町遺跡でも多数の竪穴建物が見つかっており、二本木遺跡群と同様な状況がうかがえる。熊本城跡遺跡群の周辺では、城下町が形成された白川右岸の京町台地の先端から南南西に伸びる緩扇状地にかけて、船場町遺跡の中期の甕棺、古町遺跡の中期の甕棺（唐人町遺跡）や、後期の竪穴建物群が出土しており、弥生時代中期頃から本格的な土地利用が始まったようである。後期には、桜町周辺・古町遺跡・二本木遺跡群・八島町遺跡・南新宮遺跡など、数百mから1km程度の距離をおきながら集落が営まれており、各集落間の関係性が注目される。他にも井芹遺跡・牧崎遺跡・藤園中学校校庭遺跡で中期の甕棺が出土している。

古墳時代の熊本城跡遺跡群周辺については、前期に京町台遺跡群と本庄遺跡で区画溝が見つかっており、ともに前期後半～末に集落の形成が始まっている。中期は本庄遺跡で多数の竪穴建物群が見つかる。後期は京町台地に特徴的な崖地形に多数の横穴墓が造られている。熊本城跡遺跡群内にも古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群がある。さらに北には、寺原横穴群や、津浦一の谷横穴群などがあり、熊本市域の横穴墓集中地の一つである。古城横穴群は、崖面に3段にわたって築かれ、数回の発掘調査で53基の横穴墓が確認されている。そのうち39号には「火守」あるいは「火安」と読める文字が刻まれた閉塞石があり、墓室からは鉄滓が出土している。被葬者の職制を反映したものと想定されている。千葉城横穴群は、昭和37年（1962）にNHK熊本放送局建設の際に発掘調査が行われ、10基の横穴墓が出土した。横穴墓の配置は、「コ」字状に前庭部を共有した横穴群であった可能性もある。これらの横穴群の集中に対して、墳丘を持つ古墳の分布は少ない。緩扇状地上にあった船場山古墳・長迫古墳・山崎古墳は、開発によって消滅し位置も不明瞭である。その中で山崎古墳は、長瀬真幸の調査記録により、寛政8年（1796）に主体部が発見されたことが知られる。発見の経緯と人骨や遺物の良好な出土状況は、長瀬の知友であった伴信友の『信友随筆』などに収録されて今日に伝えられている。

京町台地から離れたところでは、花岡山・万日山遺跡群や二本木遺跡群で墳墓がみられる。古墳についてはいずれも現存していないが、注目事例を記しておく。花岡山箱式石棺群（花岡山・万日山遺跡群）では、箱式石棺の近くから中期の土師器壺が出土している。この壺には、中に碧玉製勾玉2個・碧玉製管玉1個・ガラス玉26個が納められており、地鎮行為に伴い埋納されたものと考えられている。万日山古墳（花岡山・万日山遺跡群）は、石室の構造、出土遺物から7世紀前半に比定される。全長12.3mの特異な構造の横穴式石室は、玄室の左右に石屋形を設け奥壁に刳抜式の家形石棺を設置している。家形石棺については畿内の要素がみられる。これらの点から、本古墳は当該地域における首長墳と捉えられ、安閑2年（535）に当該地域に設置されたとされる春日の屯倉との関連性も考慮される。北岡横穴群（二本木遺跡群）は、上下3段に展開し、下段は枝分かれ状に伸びる長い前庭部をもつ。前庭部を派生させて新たな造墓を行ったもので、県下に類例は少なく、北部九州の遠賀川流域に認められる特徴である。墳墓に対して集落は調査例が少なく、二本木遺跡群に後期の井戸がある。

古代において最も注目されるのは二本木遺跡群で、7世紀末以降、遺跡の隆盛が著しく、特に8世紀後半～9世紀前半において充実している。これまでの発掘調査で、大規模な建物を含む規格的な配置の建物群や、陶硯・瓦の大量出土から官衙施設と想定される遺構を検出している。少なくとも郡衙以上の規模と

内容を持った施設で、国府とみなしても何ら遜色ない。官衙施設の周辺には、竪穴住居や掘立柱建物で構成される大規模な集落が広がっており、輸入陶磁器・国産陶器や腰带具・文字土器などの希少遺物も大量に出土している。特に集落の端にある村落内寺院付近で出土した唐三彩は注目される。二本木遺跡群以外に、古代飽田郡の施設とみられるのが京町の伝大道寺跡遺跡群である。京町一帯は近世に武家屋敷・町人町として開発され、そのまま現在の市街地になっているため近世以前の様相はわかりにくい。本遺跡からは7世紀後半から9世紀の瓦が出土している。この期間の瓦が継続して出土する遺跡は熊本市域では今のところ本遺跡のみである。伝大道寺跡遺跡群付近には、養蚕駅から西へ延びる官道が想定されており、飽田郡の重要地点に造られた施設であった可能性もある。なお、熊本城内でも二の丸・三の丸・監物台で古瓦や土師器・腰带具が出土している。ほか戸坂遺跡でも古代の集落（竪穴建物・掘立柱建物）が確認されている。

中世も引き続き二本木遺跡群が隆盛する。二本木遺跡群では近世まで遺構・遺物が途切れなく認められる。10世紀代に当該地に国府が移転・設置され、これに連動して肥後国の中心として周辺域が発展したことによるとみられる。遺構・遺物ともに膨大・多様であり、溝による半町単位の矩形土地区画がみられるなど、都市的な様相を呈する。資料数・範囲は10世紀後半～11世紀代において限定的であるものの、12世紀代には急増して、ピークをみる。その後も多くの資料が認められ、都市として繁栄したことが窺われる。しかし17世紀前半には急減・衰退する。これは加藤清正の入国により、熊本城下（古町遺跡）に町屋・寺院が移転したことによるものと理解されている。古町遺跡にも中世の資料が認められるが、これは二本木遺跡群における都市の拡大・伸長によるものと想定される。

中世城としては、国衆といわれる在地豪族の居城である隈本城（千葉城・古城跡—いずれも熊本城跡遺跡群内）、鎌倉御家人詫磨氏の居城とされる本山城があげられる。第一高校では、発掘調査により、散兵線とされる溝や版築土塁を検出している。本山城跡は字名から城域が想定されているが、現況の地形や試掘確認調査の成果からは城の存在は不明瞭である。京町台遺跡群で中世末期の堀が確認されている。

中世の石造物資料は、熊本城内（熊本城跡遺跡群）や古町遺跡内の寺院に分布している。熊本城内のものとしては、大永2年（1522）銘「釈迦立像線刻板碑」、本丸御殿南に大永4年（1524）銘「如意輪観音像線刻板碑」、天文5年（1536）銘「阿弥陀三尊種子板碑」など、16世紀前半までの板碑がある。五輪塔地輪も礎石や石垣の一部に転用されており、熊本城築城以前の茶臼山には中世寺院（茶臼山廃寺）が存在したと想定されている。古町遺跡の寺院内には、善教寺境内の建長2年（1250）銘宝塔塔身が最古例としてあり、15世紀末から16世紀前半の板碑が多く見られる。

（2）熊本城と城下の変遷

熊本城や城下について、文献のほか発掘調査などで考古学的所見が得られた内容を加味し、時代を追いながら記述する。

熊本城が文献に登場するのは、南北朝時代である。肥前国松浦の大嶋堅と大嶋政の永和3年（1377）の軍忠状にみえる「隈本城」が初出で、位置の特定はされていない。

熊本城跡遺跡群内での端緒は、応仁年間に出田秀信が茶臼山の東側に迫り出した千葉城と呼ばれる一帯に城を築いたことに始まるとされる。なお地名としての千葉城は旧城域の中で東端台地にある。旧NHK熊本放送局建設時の発掘調査で横穴群が発見されたことから、旧地形が残されていることは明らかである。またその北側にはかつて旧城域を区分していた旧坪井川の流路も残り、歴史的景観を留めている。その後、『肥後国誌』によれば、明応5年（1496）に鹿子木親員（寂心）が築き、城親冬が天文19年（1550）に入城したという隈本城の城域は、第一高校から国立病院敷地内一帯と想定されている。現在でも古城という地名が残り、第一高校周辺には城内最古の石垣が良好な状態で残存している。発掘調査としては、第一高

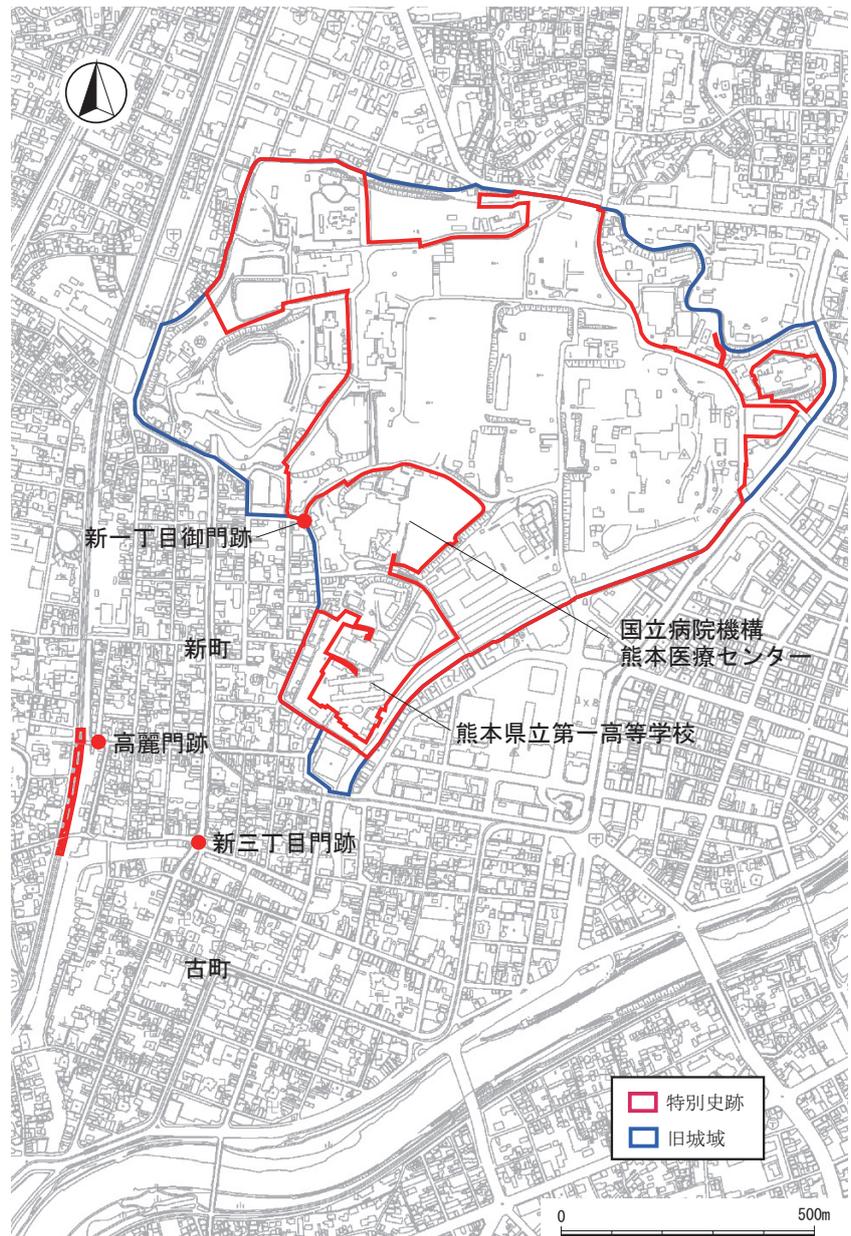
校セミナーハウス建築に伴う調査で15世紀中葉から16世紀後半の陶磁器が出土し、国立病院の看護学校建設に伴う調査で16世紀前葉からの掘立柱建物群が出土している。この掘立柱建物群は堀・柵・櫓で構成された防御施設で、鹿子木氏・城氏の在城時期と合致することから、当時の城域を考える上で重要な調査成果となった。

隈本城には、天正15年(1587)に佐々成政が、翌天正16年には加藤清正が入城し、清正は中世の城を織豊城郭に改修を進めている。その後、加藤清正は隈本城を拡大して、京町台地南端の茶臼山一帯に熊本城を築城した。出土資料としては、「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦が出土しており、少なくとも慶長4年(1599)から何らかの工事が行われていたと考えられる。本城整備に伴って、白川・坪井川の改修、城下町の再編成も行われた。先述のように、大きく蛇行していた白川の流路を直線的に付け替え、それまでの白川流路と隈本城惣堀を利用して坪井川を開削したと考えられている。これにより、熊本城南側の防御線は、坪井川を内堀、白川を外堀に相当させることで強化され、加えて城下の洪水解消、武家屋敷の面積拡大、船運路の整備にもつながった。

旧白川の流路にあたりと想定される桜の馬場地区の発掘調査でも、17世紀初頭に埋め立てられた土層が確認されている。同じ旧流路の下流にあたりと想定される第一高校の校長官舎建設に伴う発掘調査でも、厚さ5mにわたる版築層が検出され、その下位に河道を示す砂地が確認されている。いずれも旧白川の埋め立てに関連する調査成果である。国立病院の看護学校建設に伴う調査では、加藤期と想定される道路が見つかり、築城に際した資材運搬用の修羅道の可能性が指摘されている。

加藤治世期の末、寛永6～8年(1629～1631)頃の作と推定される「熊本屋敷割下図」(熊本県立図書館蔵)は、拡大・再編された城下町の様子を知る最古の資料である。この絵図にみえる城下町の範囲は、東から南は白川、北は出京町、西は段山から新町の高麗門・古町西側の坪井川・井芹川・石塘までである。北側の京町は、京町台地の東側・西側が急崖で囲まれており、北端に空堀と土塁を設けていた。

現在の新町は、隈本城時代の侍町として始まり、その後惣構として整備された。惣構は、西側には新町



第7図 熊本城周辺図

西側の水堀と堀の東側に土塁を設け、南側は新たに掘削した坪井川で区切った。惣構と城内を区切るのは新一丁目御門で、現在の法華坂の清爽園付近にあった。枳形を伴う櫓門であったが、枳形を含めて現存しない。門の前は広場となり、高札が掲げられた札ノ辻と呼ばれ、各方面に延びる街道の起点となつたとされる。惣構の西側は城の裏鬼門にあたるため寺町を整備し、惣構との連絡に「こうらい（高麗）門」が設けられた。

惣構の南側の古町には、古府中から移転した町屋が整備された。古町遺跡の発掘調査資料は、このことを反映しており、16世紀末～17世紀初頭から増加する。惣構内の新町が短冊形の町割で、「T」「L」字状の道が多いのに対して、古町は方一町の碁盤目状の区画の中央に寺院を配置するという特異な町割が形成された。町割形成当初の武家地と町屋の違いと考えられ、その間は坪井川で明確に区切られている。惣構と町屋の連絡には、惣構側に新三丁目門と坪井川に現明八橋が設けられた。新三丁目門は、絵図では枳形を伴う櫓門であることが分かっていたが、近年発見された長崎大学図書館所蔵の古写真で、城内の櫓門に匹敵する規模であったことが分かった。古町の一角の阿弥陀寺周辺に土塁の残存がみられ、惣構のように戦略上の配慮や水害対策が施されていた可能性もある。

明治維新の後、明治4年（1871）に、城内に鎮西鎮台が設置され、その後熊本城は第二次世界大戦終了まで大日本帝国陸軍の管理下に置かれた。明治初期には、各地の城郭と同じように熊本城でも櫓・塀・石垣の解体や改修が行われ、明治10年（1877）には西南戦争の主戦場の一つとなり、天守をはじめとする本丸中心部の大半の櫓が焼失した。本丸御殿の発掘調査では、焼失した御殿の建築材、金具などが焼損した状態で焼土とともに多量に出土している。これは西南戦争では城下町も戦場となり、「射界の清掃」戦略で意図的に火が放たれたものと考えられ、大半が焼失した。その痕跡は、新馬借遺跡や古町遺跡での発掘調査で確認されており、古町遺跡の発掘調査では、江戸期の表土を広範に覆う焼土層と判断された。

西南戦争の後、軍施設はさらに整備され、明治21年（1888）には第六師団となる。軍の組織が整備されるに伴い、城内各所に新たな施設が建てられ、現在の天守前広場には大正6年（1917）に師団司令部が置かれた。桜の馬場地区は、西南戦争以前から砲兵隊が置かれ、その後兵器工廠となった場所で、平成20・21年（2008・2009）に行われた同地区の確認調査で、大正年間（1912～1926）に造られた工廠の煉瓦造り建物の基礎が確認されている。西南戦争で焼失した城下町にも、戦後、山崎練兵場など軍関係の施設が整備されていく。

明治22年（1889）に就任した第3代熊本市長辛島格は、熊本市を九州地方の中核管理都市にすべく尽力し、周辺町村との合併や三大事業と呼ばれる上水道の整備・市電の敷設・歩兵第二十三連隊の移転を推進した。旧城下町にあたる山崎練兵場などの軍施設の移転は、当時の時代性もあり難航を極めたが、飽田郡大江村（現在の熊本市中央区大江）に移転することで同意がなされた。移転は明治33年（1900）に行われ、市街地を分断していた練兵場跡地は新市街となり、現在につながる市街地形成が行われた。山崎練兵場が移転した先の大江遺跡群では、移転後、軍による大規模な造成が行われ、土地が平坦化されるとともに多くの遺跡が失われた。発掘調査では、三角兵舎の柱穴跡や塹壕跡がしばしば確認され、第二次世界大戦頃の軍用品が出土することも少なくない。

熊本城は、大正末期から城跡の保存・顕彰が叫ばれるようになり、熊本城址保存会が発足した。この会が中心となって、昭和2年（1927）に宇土櫓を解体・修理、長塀を改築している。昭和8年（1933）には熊本城全域が史跡となり、残存していた建造物が国宝に指定されている。昭和25年（1950）、文化財保護法により国宝建造物が重要文化財に指定され、昭和30年（1955）には城内の主要部分が特別史跡に指定されている。昭和35年（1960）には大天守が小天守とともに鉄骨鉄筋コンクリートで外観復元された。昭和50年（1975）には西出丸戌亥櫓跡から西大手門跡の石垣が復元された。

昭和57年（1982）には『特別史跡熊本城跡保存管理計画』（以下、「保存管理計画」という）がまとめ

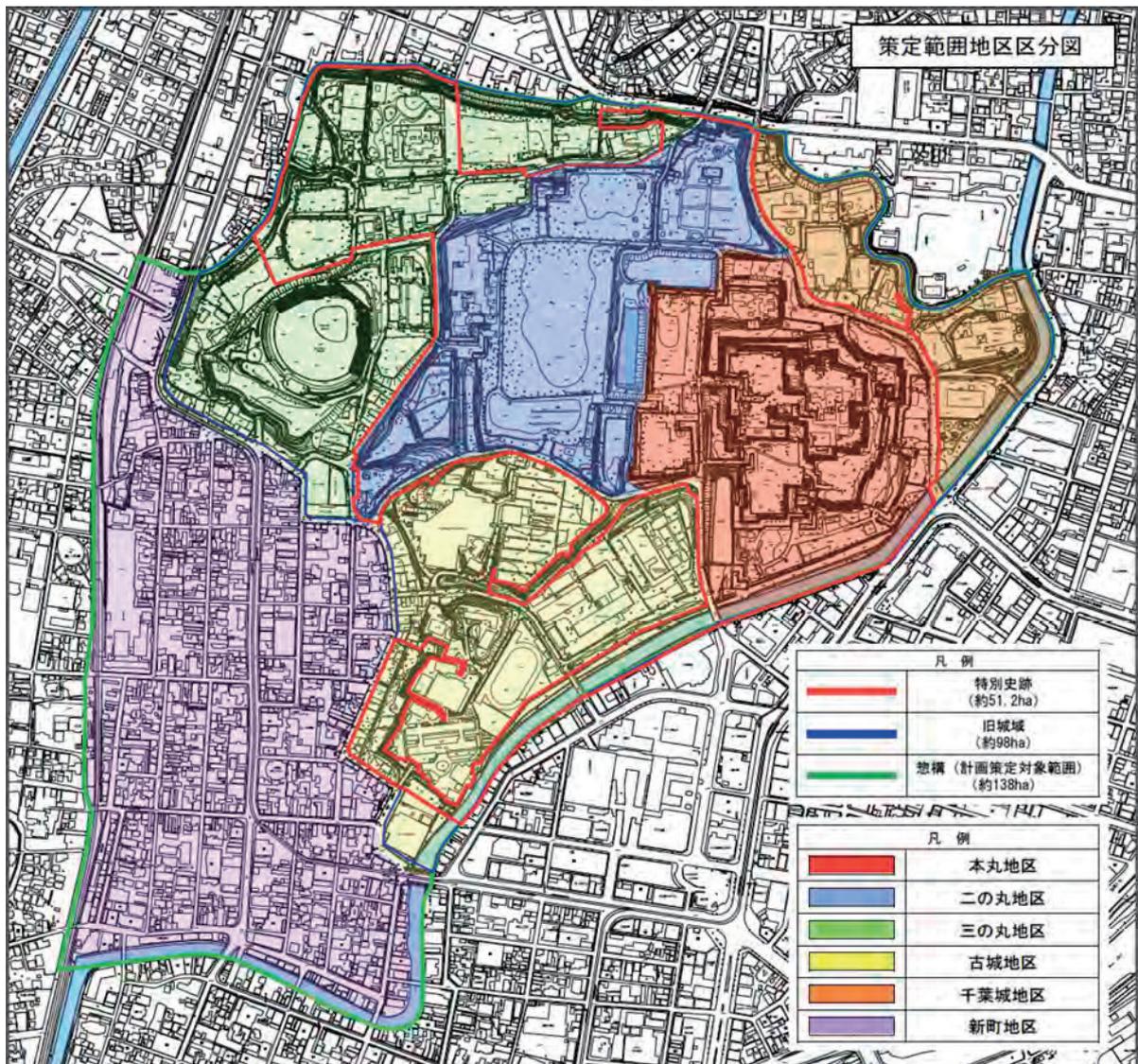
られ、保存と整備の方針が決まる。昭和 56 年（1981）には西大手門の再建が行われ、平成元年（1989）には宇土櫓の修復と数寄屋丸二階御広間の復元が行われた。平成 3 年（1991）、台風 19 号の襲来により長堀中央部分が倒壊した。平成 5 年（1993）には熊本城三の丸一帯を熊本市が買収し、東子飼町にあった旧細川刑部邸を移築復元している。平成 11 年（1999）、台風 18 号により西大手門が倒壊する。平成 14 年（2002）の南大手門の復元をはじめ、平成 15 年（2003）には戌亥櫓、未申櫓、元太鼓櫓、西大手門と西出丸一帯の復元が完了した。平成 17 年（2005）には飯田丸五階櫓の復元が完了する。平成 19 年（2007）には熊本城築城 400 年を記念して本丸御殿大広間を復元し、平成 20 年（2008）から公開した。

平成 28 年熊本地震で石垣、地盤、重要文化財建造物、再建・復元建造物、便益・管理施設などに甚大な被害が発生した。現在は平成 28 年（2016）12 月に策定された「熊本城復旧基本方針」及び平成 30 年（2018）3 月に策定された『熊本城復旧基本計画』に基づいて、城内各所の復旧工事を進めている。また昭和 57 年（1982）作成の「保存管理計画」を大幅に改訂する形で、平成 30 年（2018）3 月に『特別史跡熊本城跡保存活用計画』がまとめられ、今後の特別史跡熊本城跡についての保存と整備の方針を策定した。

4. 特別史跡の構成要素

(1) 地区区分

特別史跡熊本城跡では、『特別史跡熊本城跡保存活用計画』における地区区分との整合を図るため、旧城



※『特別史跡熊本城跡保存活用計画』 2018年より

第 8 図 特別史跡熊本城跡地区区分図

域を5つに区分して保存管理を行っている。西出丸から東側の天守閣や本丸御殿のある熊本城の中核部分を本丸地区としている。その北西側で、二の丸公園を中心に野鳥園や監物台樹木園を含めた部分を二の丸地区、そのさらに北西側を三の丸地区としている。また二の丸地区の南側で、二の丸地区から一段下がった国立病院から第一高校にかけての部分を古城地区、本丸地区の北東側を千葉城地区としている。

(2) 構成要素

① 石垣

熊本城の石垣は、総延長8.7km、面積約79,000㎡に及ぶ。加藤清正が肥後入国後、最初に築いた石垣は熊本城の前身である「隈本城」のもので、古城地区の第一高校一帯に残存する。加藤清正は新城を築くにあって、茶臼山の東から西へ緩やかに下がる地形を活かし、本丸を東側の最高所としたため、石垣は城内でも東側に集中して築かれ、本丸地区が箇所数・面積ともに他の地区を圧倒している。

本丸の東側は急傾斜で、天守閣や本丸御殿のある最上段から2～3段の高石垣を築き、南側は急傾斜ではないが、高低差があり、その地形を活かして3～5段の石垣を重ねて防衛線としていた。一方、西側・北側は高低差があまり無いため、L字型の堀を2重に設けて防衛線とし、堀の本丸側に石垣を築いている。

二の丸地区では、崖線など自然地形を改変して防衛線とし、石垣は門などの要所に築かれ、三の丸地区は自然地形を活かした防衛線で、北西端の森本櫓一帯に石垣が築かれていた。

なお、地区ごとの箇所数(面)と面積は、第2表のとおりである。

第2表 石垣の概要(熊本城域の史跡指定地外を含む)

地区名	箇所数	面積
本丸地区	624 面	55694.95 ㎡
二の丸地区	99 面	7769.74 ㎡
古城地区	97 面	8560.72 ㎡
三の丸地区	143 面	6776.76 ㎡
千葉城地区	10 面	230.95 ㎡
合計	973 面	79033.12 ㎡

② 重要文化財建造物

熊本城には、櫓11棟、櫓門1棟及び長塀の計13棟の国重要文化財に指定されている建造物が残存する。このうち櫓1棟が二の丸地区にあるほか、本丸地区に所在し、明治10年(1877)の西南戦争の際の焼失等で大小天守や本丸御殿などの中心建物は現存しないが、本丸地区を縁取るように残存する。現存する櫓の中で最大規模の宇土櫓は天守閣の西側に位置し、深い堀に築かれた高石垣の上に建つ姿は熊本城の代表的な景観の一つに数えられる。

本丸の東側は、元々の地形の急傾斜を利用した防衛線で、数段重なる曲輪に合わせて高石垣が築かれており、本丸の北東から南東に残存する櫓はこの高石垣上に建てられている。田子櫓・七間櫓・十四間櫓・

第3表 重要文化財建造物の概要

区分	名称	創建年代	構造形式	規模	地区
国	宇土櫓	慶長期	木造五階、本瓦葺	914.65 ㎡	本丸地区
国	田子櫓	慶長期	木造単層、本瓦葺	49.96 ㎡	本丸地区
国	七間櫓	慶長期	木造単層、本瓦葺	66.99 ㎡	本丸地区
国	十四間櫓	慶長期	木造単層、本瓦葺	162.11 ㎡	本丸地区
国	四間櫓	慶長期	木造単層、本瓦葺	46.49 ㎡	本丸地区
国	源之進櫓	慶長期	木造単層、本瓦葺	108.40 ㎡	本丸地区
国	東十八間櫓	慶長期	木造単層、本瓦葺	234.70 ㎡	本丸地区
国	北十八間櫓	慶長期	木造単層、本瓦葺	144.37 ㎡	本丸地区
国	五間櫓	慶長期	木造単層、本瓦葺	35.37 ㎡	本丸地区
国	不開門	慶長期	木造櫓門、本瓦葺	59.70 ㎡	本丸地区
国	平櫓	慶長期	木造単層、本瓦葺	111.17 ㎡	本丸地区
国	長塀	慶長期	木造土塀、本瓦葺	242.44 ㎡	本丸地区
国	監物櫓	慶長期	木造単層、本瓦葺	140.33 ㎡	二の丸地区
国	細川家舟屋形(波奈之丸)				熊本博物館に展示
県	旧細川刑部邸			671.9 ㎡	三の丸地区

四間櫓・源之進櫓は、本丸の南東側に連続して建てられた単層櫓群である。東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓は、本丸の東端に建てられた単層櫓群で、元々は不開門に連なっていた。平櫓は、天守の北東に位置した単層櫓である。櫓門で唯一残存する不開門は、城の鬼門に当たる部分に設けられた門で、通常は閉鎖されていたと考えられている。長堀は本丸の南側の坪井川沿いに建てられた堀である。本丸地区以外にある監物櫓は、城城北端の新堀に望む単層櫓で、本来の名称は長岡図書預櫓（新堀櫓）である。

昭和8年（1933）に国宝保存法で当時の国宝指定を受け、昭和25年（1950）8月28日文化財保護法（法律214号）により、13棟すべてが重要文化財となった。また昭和36年（1961）3月23日には、監物櫓の所有が熊本県から国に移管された。昭和34年（1959）7月25日には、宇土櫓・不開門・平櫓・監物櫓・長堀の5棟について管理団体に熊本市が指定され、その後昭和37年（1962）3月31日にはその他8棟が追加され現在に至っている。これら国重要文化財建造物のほか、三の丸地区に県指定重要文化財「旧細川刑部邸」がある。江戸時代に細川刑部家の下屋敷として熊本市中央区区子飼町にあったものを平成5年（1993）に移築復元したものである。

このほか、熊本市立熊本博物館に展示されている国指定重要文化財「細川家舟屋形（波奈之丸）」がある。

③ 再建・復元建造物

建造物の復元整備は、昭和35年（1960）の天守閣の外観復元に始まり、昭和40年代までは外観復元のみで、鉄筋コンクリート造やコンクリートブロック造で建てられていた。その後、昭和56年（1981）の西大手門からは木造による史料に基づく復元が行われるようになった。なお、熊本城において再建・復元された建造物は、第4表のとおりである。

第4表 再建・復元建造物の概要

名称	復元年	復元構造
天守閣	昭和35年度再建	鉄骨鉄筋コンクリート造
本丸御殿大広間	平成19年度復元	木造
長局櫓	平成19年度復元	木造
数寄屋丸二階御広間	平成元年度復元	木造
宇土櫓堀	平成元年度復元	木造
飯田丸五階櫓	平成16年度復元	木造
戊亥櫓	平成15年度復元	木造
西出丸堀	平成15年度復元	木造
西大手門	昭和56年度復元、平成15年度再復元	木造
南大手門	平成14年度復元	木造
元太鼓櫓	平成15年度復元	木造
奉行丸北側堀	平成15年度復元	木造
奉行丸西側堀	平成15年度復元	木造
未申櫓	平成15年度復元	木造
奉行丸南側堀	平成15年度復元	木造
奉行丸東側堀	平成15年度復元	木造
馬具櫓	平成26年度復元	木造
馬具櫓続堀	平成26年度復元	木造
櫓方門	昭和32年移築	木造
平御櫓続堀	昭和35年度再建	コンクリートブロック造（一部木造）

5. 平成28年熊本地震と被災状況

(1) 平成28年熊本地震について

平成28年（2016）4月14日21時26分に熊本県熊本地方の深さ約10kmでマグニチュード（M）6.5の地震、その後、4月16日1時25分に同地方で同じく深さ10kmでマグニチュード（M）7.3の地震が発生した。これら一連の地震活動は熊本県熊本地方から大分県中部に及び、熊本県では最大震度7を観測され、

多大なる被害を及ぼした。のちに「平成 28 年熊本地震」と命名されたこれら一連の地震活動により、熊本城跡も過去に類をみない甚大な被害を受けた。

第 5 表 地震の震源及び規模等

項目	前震	本震
地震発生時刻	平成 28 年 (2016 年) 4 月 14 日 21 時 26 分	平成 28 年 (2016) 4 月 16 日 1 時 25 分
震央地名	熊本県熊本地方	熊本県熊本地方
発生場所 (緯度経度)	北緯 32 度 44.5 分、東経 130 度 48.5 分	北緯 32 度 45.3 分、東経 130 度 45.8 分
発生場所 (深さ)	深さ 11km	深さ 12km
規模 (マグニチュード)	6.5	7.3
最大震度	7 (熊本県益城町)	7 (熊本県益城町、西原村)

(2) 熊本城跡における被害の状況

熊本地震による熊本城跡における被害は、宇土櫓、平櫓、不開門、五間櫓、北十八間櫓、東十八間櫓、源之進櫓、四間櫓、十四間櫓、七間櫓、田子櫓、長塀、監物櫓の国重要文化財建造物 13 棟や県指定重要文化財「旧細川刑部邸」、天守閣、本丸御殿、飯田丸五階櫓等の再建・復元建造物 20 棟 (以下、建造物等という)のすべてが倒壊・崩落一部損壊等を含め被災した。石垣は全体の約 3 割にあたる約 23,600 m²に崩落や膨らみ・緩みなど修復を要する箇所が見受けられた。このほか、便益施設等 26 棟も屋根や壁が破損し、地盤についても約 12,345 m²に陥没や地割れが発生するなど、熊本城全域に及ぶこととなった。

第 6 表 熊本城の被害状況 (熊本城域の史跡指定地外を含む)

平成 28 年 (2016) 4 月 14 日 21 時 26 分 (前震 M 6.5)

区分	被害内容等
石垣	崩落 6 箇所、膨らみ・緩み多数
重要文化財建造物	10 棟 (長塀 80 m 崩壊、9 棟は瓦・外壁落下など)
再建・復元建造物	7 棟 (天守閣瓦落下、壁ひび、塀崩壊など)

平成 28 年 (2016) 4 月 16 日 1 時 25 分 (本震 M 7.3)

区分	被害内容等
石垣	膨らみ・緩み 517 面約 23,600 m ² (全体の 29.9%) うち崩落 229 面約 8,200 m ² (全体の 10.3%)
地盤	陥没・地割れ 70 箇所約 12,345 m ²
重要文化財建造物	13 棟 (倒壊 2 棟、一部倒壊 3 棟、他屋根・壁破損等 8 棟)
再建・復元建造物	20 棟 (倒壊 5 棟、他下部石垣崩壊・屋根・壁破損等 15 棟)
便益施設等	26 棟 (屋根・壁破損等)

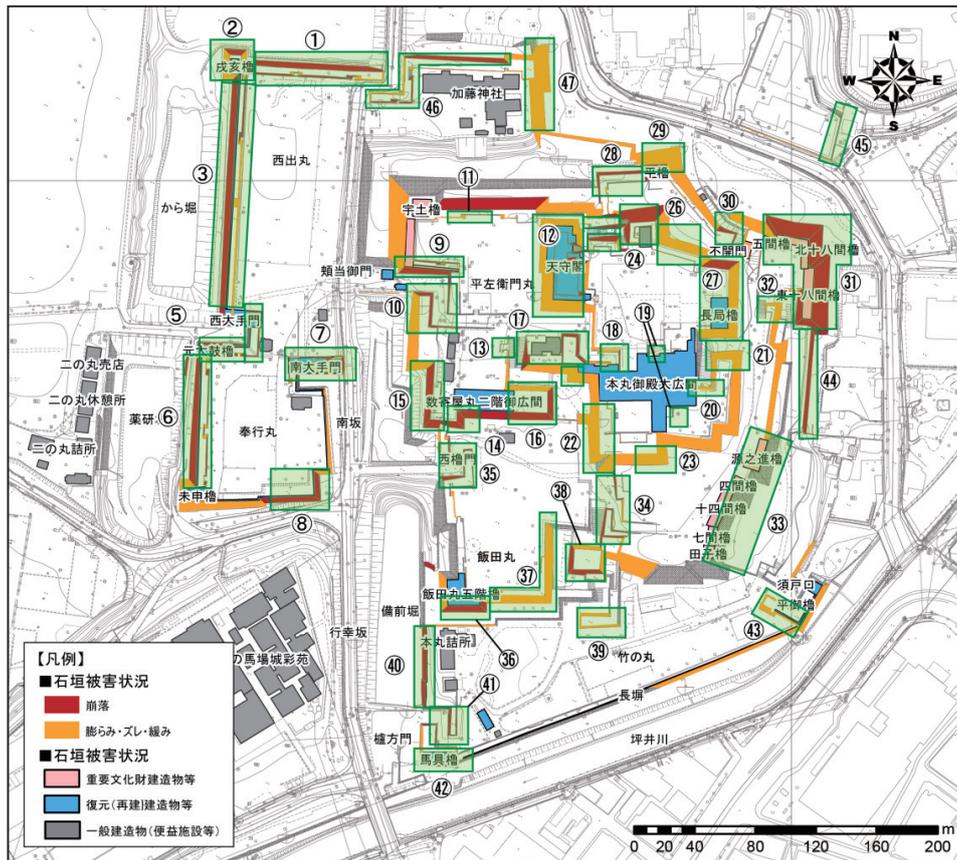
※熊本城全体の石垣：973 面約 79,000 m²

※特別史跡熊本城跡の土地面積：約 577,891 m²

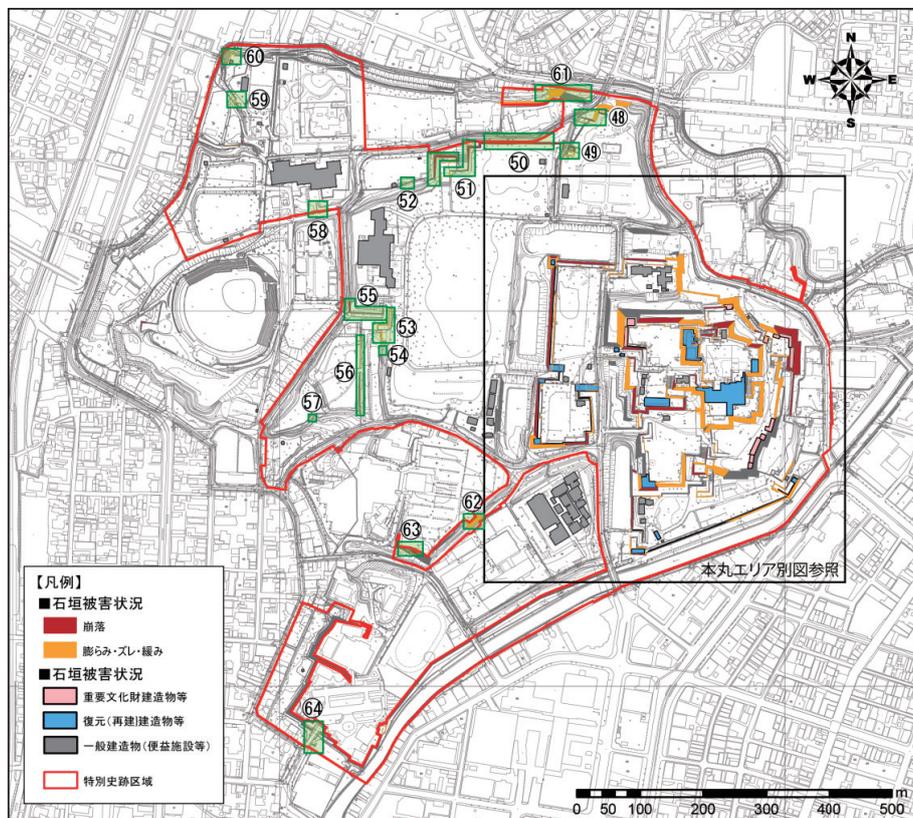
第 7 表 特別史跡指定地内石垣被災面積一覧表

地区名	石垣面積		崩壊面積		修復対象面積	
本丸地区	624 面	55694.95 m ²	170 面	6617.94 m ²	399 面	18893.32 m ²
二の丸地区	99 面	7769.74 m ²	32 面	1271.31 m ²	69 面	3571.00 m ²
古城地区	87 面	8265.72 m ²	16 面	183.82 m ²	24 面	622.88 m ²
三の丸地区	122 面	5478.34 m ²	4 面	5.60 m ²	17 面	296.63 m ²
千葉城地区	6 面	217.63 m ²	2 面	50.20 m ²	3 面	78.82 m ²
合計	938 面	77426.38 m ²	224 面	8128.87 m ²	512 面	23462.65 m ²

※平成 28 年 (2016) 5 月 31 日時点での指定地内のすべての石垣を対象として算出



<石垣被害箇所図本丸エリア>



※『熊本城復旧基本計画』2018年より ①～⑥④(緑枠)は第9・10表に対応

第9図 熊本城被害箇所全体図

第8表 重要文化財・再建・復元建造物被災箇所一覧表

※『熊本城復旧基本計画』2018年より

区分	被災箇所	被害状況	歴史、名称の由来、用途等
国重	宇土櫓	五階櫓屋根・外壁・建具破損、続櫓倒壊	慶長年間の創建か。昭和2年(1927)、解体修理。平成元年(1989)、半解体修理。
国重	平櫓	屋根・外壁・下屋部分破損、倒壊のおそれ	慶長年間の創建か。昭和28年(1953)、解体修理。昭和52年(1977)、部分修理。
国重	不開門	一部倒壊(櫓倒壊、門ゆがみ)	慶長年間の創建。慶応2年(1866)の棟札から、この時再建または大修理を実施か。昭和2年(1927)に屋根替え実施。昭和32年(1957)、解体修理。昭和55年(1980)、部分修理。
国重	五間櫓	建物傾斜、屋根・外壁破損	慶長年間の創建か。昭和36年(1961)、解体修理。昭和58・59年(1983・84)、部分修理。
国重	北十八間櫓	倒壊	慶長年間の創建か。その後長い年月の間修理が繰返され、昭和37年(1962)の解体修理の際に当初の状態に戻され現在に至る。昭和58・59年(1983・84)、部分修理。
国重	東十八間櫓	倒壊	慶長年間の創建か。文久元年(1861)の棟札から、この時再建又は大きな修理が行われたとみられる。昭和37年(1962)、解体修理。昭和58・59年(1983・84)、部分修理。
国重	源之進櫓	屋根・外壁破損	慶長年間の創建か。安政6年(1859)の棟札から、この時再建又は大きな修理が行われたとみられる。昭和32・33年(1957・58)、解体修理。昭和54年度、部分修理。
国重	四間櫓	屋根・外壁破損	慶長年間の創建か。慶応2年(1866)、再建または大修理。軍時代に補強改変され、昭和34年(1959)の解体修理で復旧。昭和56年(1981)、部分修理。
国重	十四間櫓	屋根・外壁破損	慶長年間の創建か。天保15年(1844)、再建または大修理。軍時代に補強改変され、昭和34年(1959)の解体修理で復旧。昭和56年(1981)、部分修理。
国重	七間櫓	建物傾斜、屋根・外壁破損	慶長年間の創建か。安政4年(1857)、修理。軍時代に床構造を補強する改変があったが、昭和33年(1958)の解体修理の際に当初の状態に戻され現在に至る。昭和56年(1981)、部分修理。
国重	田子櫓	建物傾斜、屋根・外壁破損	慶長年間の創建か。慶応元年(1865)に再建又は大きな修理が行われたとみられる。昭和2年(1927)、屋根替。昭和33年(1958)、解体修理。昭和56年(1981)、部分修理。
国重	長塀	一部倒壊、倒壊部分以外も傾斜	加藤時代の創建。西南戦争頃に一時撤去され、その後、軍によって復旧されたとみられる。明治22年(1889)の地震では石垣崩落の記録あり。昭和28年(1953)、西側部分82m倒壊。昭和29・30年(1954・55)、復旧・解体修理。昭和34年(1959)、昭和53年(1978)、部分修理。
国重	監物櫓	建物傾斜、外壁破損	安政7年(1860)の棟札から、この時再建または大修理か。昭和29年(1954)、解体修理。昭和53年度、部分修理。
県重	旧細川刑部邸	外壁、内壁破損	江戸時代、細川刑部家の下屋敷として創建。熊本市子飼町にあったものを平成5年(1993)に三の丸に移築復元。
再建	天守閣	屋根破損、下部石垣一部崩落	大小天守ともに明治10年(1877)2月19日に焼失。昭和35年(1960)に外観を復元し再建。
復元	本丸御殿大広間	外壁破損、地盤面沈下による上段ノ間不陸及び数寄屋棟変形	大広間は慶長15年(1610)頃に完成か。明治10年(1877)2月19日に焼失(大広間棟・大台所棟・数寄屋棟)。平成20年(2008)、外観復元。
復元	長局櫓	外壁破損、建物下部地割れ	慶長年間に建築されたと考えられる。明治10年(1877)2月19日に焼失。平成20年(2008)、外観復元。
復元	数寄屋丸二階御広間	外壁ひび割れ、建造物たわみ、倒壊のおそれ	明治初期(西南戦争以前)に軍によって櫓は撤去された。平成元年(1989)、復元。
復元	宇土櫓塀	倒壊	明治初期に撤去され、平成元年(1989)の宇土櫓の修理に伴って復元。
復元	飯田丸五階櫓	外壁ひび割れ、建造物たわみ、倒壊のおそれ	明治初期に軍によって撤去。西南戦争時は櫓跡に砲台が置かれ、その関係で内側の石垣が撤去されたと考えられる。平成17年(2005)、復元。
復元	戌亥櫓	外壁ひび割れ、建造物たわみ、倒壊のおそれ	棟札に慶長7年(1602)に西出丸の大黒櫓(戌亥櫓)が完成とある。明治初期に櫓が解体され、平成15年(2003)、復元。
復元	西出丸塀	倒壊	明治初期に石垣と共に塀が撤去された。平成16年(2004)、復元。
復元	西大手門	外壁ひび割れ、建造物たわみ・傾き、倒壊のおそれ	明治初期に石垣とともに櫓門も撤去。昭和56年(1981)、復元。平成11年(1999)、台風により櫓部分倒壊。平成15年(2003)、復元。
復元	南大手門	外壁ひび割れ、建造物たわみ・変形、倒壊のおそれ	軍時代に撤去。平成14年(2002)、復元。
復元	元太鼓櫓	外壁ひび割れ、建造物傾き・変形、倒壊のおそれ	軍時代に撤去。平成15年(2003)、復元。
復元	奉行丸北側塀	倒壊	軍時代に撤去。平成15年(2003)、復元。
復元	奉行丸西側塀	倒壊	軍時代に撤去。平成15年(2003)、復元。
復元	未申櫓	外壁破損	明治初期に櫓が撤去。平成15年(2003)、復元。
復元	奉行丸南側塀	控石柱一部破損、傾き	明治22年(1889)地震の際には土台となった石垣が、上部の櫓とともに崩落。平成15年(2003)、復元。
復元	奉行丸東側塀	一部倒壊	軍時代に撤去。平成16年(2004)、復元。
復元	馬具櫓	外壁ひび割れ、南面石垣一部崩壊	西南戦争以前に軍によって解体。昭和41年(1966)、コンクリートブロックで再建。平成26年(2014)、木造復元。
復元	馬具櫓続塀	一部倒壊	軍時代に撤去。平成16年(2004)、復元。
移築	櫓方門	外壁破損	櫓方会所のあった曲輪(現加藤神社)にあった門だが、昭和29年(1954)に半崩壊状態になり、昭和30年(1955)に解体保存。昭和33年(1958)に竹の丸に復旧され、昭和35年(1960)に現位置に移転。
再建	平御櫓続塀	屋根瓦一部落下	軍時代に撤去。平御櫓とともに昭和36年(1961)、再建。

第9表 石垣被災箇所一覧表1

※『熊本城復旧基本計画』2018年より

番号	被災箇所	被害状況	石垣の築造・修理の歴史等
①	西出丸北側石垣	外面100m崩落 内面3箇所崩落	慶長期の石垣。明治22年(1889)地震で一部崩落し軍が修理。
②	戌亥櫓台石垣	北側・東側の崩落 櫓倒壊の恐れあり	慶長7年(1602)に西出丸の大黒櫓(戌亥櫓)が完成の記録あり。
③	西出丸西側石垣	外面北側30mの崩落 内面石垣の傾き	慶長7年(1602)頃に西出丸は曲輪として成立。西面石垣は、明治初期に根石付近まで撤去され、昭和40年代に復元。
④	西大手門櫓台石垣	東側櫓台と南側石垣の崩落	明治初期に櫓台とともに石垣も撤去。昭和50年代に復元。
⑤	元太鼓櫓台石垣	櫓台と東側石垣の崩落	明治22年(1889)地震で南側石垣が崩落し、軍によって修理。
⑥	奉行丸西側石垣	外面・内面の全長が崩落	石垣は慶長年間に成立
⑦	南大手門櫓台石垣	東西の櫓台の一部崩落や膨らみ、緩み	石垣、門ともに慶長年間に成立。櫓門や土台となった石垣は近代に入り撤去され、平成9年(2002)に復元。
⑧	奉行丸南東隅石垣	隅角の崩落、膨らみ	南面は明治22年(1889)の地震で崩落し、軍が南面と東面を修理。上部は平成8年(1996)に復元整備。
⑨	(重文)宇土櫓、 続櫓台石垣	続櫓南端の崩落・膨らみ 石垣上面全体が沈下	慶長期の石垣。明治22年(1889)に崩落し、軍が修理。
⑩	数寄屋丸御門周辺石垣	通路両面石垣の崩落や緩み	通路の大半の石垣は明治22年(1889)地震の際に崩落し、軍によって修理。
⑪	平左衛門丸北側石垣	北面1箇所、南面3箇所の崩落、膨らみ	明治22年(1889)地震で一部崩落、軍によって修理。平成24年(2012)に修理。
⑫	大小天守台石垣	大天守は出入口の崩落と穴蔵内面の崩落。小天守は東面・北面の一部崩落や変形、穴蔵の崩落。	慶長初期の石垣。明治10年(1877)、火災で被熱。明治22年(1889)地震で穴蔵内部等が崩落し、軍によって修理。昭和35年(1960)に鉄骨鉄筋コンクリートで大小天守を再建。
⑬	地図石(数寄屋丸出入口)	北面・南面の一部石材の落下、詰石の脱落。	昭和55年度(1980)に石垣の張出しのため補修。
⑭	数寄屋丸二階御広間土台石垣	復元建物床下の一部崩落	慶長期の石垣。曲輪側の石垣は平成2年(1990)に復元。
⑮	数寄屋丸五階櫓台石垣	櫓台外面及び穴蔵内面の石垣の崩落	明治22年(1889)地震による膨らみの記録あり。
⑯	地蔵門南側石垣	東面・南面の崩落 周辺の膨らみ大	近代に積み直されている。膨らみが大きかった南面は5月9日頃に崩落。
⑰	耕作櫓門(売店東)周辺石垣	東面・西面の崩落 売店背後石垣の崩落	明治22年(1889)の地震で崩落し、耕作櫓門東側の上部石垣は御天守廊下台と合わせて撤去された可能性あり。
⑱	本丸御殿開り御門前石垣	門前の右手石垣の崩落	明治22年(1889)地震で崩落し、軍によって修理。
⑲	本丸御殿大広間周囲石垣	九曜の間床下通路の焼損石垣の一部損壊など	慶長期の石垣。明治10年(1877)の火災で被熱。明治22年(1889)地震の際、開り通路内で4箇所崩落。その後、軍によって修理。
⑳	一之開御門前石垣	石材の剥落落下、膨らみ	慶長期の石垣であるが、明治10年(1877)の火災で被熱し脆弱となった石材の損耗が顕著。
㉑	東三階櫓石垣	櫓台北東隅石が緩み、北面に膨らみ、石垣上面に沈下、地割れ	明治22年(1889)地震で北面上部が膨らみ、軍によって修理されたとみられる。
㉒	本丸御殿西廊下・小広間三階櫓台石垣	石垣上面全体の沈下 詰石の一部崩落	「二様の石垣」のうち西側石垣は経年的に沈下しつつあったもので、今回の地震で御殿上段の間の不陸の原因となる。
㉓	小広間櫓台石垣	南東隅石の変形、詰石の崩落、膨らみ・凹み	慶長初期の石垣。
㉔	トキ櫓台石垣	穴蔵に複数の地割れが発生し櫓台北側が崩落	元禄15年(1702)の修理願いあり。同時修理の石門に修理銘がある。
㉕	北埋門ノ上居櫓台石垣	北面・南面が大きく崩落	元禄15年(1702)の修理願いあり。石垣のほとんどが崩落し埋門(石門)を覆う。
㉖	裏五階櫓台石垣	西面・北面の崩落	古式の積み方の石垣で穴蔵を持つ櫓台。
㉗	長局櫓台石垣 本丸北輪居櫓台石垣	複数の地割れが発生し本丸北東部が陥没して石垣の隅部分が崩落	裏五階櫓台に遅れて築造された慶長期中頃の石垣。
㉘	平櫓西側石垣	外面の崩落、内面の緩み	享保4年(1719)の修理願いあり。
㉙	(重文)平櫓台石垣	櫓直下の石垣天端の内側への傾斜・膨らみ、櫓倒壊のおそれ	高さ19mの高石垣。
㉚	不開門前石垣	門前の通路の石垣全体におよぶ崩落	天明2年(1782)、門の北側石垣下の膨らみによる修理願いあり。明治22年(1889)地震で一部崩落、軍によって修理。
㉛	(重文)北十八間櫓・東十八間櫓石垣	櫓台のほぼ全域におよぶ大規模な崩落・崩壊	東十八間櫓は石垣部分が全て崩落。石垣下の神社建物を潰す。
㉜	東櫓門櫓台石垣	隅石の変形、膨らみ	本丸東側の出入口で慶長初期の石垣。
㉝	東竹の丸櫓群土台石垣	石垣の一部沈下や地割れ	櫓のうち、特に田子櫓と七間櫓で傾きが顕著で、石垣に沈下があるが外観上大きな変化は観察されない。
㉞	東竹の丸西口周辺石垣	西口北側と南側石垣の崩落	慶長期の石垣。宝永6年(1709)に階段東側の石垣の膨らみによる修理願いあり。
㉟	西櫓御門周辺石垣	通路両面石垣の崩落	明治22年(1889)地震では南側石垣にある埋門が崩壊し軍によって修理。
㊱	飯田丸五階櫓台石垣	前震で南面の一部崩落、本震で崩落が拡大し東面も崩落	明治初期に櫓は撤去され、西南戦争時には砲台として利用された。明治22年(1889)地震の際、南側半分が大きく崩落し、軍によって修理。

第10表 石垣被災箇所一覧表2

※『熊本城復旧基本計画』2018年より

番号	被災箇所	被害状況	石垣の築造・修理の歴史等
③⑦	飯田丸の南面・東面石垣、 要人櫓台石垣	膨らみ・沈下 地割れ	南面上部は石積み技術から明治22年(1889)地震で崩落し 積み直されたもの。
③⑧	竹の丸五階櫓台石垣	南西隅角の一部崩落	裏込栗石沈下及び角石の亀裂で昭和50年度(1980)に修理。
③⑨	元札櫓門櫓台石垣	櫓台上面の沈下や石垣西面・南面の 膨らみ	連続虎口の最初の石塁で、石垣の様子から数度の積み直し が推定される。経年による膨らみや間詰石落下で平成15年 度(2003)に修理。
④⑩	竹の丸西側石塁	前震で12mが崩落し本震でほぼ全 長が崩落	備前堀に面した石垣で慶長期の成立。寛政2年(1790)、石 垣の膨らみによる修理願いあり。
④⑪	山崎口通路(櫓方料金所) 周辺石垣	通路内面の一部崩落や膨らみ	加藤時代に石垣が成立。通路東側の石垣は天明2年(1782) に膨らみによる修理願いあり(今回の崩落箇所ではない)。
④⑫	馬具櫓櫓台石垣	南面の崩落 緩み、詰石の脱落	山崎口の南側、坪井川に面した櫓台で、16日の本震によっ て長さ12mほどの膨らみが確認されていた。平成28年 (2016)5月10日午後1時56分に崩落。
④⑬	須戸口周辺石垣	上面の沈下・地割れ 石段の沈下による変形	本丸東南の出入口で加藤忠広時代の築造。
④⑭	東十八間櫓南石垣	地割れ・崩落	寛永10年(1633)に大雨で崩落し修理される。
④⑮	千葉城北西地区の石垣	東面石垣の全体崩落	中間に石垣の隅部があり、北側は後世に積み足された可能 性が高い。
④⑯	北大手門周辺石垣	北側石垣全体の崩落 通路側石垣に膨らみ	明治22年(1889)地震で崩落し、軍が修理。崩落した内壁 石材に観音菩薩像彫刻の一部を確認。
④⑰	櫓方三階櫓石垣	天端周辺などに膨らみや緩み、地割 れ	文政3年(1820)の櫓台石垣修理願いあり。修理銘(「文政 五年六月竣功」)あり。
④⑱	監物櫓南石垣	天端の一部崩落	明治22年(1889)地震で膨らみ、軍によって修理。
④⑲	埋門周辺石垣	一部崩落	軍による通路開鑿に伴う間知石の石積み。
⑤⑩	百間石垣	3箇所での崩落 天端周辺の膨らみ、緩み	慶長期の成立。明治22年地震で二ノ丸御門側などの上半部 が崩落、軍によって修理。
⑤⑪	二の丸御門石垣	通路東側石垣や北側石塁北面、西側 石塁西面の大規模崩落。	明治22年(1889)地震で膨らみ、軍によって修理。石塁上 面の地割れや裏込栗石沈下が著しく、門の通路面には地割 れが複数見られる。
⑤⑫	県立美術館北側石塁	一部損壊	近代とみられる高さ1mの石垣
⑤⑬	二の丸西口東側石垣 (松井山城預櫓台)	石塁上面に地割れや沈下があり膨ら み顕著	加藤時代に成立した石垣。明治22年地震で崩落し軍によっ て修理。
⑤⑭	二の丸西空堀東斜面石垣	石材落下	石垣は空堀に下りる近現代のもの。
⑤⑮	二の丸西口西側石塁 (宮内橋付近)	全長におよぶ大規模崩落	石垣は加藤時代に成立。細川家による空堀の埋立あり。明 治22年(1889)地震で崩落し軍が修理。昭和60・61年(1985・ 86)、平成14年(2002)に解体修理。
⑤⑯	野鳥園東側石垣	一部崩落	一部に近代の石垣あり
⑤⑰	野鳥園南側石垣	一部崩落	斜面崩壊防止のための部分的石垣
⑤⑱	市立博物館南側石垣	一部崩落	現代の石積み
⑤⑲	テニスコート西側石垣	一部崩落	法面の成形をせずに築かれた石垣。
⑥⑩	森本義太夫預櫓跡周辺石 垣	公園整備石垣の沈下	櫓は明和7年(1770)に焼失。以降は再建されず、櫓台の み残ったが、近現代に櫓跡も滅失。櫓台の南は宝永6年(1709) に修理か。
⑥⑪	古京町別館北側石垣	公園用石柵の落下 膨らみ、緩み、地割れ	新堀北櫓のための張出した櫓台がある。
⑥⑫	陸軍病院跡東石垣(国立 病院機構熊本医療セン ター敷地)	高さ4mの法面石垣の一部崩落	江戸時代の絵図では土手に描かれる。明治8年(1875)頃 の病院開設に伴う石垣の可能性。
⑥⑬	陸軍病院跡南石垣(国立 病院機構熊本医療セン ター敷地)	市道に面した一部石垣の崩落	石垣下や周辺に近代の石垣が混在する。東隅は平成27年 (2005)の台風で一部崩落。
⑥⑭	古城正面橋台石垣	北詰の橋台の崩落	古城の大手口となっていた橋の橋台。

第2章 復旧事業について

1. 事業の概要

平成28年(2016)4月14日及び16日に発生した平成28年熊本地震により、熊本城は特別史跡熊本城跡としての文化財並びに熊本城公園としての都市公園の両面から全域的に甚大な被害を受けた。その復旧には、長い歳月と多大な費用に加え、高い専門知識・技術・人員を要することから、国・県等の関係機関や関係団体との連携はもとより、市民・県民をはじめ、熊本城の復旧を願う多くの方々の力を結集して取り組んでいく必要があった。

また、その復旧にあたっては、文化財的価値の保全を基本に、市民の憩いの場としての都市公園の早期復旧の観点、あるいは文化財・都市公園が調和した重要な観光資源の早期再生を図る観点から、効率的・計画的な復旧と戦略的な公開・活用を進めていくことが重要であった。

そのため、平成28年(2016)12月に熊本城復旧に向けた基本的な考え方や取り組むべき施策の方向性を定めた「熊本城復旧基本方針」を策定し、それに基づき、平成30年(2018)3月に『熊本城復旧基本計画』(以下、「復旧計画」という)を策定した。本計画は、石垣、建造物等をはじめ、便益施設・管理施設等を含む熊本城全体の復旧手順、耐震化等の工法の検討、復旧過程の公開及び継続的な復旧を支える体制づくりなど、復旧に係る具体的な方針や施策及び取り組みを体系的に定め、熊本城の効率的・計画的な復旧と戦略的な公開・活用を着実に進めていくために策定したもので、①被災した石垣・建造物等の保全、②復興のシンボル「天守閣」の早期復旧、③石垣・建造物等の文化財的価値保全と計画的復旧、④復旧過程の段階的公開と活用、⑤最新技術も活用した安全対策の検討、⑥100年先を見据えた復元への礎づくり、⑦基本計画の策定・推進と7つの基本方針が掲げられた。

計画対象区域は特別史跡熊本城跡の当時の指定区域(51.2ha)及び熊本城公園の都市計画公園区域(55.7ha)で、特別史跡の指定範囲が拡大した場合、その部分も計画区域に含むこととした。計画期間は平成30年(2018)から20年とし、令和4年度(2022)までの5年間を短期、終期までの20年間を中期とした。

熊本城の復旧事業は復旧計画に基づき、文化財価値の保全を前提として、それぞれの復旧に対して必要な調査・研究を実施し、学識者等による委員会・専門部会での議論を踏まえながら、耐震化等の安全対策も検討し、文化財保護法上の現状変更等の許可など法的手続を踏まえ、効率的に推進している。

2. 石垣・建造物等の復旧方針

(1) 石垣の復旧基本方針

※『熊本城復旧基本計画』2018年より

石垣は原則として「地震直前の状態」に復旧する

- 石垣の解体範囲は必要最小限とする。
- 石垣等の復旧は、伝統工法を基本とする。
- 安全確保と文化財価値の保全を両立する。
- 適切な文化財調査と成果の検討を行う。

ただし、以下の場合には「地震直前の状態」に復旧しないこともある。

- ①地震直前の状態が、既に安全上、危険な状況にあるなど、構造上の問題を有していた場合(例：ズレ・孕み出し等)
- ②伝統的工法だけでは石垣を安全に公開することができないと判断される場合は、必要最小限の現代工法による構造補強を検討する。
- ③地震直前の状態が、明らかに後世の補修等によって、工法・素材などが変更され、文化財価値を低下させていた場合(例：間知石使用・練石積工施工等)

建造物は、原則として「地震直前の状態」に復旧することを基本とするが、耐震・耐風対策などの防災機能等についての検討を行う。

特に耐震対策について、総合的な調査・研究を早急に行う。

【重要文化財建造物】

＜耐震対策＞

- 被害状況及び破損調査を実施すると共に、文化庁が定める重要文化財建造物耐震診断指針に基づく耐震診断を実施し、復旧方法を検討する。
- 建造物の基礎となる石垣を含め、重要文化財建造物の文化財的価値が損なわれることを防ぐとともに、来城者の安全確保を含め必要に応じた耐震性能の向上措置を図る。
- 重要文化財建造物の耐震補強を実施する場合は、文化財的価値の維持のため、以下の原則を可能な限り満たす補強方法とする。
 - ア 意匠を損なわないこと
 - イ 部材を傷めないこと
 - ウ 可逆的であること
 - エ 区別可能であること
 - オ 最小限の補強であること

＜耐風対策＞

- 九州地方は台風襲来が多く、これまで長塀などにおいて台風による倒壊等の被害が生じ、災害復旧を繰り返している歴史的経緯も踏まえ、耐震対策のみならず耐風対策についても併せて検討する。

＜その他防災対策＞

- 老朽化した防災・電気設備の更新、避難誘導を視野に入れた来城者動線の見直しとそれに併せた展示及びその設備の更新を図り、火災を含めた建造物の防災機能の総合的な向上措置も検討する。

【再建・復元建造物】

- 復元建造物については、設計時の性能、被災状況、石垣への影響、石垣・建造物の安全性を十分に検証し、耐震対策や耐風対策等を踏まえた復旧方法を検討する。

3. 事業対象箇所の経緯

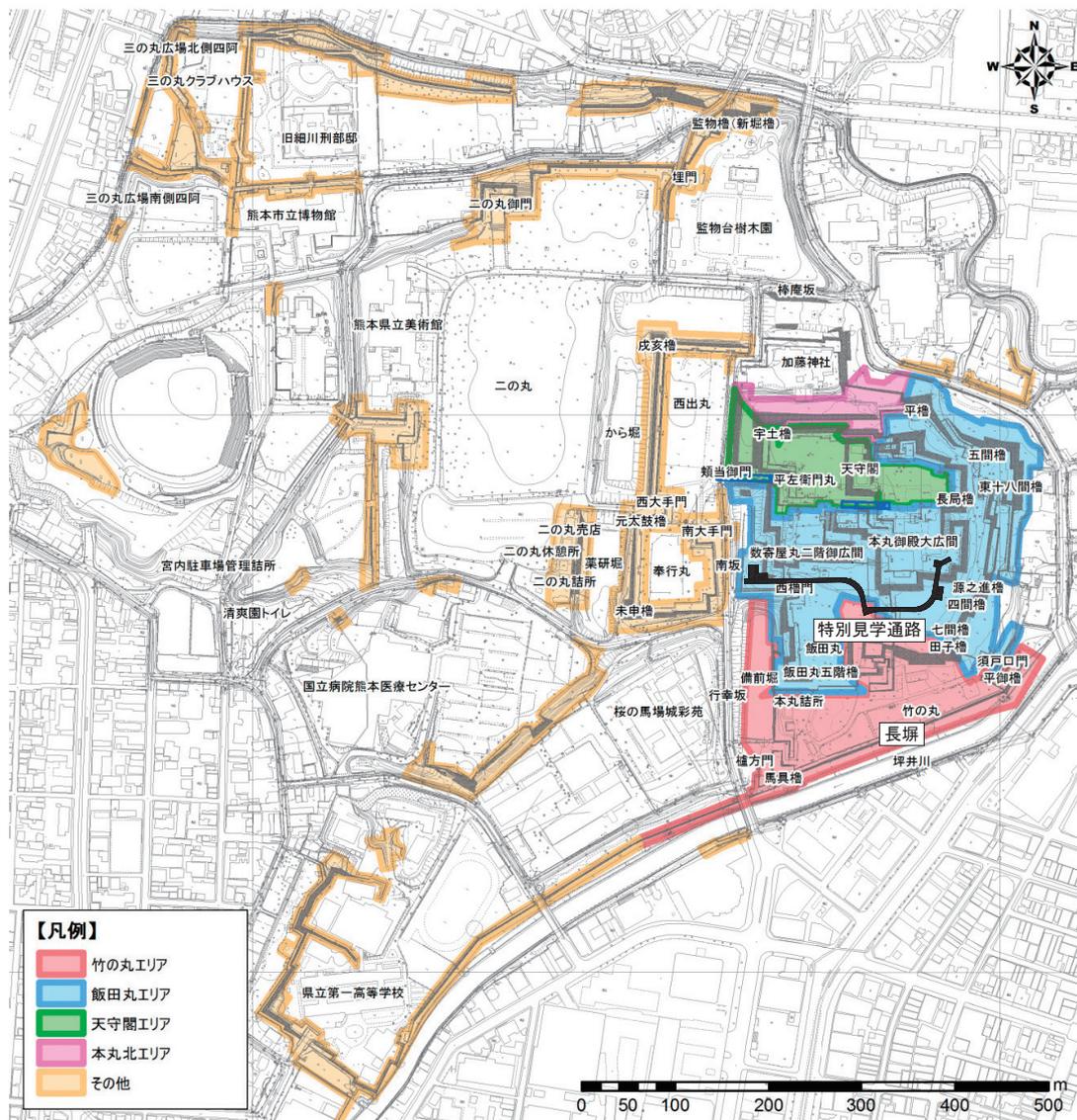
(1) 特別見学通路設置

熊本城は、震災復興に向けた市民・県民の心の拠り所となる地域資源であるとともに、年間170万人を超える観光客等が訪れる重要な観光拠点であることから、来城者への安全対策を前提として、公開エリアの段階的な公開と活用、観光資源としての早期再生を図るの必要があり、復旧計画では、早期復旧を目指す天守閣をはじめ、宇土櫓や長塀、櫓群などの重要文化財建造物や本丸御殿大広間・飯田丸五階櫓の復旧に取り組み、天守閣エリア及び竹の丸エリアの早期公開と全体の復旧手順の進捗に合わせた公開エリアの順次拡大を行うこととされた。

復旧計画上、2028年度以降に竹の丸エリアの一部、2033年度以降に竹の丸エリアの全域と天守閣エリアが段階的に公開されるスケジュールとなっており、それまでの間、熊本城の大部分の有料区域を立入規制のままにしておくのは、文化財の復旧過程公開や観光資源としての早期再生を図る観点からも深刻な問題で、工事中であっても多くの方々に熊本城の被災状況や復旧過程を見学できるよう展示公開型の復旧に取り組み、仮設見学通路の設置など復旧過程の積極的な公開・活用を図ることが必要であった。

そこで計画されたのが特別見学通路（仮設）である。行幸坂から備前堀北堀へ入り、飯田丸・東竹の丸エリアを通過、本丸御殿にとりつく総延長約300mの見学通路で、途中、被災した西櫓御門石垣、飯田丸、竹の丸五階櫓、二様の石垣と天守閣、重要文化財建造物群の被災状況、復旧過程等を観覧することが可能となる。

この通路の架設にあたっては、飯田丸、東竹の丸に計5箇所の基礎スラブの設置が予定されたが、設置



第10図 事業対象箇所図 ※『熊本城復旧基本計画』2018年より

にあたっては掘削を行わず、地表面に保護層を確保し、コンクリートの基礎を置くこととした。その保護層を確保するうえで、基礎スラブの設置予定範囲及びその周辺部における地表面あるいは地下の遺構の有無、さらにその遺構面までの表土厚を把握する必要が生じたため、平成29・30年度（2017・2018）に確認調査を実施することとなった。

（2）長塀復旧

平成28年熊本地震により被災した重要文化財建造物13棟のうち特に被害の大きなものは順次解体し、今後復旧を進めていく方針であり、その最初の復旧となるのが、長塀である。

長塀は熊本城本丸の南端、市庁舎からも望める位置にある坪井川沿いの石垣の上に構築された全長約242.44m（134間）の木造瓦葺屋根の塀で、昭和8年（1933）に旧国宝に指定され、昭和25年（1950）の文化財保護法の改正により国指定重要文化財となった。塀本体とその背後に建てられた控石柱を控貫・足下貫で繋いで支える構造となる。

地震では、東側の延長約80m分が倒壊し、前年度の台風で破損した西側部分も含めて、緊急措置として平成28年（2016）8月から塀全体の解体が実施され、木材・瓦などの部材が倉庫に格納され、塀の基礎石と一部の控石柱を残すのみとなっていた。

この長堀の復旧にあたって、長堀の建築年代、堀本体及び控石柱の基礎構造等を把握する必要が生じたため、平成 29・30 年度（2017・2018）に確認調査を実施することとなった。

4. 事業体制

（1）事業の体制

特別史跡熊本城跡復旧事業に伴う各種事業については、熊本市文化市民局熊本城総合事務所及び熊本城調査研究センター（令和元年度以前は経済観光局に所属）が所管し、事業の方針・方向性、各事業の工法等については、熊本城文化財修復検討委員会並びに建築・構造・石垣のそれぞれのワーキンググループで審議し、文化庁、熊本県と協議を重ねながら事業を進めている。なかでも、各事業を進めるにあたって生じた測量、発掘調査、工事立会等の対応については、熊本城調査研究センターが実施し、それらの成果等を踏まえて事業が進められている。

（2）事務局

本報告に係る熊本城調査研究センターの確認調査等の調査体制については、以下のとおりである。

[平成 29 年度]

所長	渡辺勝彦
副所長	網田龍生
文化財保護主幹	鶴嶋俊彦
	美濃口紀子（兼調査研究班主査）

復旧事業班（担当班）

主査	金田一精〔調整担当〕
文化財保護参事	山下宗親〔調整担当〕
	北原 治（滋賀県から派遣）〔長堀調査・整理担当〕
文化財保護主任主事	関根章義（宮城県仙台市から派遣）
文化財保護主事	嘉村哲也
	原田健司（下半期 長野県松本市から派遣）〔特別見学通路調査・整理担当〕
	真鍋貴匡（下半期 香川県から派遣）〔特別見学通路調査・整理担当〕
調査研究班 主任主事	益田知子〔事務担当〕

[平成 30 年度]

所長	渡辺勝彦
副所長	網田龍生
文化財保護主幹	鶴嶋俊彦
	美濃口紀子（兼調査研究班主査）

復旧事業班（担当班）

主査	金田一精〔調整担当〕
文化財保護参事	山下宗親〔調整担当〕
	岩橋隆浩（滋賀県から派遣）〔長堀調査・整理担当〕
	渡邊 誠（7～9月 香川県高松市から派遣）

文化財保護主任主事 関根章義（宮城県仙台市から派遣）
 下高大輔（滋賀県彦根市から派遣）
 和田達也（静岡県浜松市から派遣）〔特別見学通路調査・整理担当〕

文化財保護主事 嘉村哲也
 河本愛輝〔長堀調査・整理担当〕
 梶原慎司（4～6月 香川県高松市から派遣）

調査研究班 主任主事 益田知子〔事務担当〕

〔平成31・令和元年度〕

所長 渡辺勝彦
 副所長 濱田真和
 文化財保護主幹 鶴嶋俊彦
 美濃口紀子（兼調査研究班主査）
 岩橋隆浩（滋賀県から派遣）〔長堀調査・整理担当〕

復旧事業班（担当班）

主査 金田一精〔調整担当〕

文化財保護主任主事 嘉村哲也
 下高大輔（滋賀県彦根市から派遣）

文化財保護主事 河本愛輝〔長堀調査・整理担当〕
 亀島慎吾（沖縄県から派遣）
 須貝慎吾（上半期 宮城県仙台市から派遣）
 柳澤 楓（下半期 宮城県仙台市から派遣）

調査研究班 主任主事 村上里美〔事務担当〕

〔令和2年度〕

所長 渡辺勝彦
 副所長 坂本正恵
 文化財保護主幹 美濃口紀子（兼調査研究班主査）
 矢野裕介（熊本県から派遣）〔報告担当〕
 阿部泰之（下半期 福岡市から派遣）

復旧事業班（担当班）

主査 金田一精〔調整・報告担当〕

文化財保護主任主事 下高大輔
 嘉村哲也

文化財保護主事 佐伯孝央

調査研究班 主任主事 村上里美〔事務担当〕

会計年度任用職員 竹田知美〔整理・報告担当〕
 後藤 恵〔整理・報告担当〕

5. 熊本城文化財修復検討委員会

特別史跡熊本城跡の保存と活用の在り方について幅広く総合的に検討するため、特別史跡熊本城跡保存活用委員会が設置されている。熊本城の被災後、その部会として立ち上がったのが、文化財修復検討部会である。この文化財修復検討部会は令和元年度以降、委員会となった。

本委員会での審議事項は、石垣の復旧、建造物の復旧方針・補強方法、遺構の修復・保全等で、その審議を踏まえて事業が進められており、委員会はさらにより専門的に審議を行うため建築・構造・石垣と3つのワーキンググループに分かれている。

第11表 熊本城文化財修復検討委員会名簿

氏名	分野	ワーキンググループ	役職等
伊東 龍一	建築学（日本建築史）	建築	熊本大学大学院先端科学研究部教授、熊本市文化財保護委員会委員
北野 博司	考古学（石垣）	石垣	東北芸術工科大学教授
北原 昭男	建築学（木質構造）	建築	熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻教授
千田 嘉博	考古学（城郭）	石垣	奈良大学文学部教授
田中 哲雄	歴史学（石垣）	石垣	（姫路市）日本城郭研究センター名誉館長
西形 達明	土木工学（石垣構造）	構造	関西大学名誉教授、関西地盤環境研究センター顧問
長谷川 直司	建築学（建築構工法）	構造	国土交通省国土技術政策総合研究所シニアフェロー、文化庁文化審議会専門委員
平井 聖	建築学（日本建築史）	構造	東京工業大学名誉教授
宮武 正登	歴史学（城郭）	石垣	佐賀大学全学教育機構教授
山尾 敏孝	土木工学（歴史遺産）	構造	熊本大学名誉教授、熊本市文化財保護委員会委員
吉田 純一	建築学（日本建築史）	建築	FUT 福井城郭研究所顧問、福井工業大学客員教授
和田 章	建築学（耐震工学）	構造	東京工業大学名誉教授、防災学術連携運営幹事、日本免震構造協会会長

6. 委員会等での協議事項

（1）特別見学通路

①第1回熊本城復旧基本計画策定委員会

【開催日】平成29年5月8日

【内容】段階的公開として仮設物設置を提示

②第3回熊本城復旧基本計画策定委員会

【開催日】平成29年10月26日

【内容】仮設見学通路設置について

【主な意見】仮設見学通路の設置を復旧過程の公開に係る主要施策として位置づけ

③第4回熊本城復旧基本計画策定委員会

【開催日】平成29年12月16日

【内容】仮設見学通路の設置時期について

【主な意見】設置時期を2019～2020年度の早い段階、安全性と混雑緩和の対策の検討

④文化財保護委員会

【開催日】平成30年3月23日

【内容】確認調査現地視察

(2) 長堀

①平成 29 年度第 2 回文化財修復検討部会

【開催日】平成 29 年 9 月 28 日

【内 容】長堀確認調査案・控石柱被災履歴報告

【主な意見】確認調査案了承

②平成 29 年度第 3 回文化財修復検討部会

【開催日】平成 29 年 12 月 25 日

【内 容】長堀確認調査現地視察

7. 事業工程

(1) 特別見学通路

①確認調査

平成 30 年 2 月 1 日～平成 30 年 2 月 28 日

平成 30 年 4 月 16 日～平成 30 年 4 月 18 日

平成 30 年 7 月 12 日～平成 30 年 7 月 24 日

②地質調査

平成 30 年 2 月 2 日～7 月 9 日

③設置工事

平成 31 年 3 月 11 日～令和 2 年 3 月 31 日

④周辺工事

令和 2 年 1 月 23 日～令和 2 年 4 月 20 日

⑤確認調査報告書作成

令和 2 年度

(2) 長堀

①平成 29 年度

石垣測量・構造解析等

確認調査 平成 29 年 11 月 6 日～平成 30 年 1 月 31 日

②平成 30 年度

長堀復旧設計

確認調査 平成 30 年 8 月 9 日～平成 30 年 8 月 31 日

補強基礎発掘調査 平成 30 年 9 月 13 日～平成 31 年 1 月 28 日

③令和元年度（平成 31 年度）～令和 2 年度

長堀復旧工事

報告書作成

8. 事業費

(1) 特別見学通路

確認調査費用（平成 29・30 年度） 7 1 3, 2 1 4 円（歴史生き生き！史跡等総合活用整備事業費）

(2) 長堀

確認調査費用（平成 29・30 年度） 1, 1 9 9, 6 2 0 円（歴史生き生き！史跡等総合活用整備事業費）

(3) 報告書 (令和2年度)

特別史跡熊本城跡復旧事業に伴う確認調査報告書作成業務委託 9,790,000円
(重要文化財等防災施設整備事業費)

9. 現状変更

(1) 特別見学通路

確認調査 平成29年12月8日申請 平成30年2月6日許可
平成30年5月11日申請 平成30年6月15日許可

(2) 長堀

確認調査 平成29年8月16日申請 平成29年9月15日許可
平成30年6月18日申請 平成30年7月20日許可

第3章 特別見学通路設置

1. 事業対象箇所の設定・名称

熊本城が所在する茶臼山の南側斜面には、大・小天守が建つ本丸から南を流れる坪井川の間、4段の平坦面（曲輪）が設けられている。飯田丸は本丸上段、数寄屋丸・平左衛門丸に次いで3段目の曲輪で、飯田丸の東には、3m程高い位置に東竹の丸がある。南の最下段には長堀が所在する竹の丸がある。

飯田丸の名称は、江戸時代には「西竹の丸」と呼ばれ、明治に入って「飯田丸」と呼ばれるようになった。加藤清正の家臣「飯田覚兵衛」が預かっていた曲輪であったことによるものである。南西を一望できるこの曲輪には南西隅に五階櫓、五階櫓から数寄屋丸下まで繋がる百間櫓、その間の西櫓御門などにより外郭の備えがされており、曲輪内には鉄砲蔵、台所などが存在していたことが絵図や古写真などにより確認することができる。明治初期から大日本帝国陸軍（以下、「旧日本陸軍」という）の管轄下に置かれ、火薬庫が置かれるなど多少の改変を受けているものの、概ね良好に保全されており、昭和23年（1948）に「熊本城公園化計画」が策定されて以降は、梅園などとして親しまれていた。また、東竹の丸は、最下段の竹の丸（曲輪）から本丸上段に通じる通路と札櫓門跡を挟んで東に位置し、竹の丸を一望する曲輪の南西隅に竹の丸五階櫓があったことが絵図で確認でき、曲輪の東縁には、国重要文化財建造物である「田子櫓」「七間櫓」「十四間櫓」「四間櫓」「源之進櫓」などの平櫓群が建ち並ぶ。

特別見学通路は、西の備前堀北堀からその飯田丸・東竹の丸を通り、本丸御殿にとりつく総延長約300mの仮設の見学通路で、熊本地震で被災した熊本城の復旧過程の段階的公開と活用の中で、被害状況や復旧過程を安全に観覧できることを目的に設置が計画された。

その設置にあたっては、飯田丸・東竹の丸の路線上5箇所基礎スラブを付設する予定であったため、それら5箇所を確認調査の対象とした。

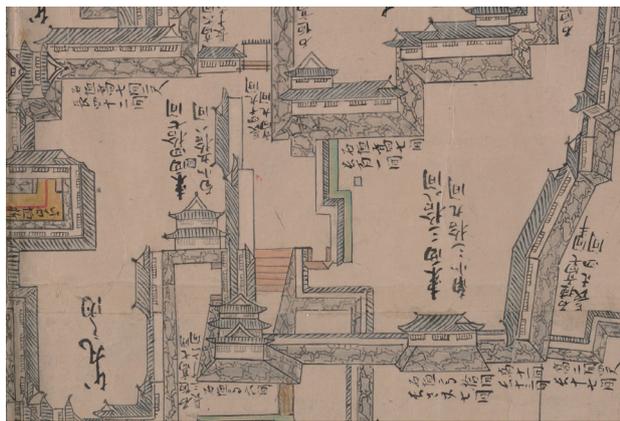
2. 発掘調査

（1）調査の目的と方法

特別見学通路における計5箇所の基礎スラブの設置にあたっては、地表面に保護層を確保してコンクリート基礎を置く工法を採用することとしたため、設置範囲及びその周辺部における遺構の残存状況や遺構面までの深度の把握を目的とする確認調査を実施した。調査期間は平成30年（2018）2月1日～26日〔平成29年度〕と平成30年（2018）7月7日～24日〔平成30年度〕と2次にわたる。

平成29年度の調査では、基礎スラブの規模に応じて、幅50cmのトレンチを飯田丸内に計5箇所（トレンチ01～05）、東竹の丸内に計4箇所（トレンチ06～09）を設定して確認調査を実施するとともに、地表面に露出する石材の調査を併せて実施した。トレンチの設定にあたっては、絵図等によって飯田丸と東竹の丸に設置された江戸時代と明治以降の建造物の確認を事前に行い、設定箇所の判断材料とした。

江戸時代の絵図では時代と内容の順に、「平山城肥後国熊本城廻絵図」（正保年間頃）、「御城図」（江戸時代前期）、「御城内御絵図」（明和6年（1769）頃）、「熊本城図」（江戸時代後期）がある。明治以降では明治9年（1876）、昭和8年（1933）、昭和9年（1934）、昭和34年（1959）の図面に建物の配置がある程度鮮明に描かれている。それらを概観し、まずは江戸期からその配置を確認し、建物の呼称は「御城内御絵図」の記載の建物名によることとした。なお、「平山城肥後国熊本城廻絵図」では、曲輪内部の建物配置は省略されているものの、それぞれの曲輪内の井戸と外郭線に沿った建物について詳細に描かれており、本丸御殿の「二様の石垣」の南側に、南北棟の建物2棟があり（第11図）、そのうち南側の1棟は後の「元塩蔵」に相当する位置関係にある。また、「三階御櫓」の東西には堀などの施設はないことが確認できる。



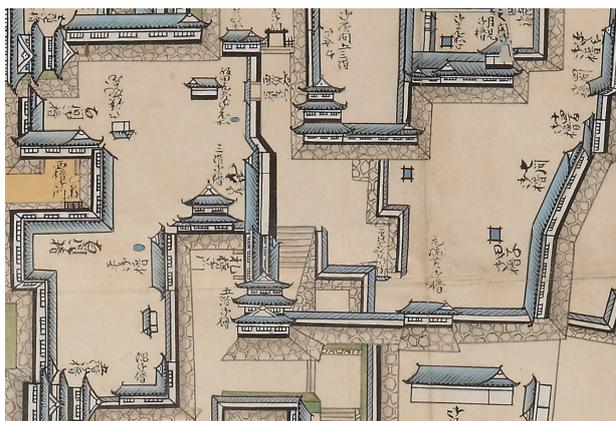
①正保年間頃「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)



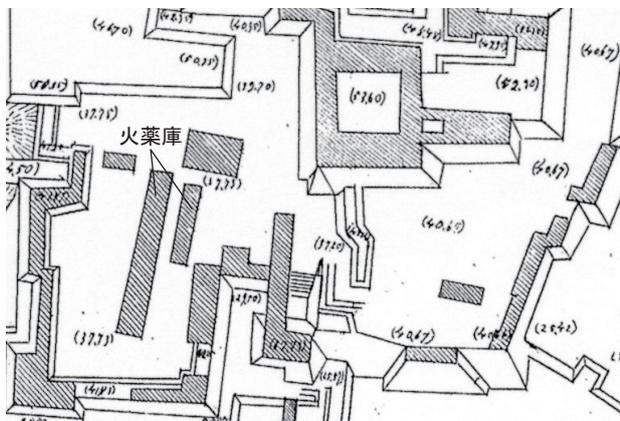
②江戸時代前期「御城図」(公益財団法人永青文庫蔵)



③明和6年(1769)頃「御城内御絵図」



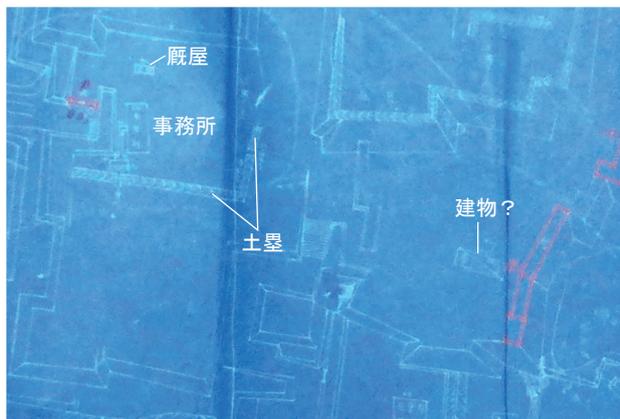
④江戸時代後期「熊本城図」(公益財団法人永青文庫蔵)



⑤明治9年(1876)(国立国会図書館蔵 熊本城郭及市街之図)



⑥昭和8年(1933) 竹の丸地区追加指定に伴う図面

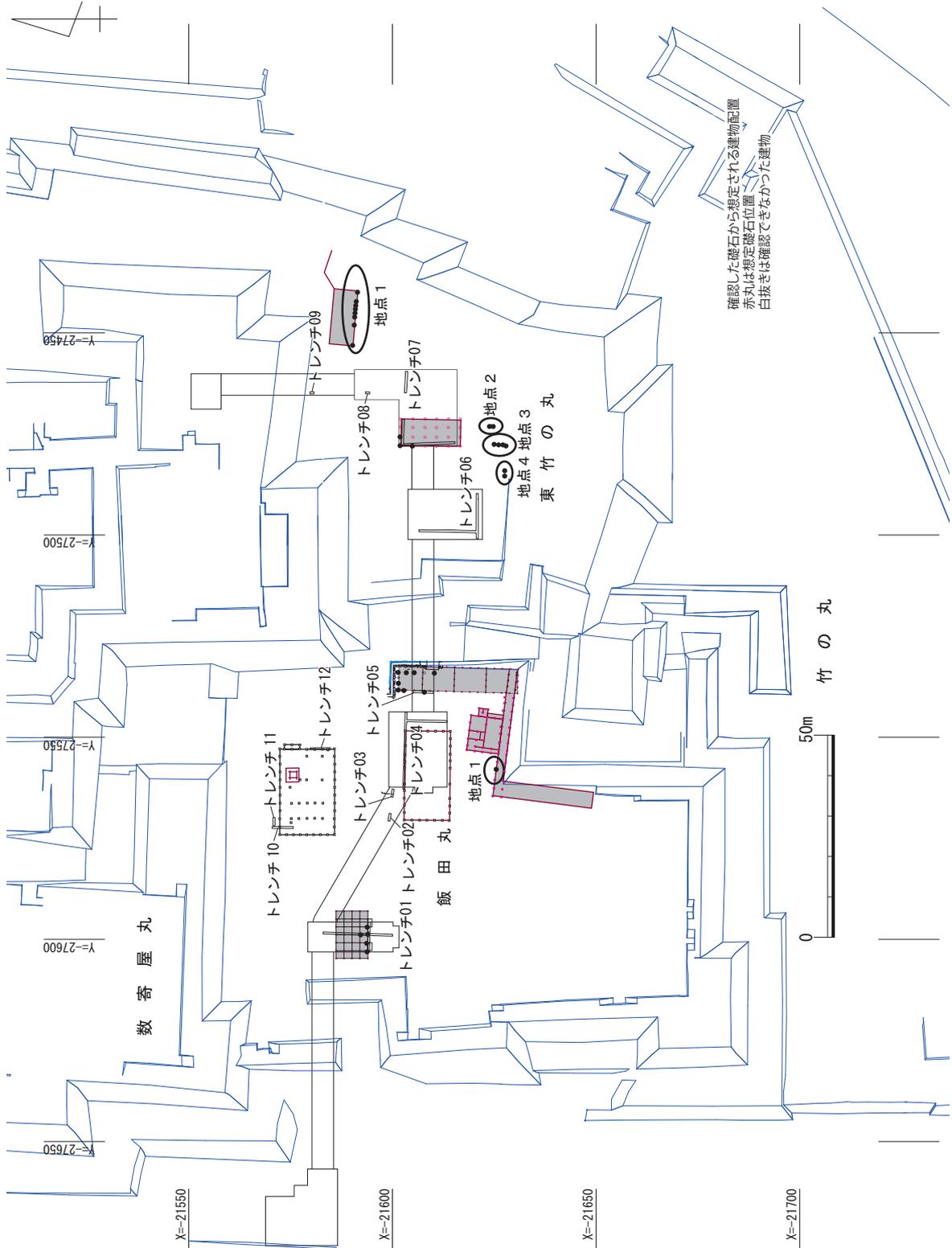


⑦昭和9年(1934)



⑧昭和34年(1959) 現状変更に伴う図面

第11図 飯田丸・東竹の丸変遷図



第12図 飯田丸・東竹の丸トレンチ配置図

各トレンチの掘削は層位ごとに人力で行い、必要最低限の掘削にとどめ、検出した礎石の原位置を留めているかどうかの確認も一部の掘削でとどめた。平成30年4月に一部追加調査後埋め戻しを行い、遺構面には山砂を敷き、保護層を確保したうえで発生土で旧状に復した。

平成30年度は、特別見学通路のルート変更に伴い、飯田丸において「飯田屋敷御台所」に計2箇所のトレンチ（トレンチ10・11）、その南東に1箇所のトレンチ（トレンチ12）を設定して調査を実施した。トレンチの掘削は層位ごとに人力で行い、層位ごとに遺物を取り上げた。ただし、近世瓦については、出土量が膨大となったため、次の条件に該当するもののみを取り上げている。その条件は、①軒瓦、②刻印・刻書があるもの、③3片以上が残存するもの、④道具瓦、⑤遺構の特徴や時期を示すなど熊本城の歴史を明らかにするうえで欠くことのできない情報を示すものいずれかに該当するもので、条件に該当しないものは、重量を記録したうえで出土したトレンチに埋め戻すこととした。遺構面に山砂を敷き、現地保存する瓦を入れて、その上から発生土を入れて旧状に復した。

（2）基本層序

飯田丸・東竹の丸の層序は大別して5層に区分でき、それぞれの層位で細分が可能である。この層序は過去の調査成果とも齟齬がなく、飯田丸・東竹の丸一帯の基本層序として一般的に用いることが可能である。

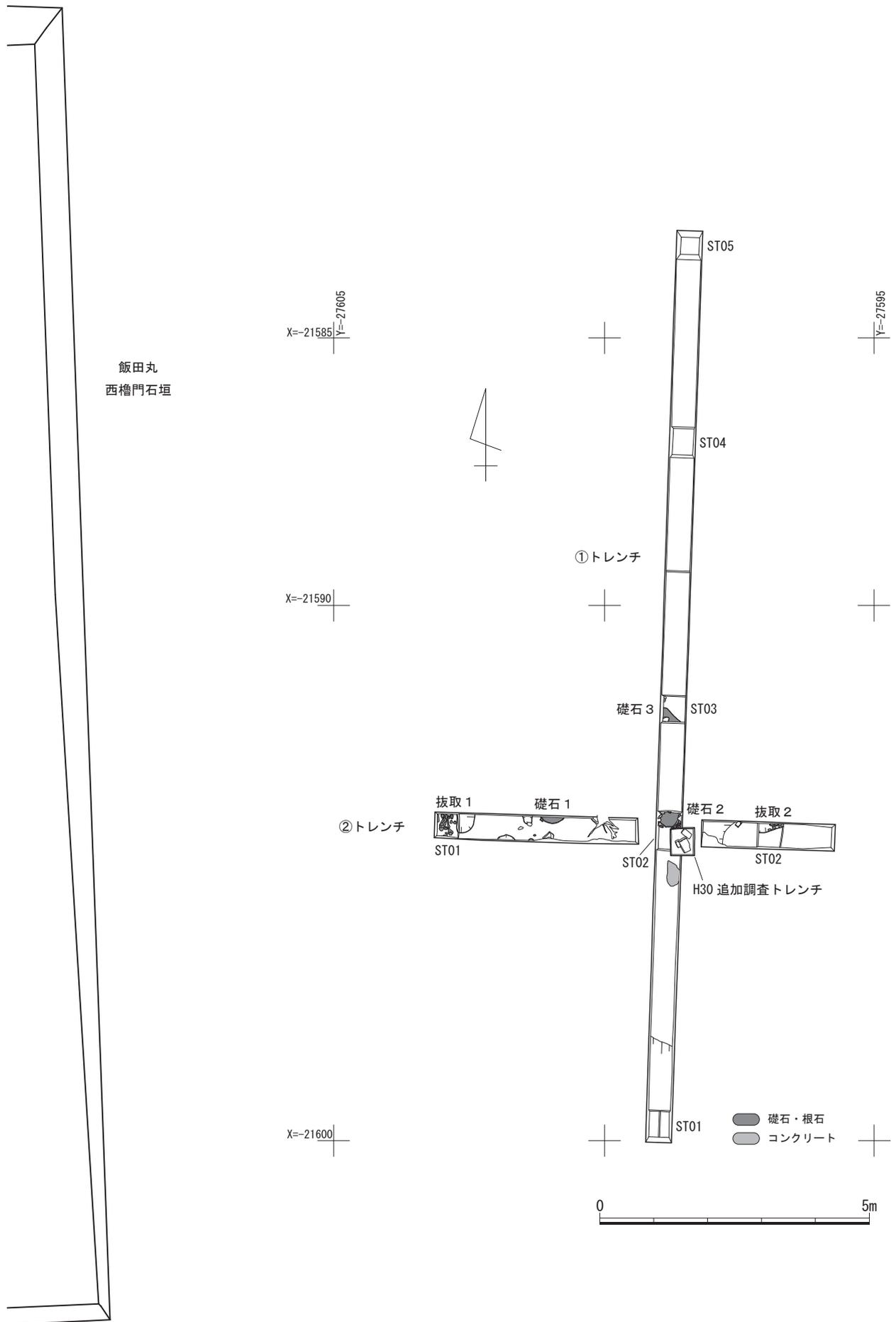
- I層：現代の堆積土である。おおむね昭和37年（1962）開催の躍進熊本大博覧会（以下、「大博覧会」という）に関わる造作や整地に関わるものがII層との判別根拠である。小砂利や園路などが埋め立てられている。また、配線・配管等で乱された土も含む。
- II層：明治10年（1877）の西南戦争後、旧日本陸軍が使用した段階の堆積土である。砂漆喰や煉瓦などを多用した構造物が代表的である。III層の上位には焼土や炭化物が混入する土層もみられ、造成に伴い混入したと捉えられる。
- III層：西南戦争とその前後に伴う土層である。焼失した建造物があった場所には焼土や炭化物が顕著に認められる。飯田丸や東竹の丸の場合には、明治10年（1877）2月19日の天守などが焼失した火災の発生時には建物が取り壊されていたとされ、明確な焼土層や炭化物は確認できない。焼失した建造物が伴わないものは、断定が困難であるが、建造物の廃絶を示す土層とII層に挟まれた焼土や炭化物が堆積する土層が検出できた場合は、III層として扱うこととする。
- IV層：江戸時代から近代初頭の土層である。暗褐色系粘質土を主体とし、瓦をはじめ数多くの遺物が含まれる。厚さ10～20cm程度で複数層に分けることが可能である。また、建造物の廃絶段階にあたる層位では、瓦片の上に白漆喰や壁土が豊富に堆積した状態で出土する場合もある。
- V層：飯田丸・東竹の丸の造成土である。西側に隣接する「二様の石垣」の根石調査時¹に検出された灰白色シルトと褐色系粘質土の盛土層である。これらの土砂は版築技法を用いて積み上げられた状況を示している。造成土の最上位は灰白色シルトで、標高32.8～33.0mのところで認められる。これまでの調査ではV層中から遺物が出土した事例はない。

（3）遺構・遺物

① 飯田丸トレンチ01（第13～18図）

【土層】

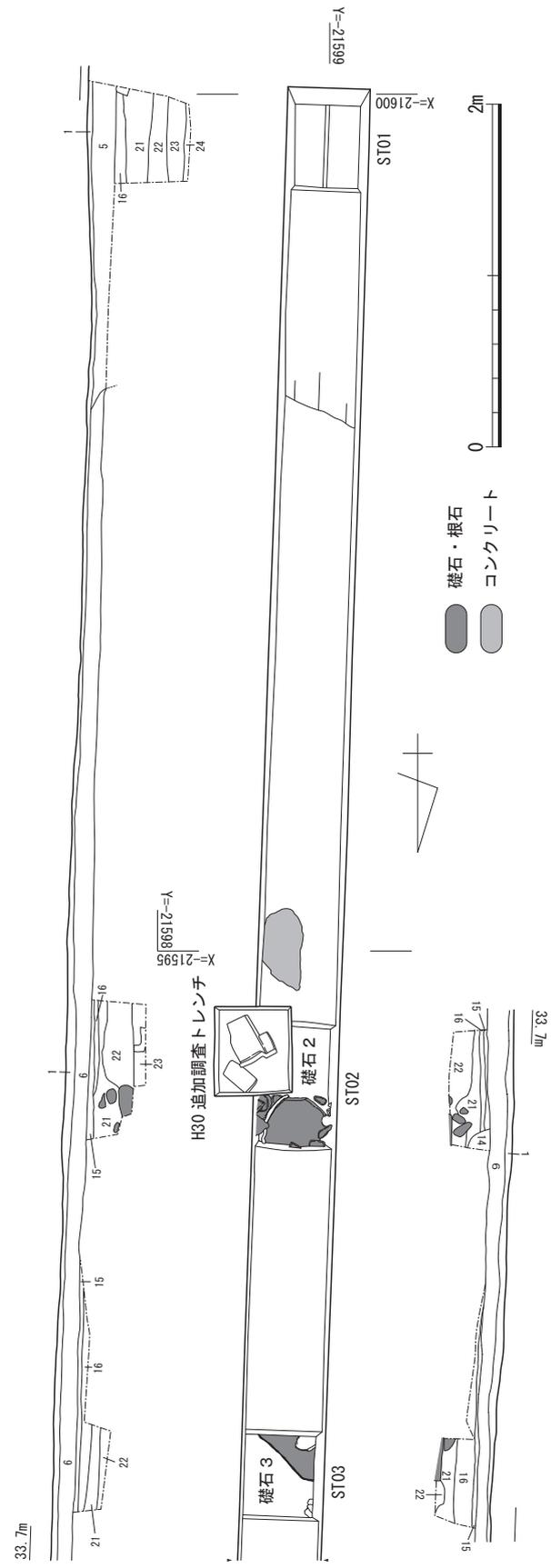
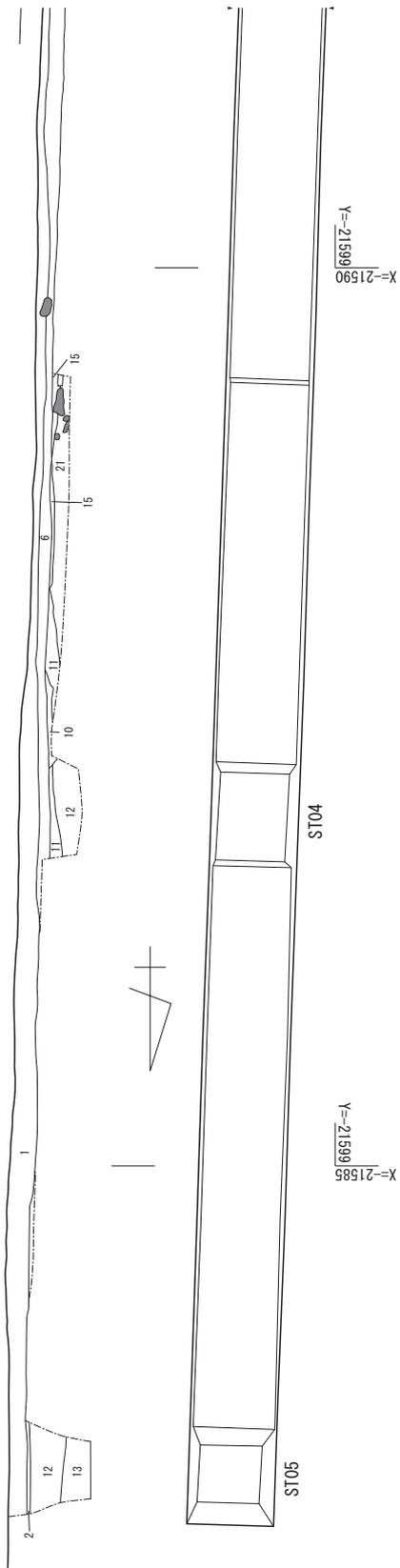
飯田丸西櫓門の東側に南北17m×0.5m（①トレンチ）、東西7.5m×0.5m（②トレンチ）の十字形に設定したトレンチである。この地点は旧日本陸軍第六師団の宿舎（昭和35年に取壊し）と「御城図」、
「御城内御絵図」に描かれた「御道具蔵」（明治9年以降に取壊しか）の推定位置にあたる。確認した土層



第13図 飯田丸トレンチ01配置図

①トレンチ

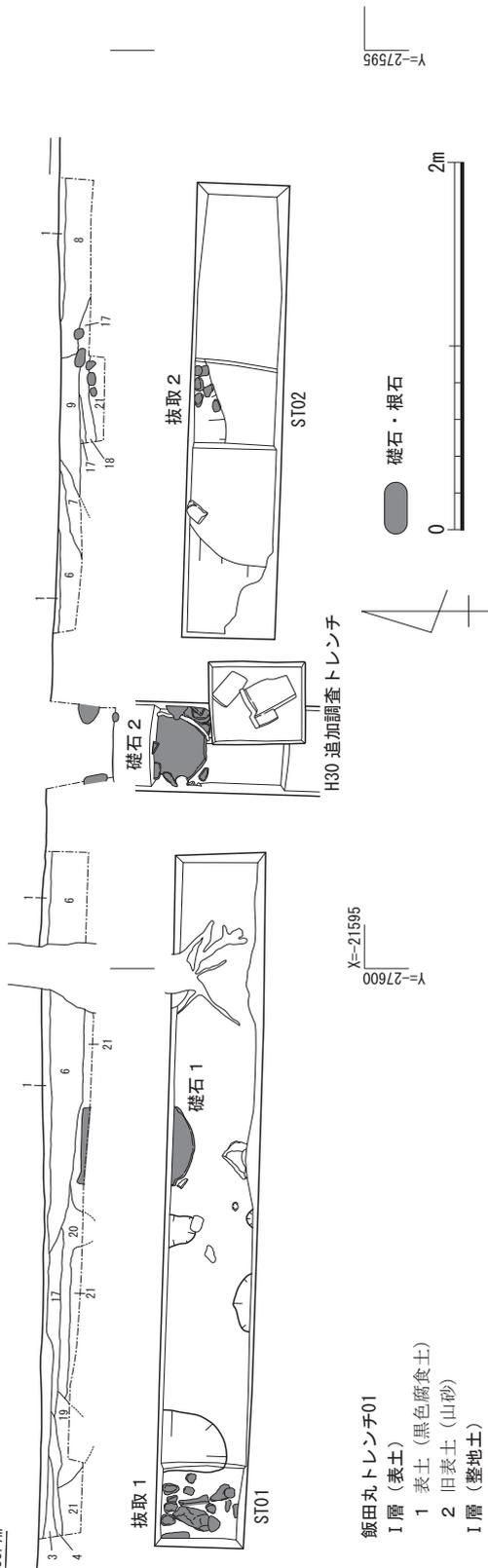
33.7m



第14図 飯田丸トレンチ01平・断面図1

② トレンチ

33.7m



飯田丸トレンチ01

I層 (表土)

- 1 表土 (黒色腐食土)
- 2 旧表土 (山砂)

I層 (整地土)

- 3 10YR4/1 褐灰色土 (砕石)
- 4 山砂

I層 (造成土 [昭和34~37年])

- 5 10YR3/4 暗褐色シルト質土 (しまり弱、φ~5cm礫中量、瓦片少量)
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土 (しまりやや弱、炭化物少量、黄褐色粒少量、φ~10cm礫少量、瓦片含)
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土 (しまりやや弱、焼土塊少量、瓦片含)
- 8 10YR3/3 暗褐色シルト質土 (しまり弱、焼土中量、φ~10cm礫少量、コンクリート・煉瓦片含)
- 9 10YR3/3 暗褐色シルト質土 (しまりやや弱、焼土・炭化物中量、φ~2cm礫少量)
- 10 10YR3/3 暗褐色シルト質土 (しまり弱、焼土・炭化物多量、φ~2cm礫中量、瓦片含)
- 11 10YR2/2 黒褐色シルト質土 (しまりやや弱、焼土・炭化物中量)
- 12 10YR4/4 褐色シルト質土 (しまり弱、焼土・炭化物中量、φ~2cm礫多量、瓦片含)
- 13 10YR3.5/4 暗褐色シルト質土 (しまり弱、焼土・炭化物多量、φ~10cm礫多量)
- 14 10YR3/2 黒褐色シルト質土 (21層土粒多量)
- 15 土間 (しまり強、細砂・小礫含)
- 16 10YR3/3 暗褐色シルト質土 (しまり強、炭化物中量、瓦片含)

II層 (明治9年以降造成土)

- 17 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土 (しまりやや弱)
- 18 10YR3/2 黒褐色シルト質土 (しまりふつう、炭化物少量、灰褐色シルト塊中量)
- 19 10YR3/2 黒褐色シルト質土 (しまり強、焼土・炭化物中量、φ~1cm礫少量、瓦片含)
- 20 10YR3/3 暗褐色シルト質土 (しまり強、焼土・炭化物少量、φ~1cm礫中量、褐色土塊中量)
- 21 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土 (しまりやや弱、暗褐色土粒中量、φ~10cm礫多量 [特に破石上面])

IV層 (近世整地土)

- 22 10YR3/2 黒褐色シルト質土 (しまりふつう、焼土・炭化物少量、φ~1cm礫少量)
- 23 10YR3/4 暗褐色シルト質土 (しまりふつう、焼土少量、炭化物微量、φ~1cm礫少量、褐灰色粘質土少量)
- 24 10YR3/3 暗褐色シルト質土 (しまりふつう、φ~5cm礫中量、褐灰色シルト質土多量、黄褐色土塊中量)

第15図 飯田丸トレンチ01平・断面図2

は大別して上層より表土、現代整地土、現代造成土、明治9年以降造成土、近世整地土を確認した。またトレンチの南端から北へ12mほどの範囲に砂質で固くしまる土層（15層・16層）を確認しており、宿舍の土間の可能性がある。この層を基準として、明治9年（1876）以降に取り壊された「御道具蔵」に関連する層位と昭和35年（1960）に宿舍を取り壊して以降の層位とに分離できる。また21層は、礎石の抜取りにより乱された層位である。

また、平成30年（2018）4月の追加調査では、現地表面から20cm下において江戸時代末から明治時代初頭の遺物包含層を確認した。

【遺構】

「御道具蔵」に関連する構造物は、礎石1～3、抜取1・2である。トレンチの都合上それぞれの石材の全体形状は把握していないが、石材上面は平滑であり、およそ石材と抜取りの中心が直線、または直交する位置にあたる。それぞれの中心距離は、東西方向が2.1m前後、南北は1.8m前後を測り、石材間の距離も整合的である。

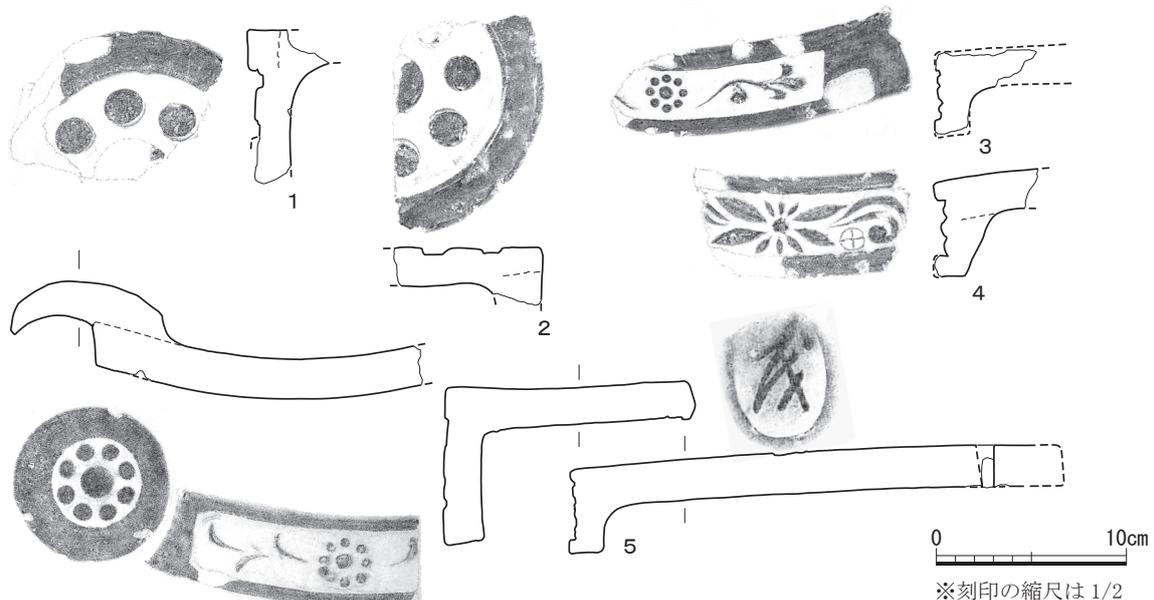
礎石1の天端レベルは標高33.16m、礎石2・3は標高33.26mと10cmのレベル差があるものの、城内の礎石レベルも同程度の差があるものもあり、許容範囲内と判断した。また、礎石2のみ断割りを実施し据付状況を確認したが、礎石を据え付けるための掘方は平断面ともに確認できず、整地と同時に施工された可能性がある。抜取1・2とした範囲では、ブロック状に土塊が入り、かつ10cm程度の円礫が混じる。円礫は礎石2で見られるような、礎石を固定するための根石と非常に形状や質が近似することから、礎石の抜取りによって乱れたものと考えられる。以上より、建物に伴う礎石と判断した。

また、平成30年度の追加調査では、礎石2が据えられている整地層（22層・23層）に、軒丸に九曜紋が施された軒目板棧瓦（第16図5）があり、一点のみの資料であるが、18世紀後半以前には、本建物が建てられたものと考えられ、今回の調査で礎石の上限年代を把握できる唯一の資料である。さらにこの整地層は、飯田丸トレンチ02より東側で確認されている互層状の整地層とは、土質や色調が異なり、別時期ないしは別単位の整地の可能性がある。

【遺物】

出土遺物の中で、瓦の呼称や表記については次の通りとする。

「目板瓦」は平面形が長方形を呈する平滑な板状の瓦の側端部前面に細長い直方体の目板を貼り付けた瓦とする。本丸御殿の報告書²で「板塀瓦」と報告していたものである。熊本地方で目板瓦と呼称していた



第16図 飯田丸トレンチ01出土遺物1

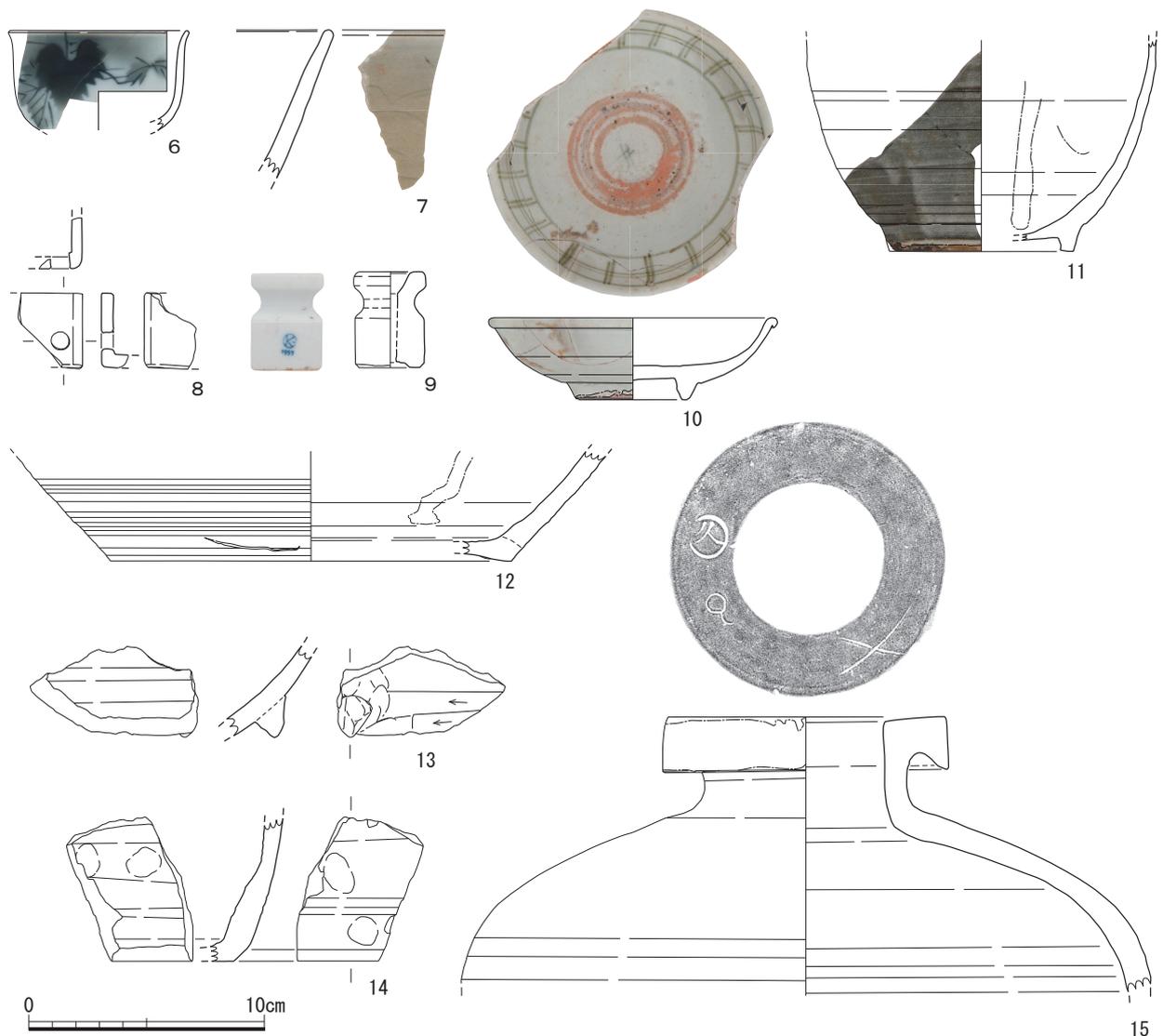
平瓦凹面側端部前半に蒲鉾状の目板を貼り付け棧瓦状の瓦にしたものは、目板棧瓦とする。軒先瓦の文様については、家紋として認識できる九曜紋・桔梗紋・蛇の目紋については「紋」を使用し、その他については「文」を使用する。

また、釘の分類については熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書1－飯田丸の調査－』熊本城調査研究センター報告書第1集 2014年のP114の分類に従った。

第16図1～5はトレンチ01から出土した瓦類である。1は①トレンチST01近世以降造成土（IV層）、2・4は①トレンチ南半部表土（I層）、3は①トレンチ北半部表土（I層）から出土した。

1・2は九曜紋軒丸瓦の瓦当片で、1は瓦当上半部3分の1程度、2は瓦当右下半部3分の1程度が残存する。瓦当文様は九曜紋で、両者ともに中心曜径までは把握できないが、1は周曜径1.7cm、2は周曜径2.0cmを測る。瓦当周縁・側端・裏面のナデ調整仕上げ、丸瓦接合面の横方向のカキヤブリは共通する。両者ともに筈ズレがあり、2の瓦当面にはキラコが認められる。

3は九曜紋軒平瓦の瓦当片である。瓦当右半部2分の1程度残存し、平瓦部もやや残る。瓦当は顎貼り付け技法で成形され、顎部を丁寧に仕上げ、接合面には横方向のカキヤブリが認められる。瓦当文様は九曜紋を中心飾として、子葉が下・下・上に反転し、蔓の先端は膨らんで珠文状となる唐草文を配する。子葉は鉤状と不明瞭な部分がある。4は軒棧瓦の軒平部の瓦当片で、瓦当中央部4分の1程度が残存する。瓦当文様は菊文を中心飾として、左右に2本の唐草が別々に伸びる。中心飾りの右下に「⊕」の浮彫も認



第17図 飯田丸トレンチ01出土遺物2

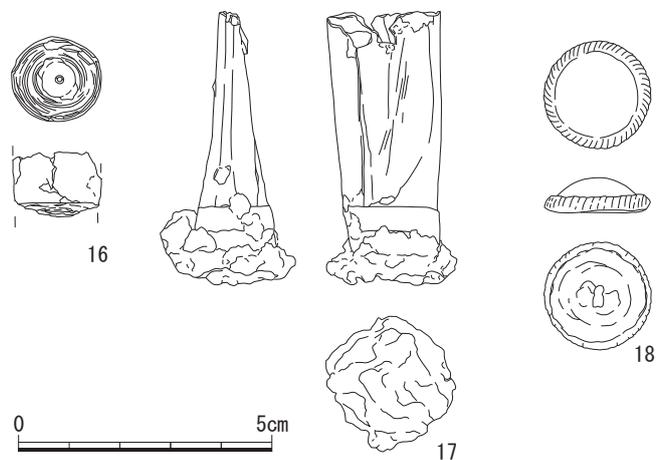
められる。瓦当は顎貼り付け技法で成形されており、平瓦部の接合面には横方向のカキヤブリが認められる。

5は平成30年度追加調査トレンチから出土した軒目板棧瓦である。近世整地土（IV層）から出土した。軒丸瓦部は完形、軒平瓦部は左半部3分の2程度が残存し、平瓦部も下端まで残存する資料である。軒平部の瓦当は顎貼り付け技法で成形され、その後、目板部を接合し、最後に軒丸瓦の瓦当を接合するもので、瓦当裏面の軒平瓦部との接合面近くに刻み目が認められる。瓦当文様は、軒丸瓦部は九曜紋、軒平瓦部は中心飾が九曜紋、巻きが緩やかな上・下・上に反転する唐草文を配する。丸瓦凸面は工具によるナデが顕著で、凹面は未調整である。軒平瓦の顎部は横方向のナデで仕上げられ、平瓦凹面・凸面の上端部は横方向のナデ、そのほかは不整方向のナデが施されており、凹面に「茂」の楕円形刻印が認められる。また凹面側からの釘穴があり、鉄釘が残存する。

第17図6～15はトレンチ01から出土した陶磁器類である。6・12は①トレンチST01近世以降造成土（IV層）、7・11は①トレンチST04近代以降（II層）、8・9は②トレンチ東半部表土（I層）、10・14は①トレンチST05表土（I層）、13・15は①トレンチ北半部表土（I層）から出土した。

6は磁器小碗で、口縁から体部までが残る。主文は蔓で、一部吹き絵（エアスプレー）の手法がみられる。7は青磁鉢で、口縁から体部にかけての破片である。器壁は厚く、口縁部に向かってやや外反し、端部を丸く仕上げる。内外面に貫入が認められる。8は用途不明の磁器で、箱状を呈する。外側壁に施釉がみられ、側壁下位の隅近くに径8.0mm程度の穿孔がある。表面に化学コバルトの小斑が認められる。9は磁器製の磚子である。低電圧配電用の小型ノップ磚子で、上端から3分の1に電線の巻き付け溝がある。胴部に「Ⓚ1957」のマークが認められる。10は磁器染付皿で、口縁部から体部の2箇所を欠くほか完形に近い。口縁端部は玉縁状をなし、体部は丸みを帯びる。高台は内傾する逆三角形を呈し、端部にやや平坦部をつくりだす。呉須は暗緑色（モスグリーン）の発色で、内面には二重格子文、内底面には「井」を描く。内底の蛇の目釉剥ぎは粗く、釉が掻き切れずに筋状に残る。また重ね焼きの上の個体の高台の圧痕もみられる。高台と内底において釉の爛れが認められる。

11は陶器瓶で、高台から体部までの破片である。高台は断面逆台形を呈し、体部は丸みを帯びながら立ち上がる。外面のみに施釉され、内面に釉垂れが認められる。高台端部及び高台内には施釉していない。高台端部、高台内に砂が付着する。肥前の瓶V期³と考えられる。12は陶器鉢である。体部下位から底部にかけての破片で、体部は外開きしながら立ち上がるようである。外面にはカキ目、内面はナデを施す。内外面は黒柿色を呈する。13は土瓶の底部片で、底部縁に円錐状の脚が付くものである。内面に回転ナデ、外面は工具による回転ナデ、底部縁は回転ヘラケズリ後、ナデを施す。14は陶器壺である。底部端から体部にかけての破片で、やや丸みを帯びながら立ち上がる。外面に回転ナデ、内面に回転ナデを施す。内外面ともに指頭圧痕が認められる。15は陶器甕で、口縁から体部にかけての破片である。口縁端部は断面三角形を呈し、口縁部を平たく仕上げている。その口縁部に「○に久」「8」の刻印と「×」のヘラ書きが認められる。頸部は短く、体部は肩部からやや丸みを帯びながら鋭角に垂下するようである。内外面に施釉されているが、口縁部は釉をふきとり、一部釉垂れが認

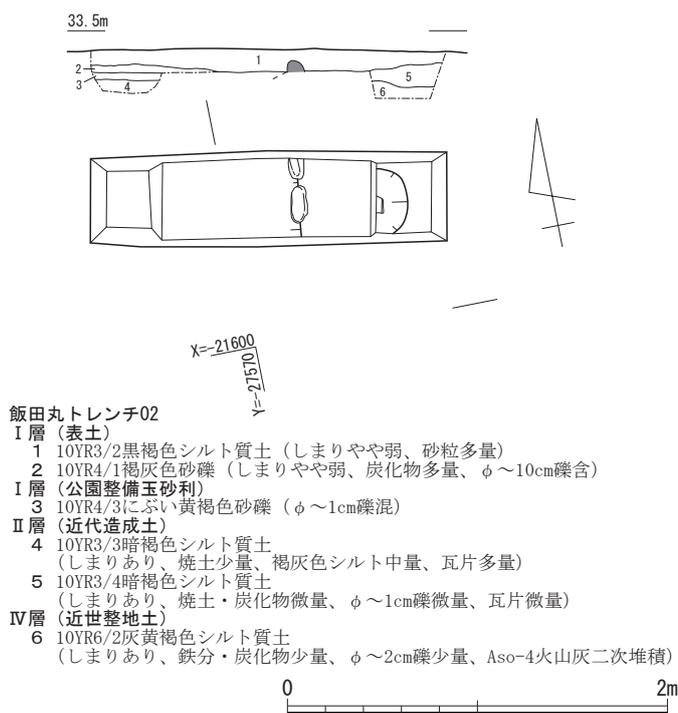


第18図 飯田丸トレンチ01出土遺物3

められる。

第18図16～18はトレンチ01から出土した金属製品である。16・18は①トレンチST04近代以降（Ⅱ層）、17は①トレンチST05表土（Ⅰ層）から出土した。

16・17はスナイドル銃の薬莖である。16はカップのみの個体である。カップは銅製で、内部の雷管とその周辺の蠟で固めた巻紙が認められる。ディスク（底板）は消失しているが、鉄錆が認められることから鉄製と考えられる。17はケース（薬筒部）まで残存し、縦方向の継ぎ目も認められる。底部は鉄錆で覆われており、ディスク（底板）は鉄製と考えられ、そのほかは銅製である。18は銅製の釦で、表面の文様は不明である。釦の縁は別造の銅板で被せ、表側に刻み目が入れている。

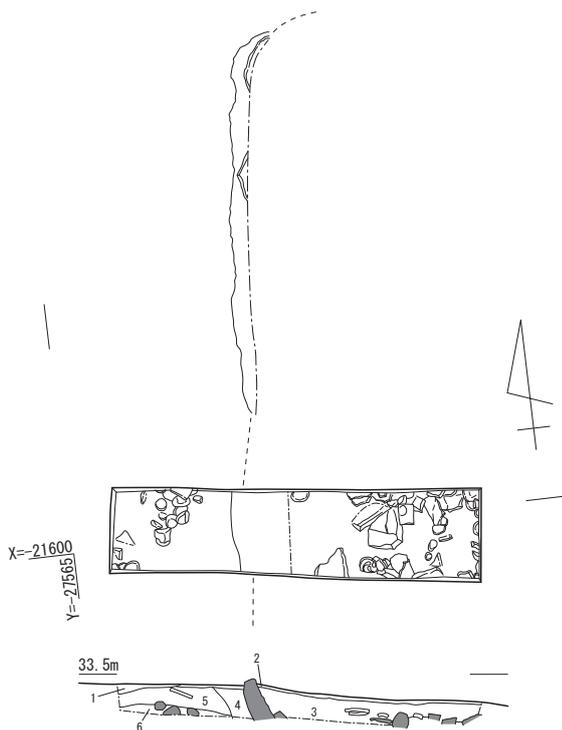


第19図 飯田丸トレンチ02平・断面図

② 飯田丸トレンチ 02（第19図）

【土層】

飯田丸中央やや北寄りに1.9m×0.5mで設定したトレンチである。この地点は明治9年（1876）の図面に描かれた建物の推定位置にあたる。確認した土層は大別して上層より、表土、公園整備玉砂利、近代造成土、近世整地土である。トレンチ東側の小トレンチ内では、標高35.95mのレベルで整地層（6層）を確認した。この整地層は、後述する飯田丸トレンチ04で確認している互層状の整地層と一連のものと考えられる。トレンチの中央に位置する南北に並ぶ10cm×20cmの2石の円礫は公園整備に伴うものと考えられ、円礫の西側にのみ玉砂利（3層）が広がることから、西側が当初の園路と考えられる。

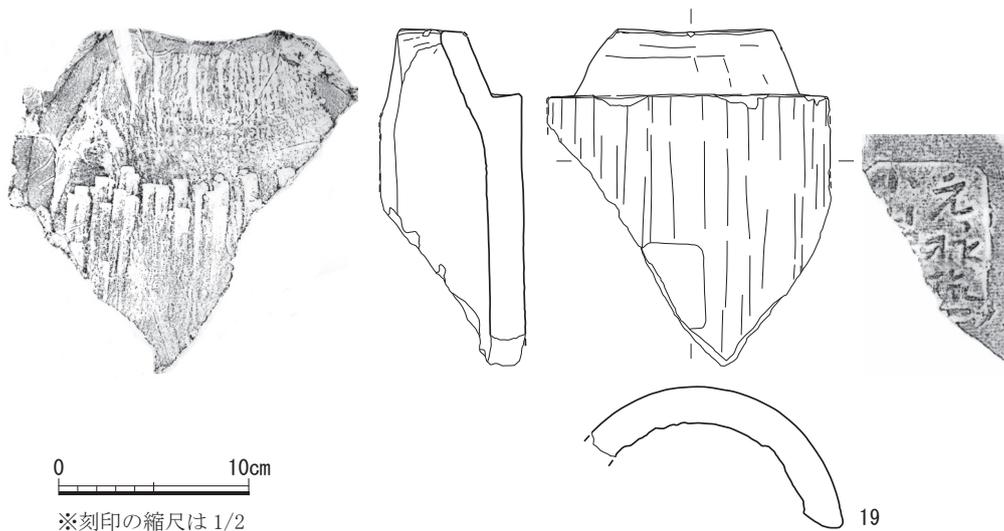


第20図 飯田丸トレンチ03平・断面図

③ 飯田丸トレンチ 03（第20・21図）

【土層】

飯田丸中央やや北寄りに2.0m×0.5mで設定したトレンチである。この地点は昭和34年（1959）の現状変更に伴う図面に描



第21図 飯田丸トレンチ03出土遺物

かれた建物、「御城内御絵図」に描かれた建物の推定位置にあたる。確認した土層は大別して上層より、表土、水槽枅関連埋土、近代造成土、近世整地土である。トレンチの中央に傾斜角度 45 度、砂漆喰にコンクリートを貼り付けた壁体構造の水槽枅西壁を確認しており、同様の構造物をトレンチ 04 の東端でも確認している。絵図面には見えないが、昭和 36 年（1961）の写真より、貯水槽と判断した。またこの貯水槽は大博覧会の開催されていた間も残されており、詳細な解体時期は不明である。近世の整地土の可能性のあるトレンチ西半の 6 層は、遺物を含まず、土中に混じりが少ない。

【遺構】

近世の整地土とした 6 層中には 15cm 程度の円礫が集中し、瓦などの遺物は混じらない。またこの石材は飯田丸トレンチ 01 で確認した根石と形状や大きさが類似している。周辺には「御城内御絵図」に描かれた建物の範囲にあり、本トレンチの円礫も建物の遺構に関連する構造物の可能性がある。

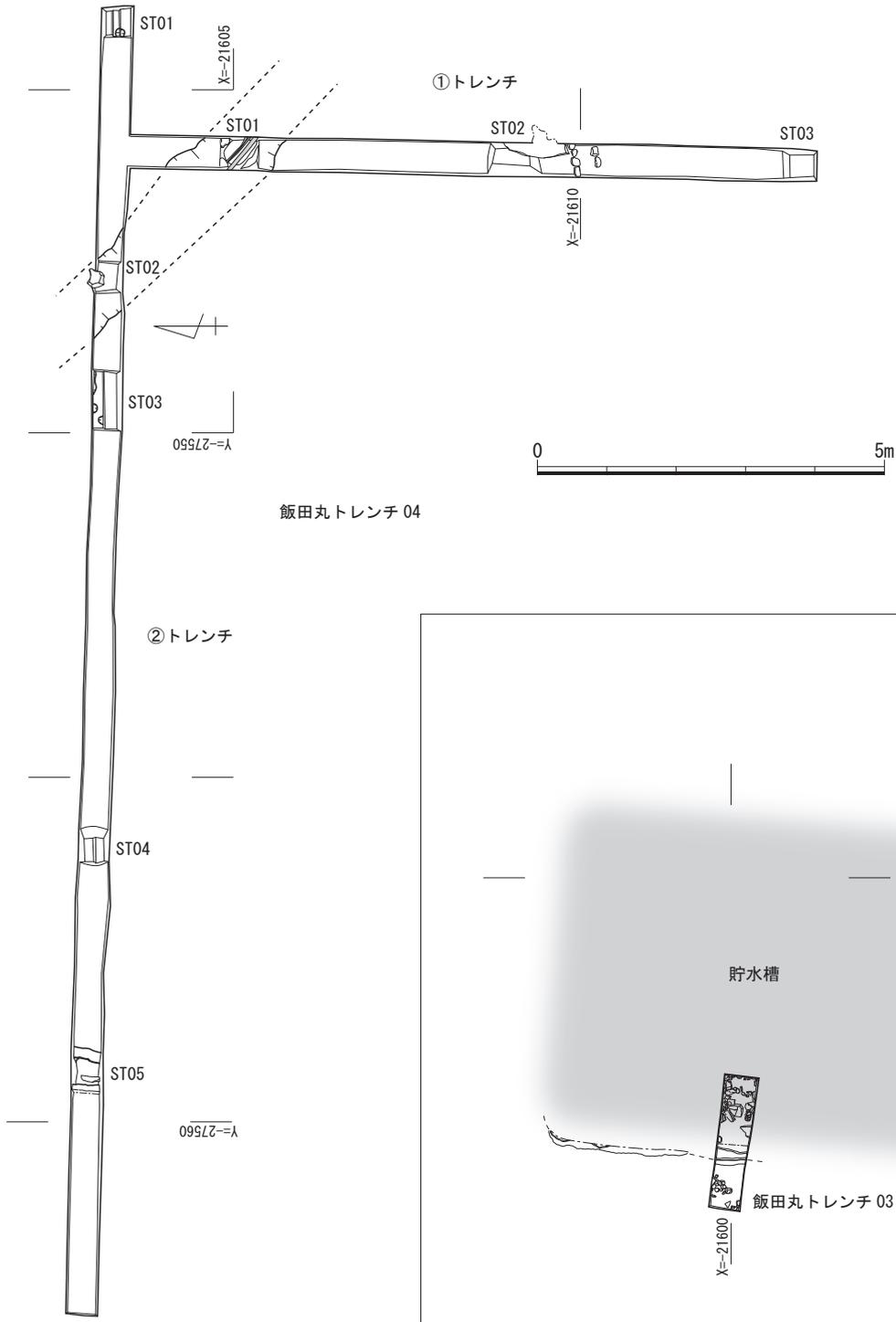
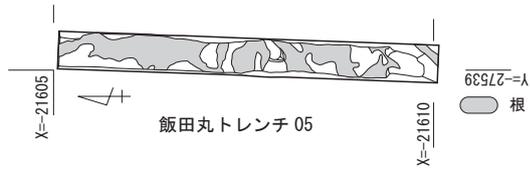
【遺物】

第 21 図 19 はトレンチ 03 I 層から出土した丸瓦片で、玉縁部から後端付近が残存する。玉縁部から後端付近にかけての凸面は横方向の丁寧なナデ、体部は縦方向のナデを施す。「元禄口小山 []」の大型長方形の刻印が認められる。玉縁部から後端付近までの凹面には布目痕と布の燃れ痕が認められ、体部には斜方向の条痕と縦方向の棒状の工具痕が認められる。

④ 飯田丸・トレンチ 04（第 22～27 図）

【土層】

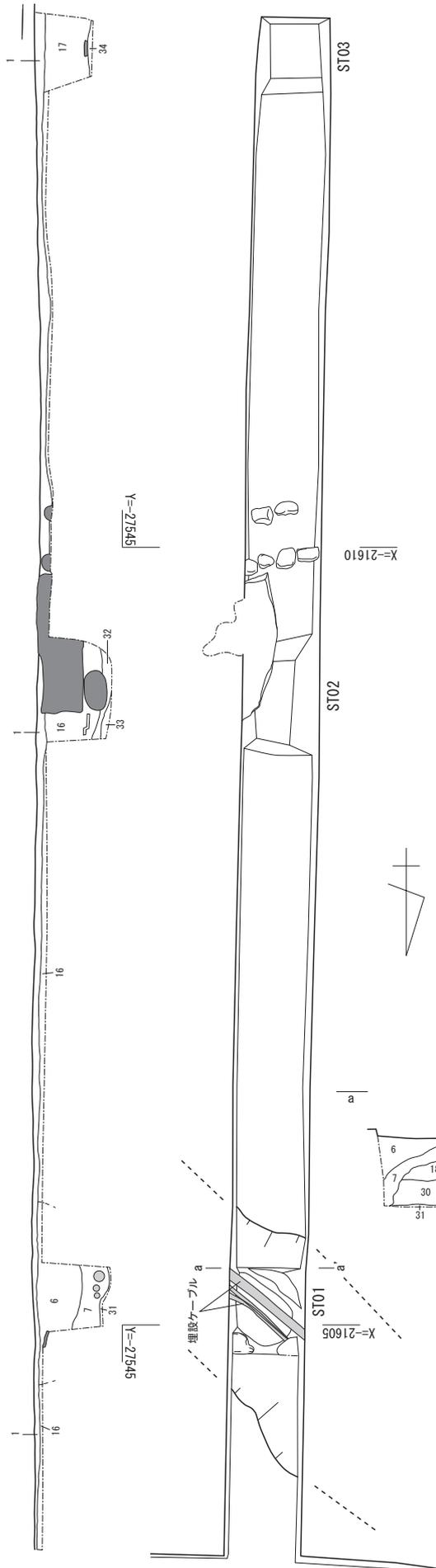
飯田丸の東寄りに南北 10 m×0.5 m（①トレンチ）、東西 19 m×0.5 m（②トレンチ）と L 字形に設定したトレンチである。この地点は「御城内御絵図」に描かれた建物推定位置にあたる。確認した土層は大別して、表土、電気埋設溝層、貯水槽枅関連土、近代造成土、近世整地土を確認した。近代造成土は厚さ 20cm～40cm 程とばらつきがあり、それを除去すると、すべての小トレンチで近世の整地層（21 層以下すべて）が確認された。整地層の断ち割りを実施した②トレンチ ST01 では、整地層が 6 層あり、スコリアを含む灰褐色シルト、褐色シルト、スコリアを含む白色シルトがそれぞれ互層状に堆積していた。トレンチ 02 でもその堆積を確認している。この整地層は、本丸御殿 F93-63⁴ トレンチで確認されている「二様の石垣」新段階の石垣前面に施された整地層と土質や色調が類似しており、トレンチ 02～04 の整地層と一連の可能性はある。



第22図 飯田丸トレンチ03~05配置図

①トレンチ

33.5m



飯田丸トレンチ04

I層 (表土)

- 1 10YR2/1黒色シルト質土 (φ~5cm礫多量)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質土 (φ~2cm礫多量、瓦片・タイル片含)
- 3 10YR6/4にぶい黄褐色シルト質土 (2.5Y7/1灰白色シルト質土混)
- 4 10YR4/2灰黄褐色シルト質土 (しまり弱、礫少量、瓦片含)

I層 (電気線埋設溝)

- 5 7.5YR3/2黒褐色シルト質土 (10YR3/3暗褐色シルト質土混、礫少量、瓦片少量)
- 6 10YR3/3暗褐色シルト質土 (φ~1cm礫・廃棄物含)
- 7 10YR3/4暗褐色シルト質土 (φ~3cm礫・廃棄物・砕石含)

I層 (現代土)

- 8 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 (φ~2cm礫中量、10YR7/1灰白色シルト塊中量)
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色細砂シルト質土 (礫・瓦片少量)
- 10 10YR4/4褐色細砂混シルト質土 (しまり弱)
- 11 10YR5/4にぶい黄褐色シルト質土 (しまりなし、10YR4/1褐灰色シルト質土塊・7.5YR6/6橙色シルト質土塊含)

I層 (貯水槽埋戻土)

- 12 10YR3/4暗褐色シルト質土 (φ~5cm円礫混、鉄屑・コンクリート片含)

I層 (貯水槽掘形)

- 13 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質土 (10YR6/2灰黄褐色シルト質土 (風化軽石) 塊・7.5YR4/6褐色粘質土塊含)

II層 (近代造成土)

- 14 10YR3/1黒褐色シルト質土

- 15 10YR3/4暗褐色シルト質土 (φ~3cm礫・廃棄物・砕石含)
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質土 (φ~2cm礫多量、瓦片・タイル片混)
- 17 16層に類似
- 18 10YR4/4褐色シルト質土 (2.5Y7/1灰白色シルト質土混、φ~5cm礫微量)

IV層 (旧表土)

- 19 10YR5/3にぶい黄褐色シルト質土 (10YR5/8黄褐色シルト質土塊微量)
- 20 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質土 (礫混、10YR6/4にぶい黄褐色シルト質土塊混、瓦片含)

V層 (近世整地土)

- 21 10YR4/1褐灰色シルト質土 (10YR7/1灰白色シルト質土混、しまり強、22層との境に鉄分付着、瓦片含)
- 22 10YR7/1灰白色シルト質土 (10YR8/1灰白色シルト質土混)
- 23 7.5YR4/4褐色シルト質土 (しまりふつう、7.5YR5/4にぶい褐色シルト質土塊少量)
- 24 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質土 (10YR7/1灰白色シルト質土混)
- 25 10YR7/2にぶい黄褐色極細砂混シルト質土 (しまり強)
- 26 10YR5/4にぶい黄褐色シルト質土 (10YR6/2灰黄褐色シルト質土塊中量)
- 27 10YR7/2にぶい黄褐色シルト質土 (風化礫・軽石小片少量)
- 28 10YR7/2にぶい黄褐色シルト質土 (10YR5/4にぶい黄褐色シルト質土混、φ~5cm礫・軽石小片少量)
- 29 10YR4/4褐色シルト質土 (10YR7/2にぶい黄褐色シルト質土塊含、礫・軽石小片少量)
- 30 10YR7/1灰白色シルト質土 (φ~3cm風化軽石・礫中量、10YR4/6褐色シルト質土塊微量)
- 31 10YR6/4にぶい黄褐色シルト質土 (2.5Y7/1灰白色シルト塊微量)
- 32 10YR6/1褐灰色シルト質土 (風化礫・軽石少量)
- 33 10YR5/3にぶい黄褐色シルト質土 (10YR6/2灰黄褐色シルト塊中量、風化礫・軽石小片少量)
- 34 10YR7/1灰白色シルト質土 (φ1~5cm風化礫・軽石小片少量)



第23図 飯田丸トレンチ04平・断面図1

【遺構】

①トレンチ ST01、②トレンチ ST01 では、近代造成土に似る落ち込みを確認しているが、帰属時期や性格については今回の調査では判断できなかった。

①トレンチに露出している大型石材は、上面が平滑であったことから、礎石の可能性を考え、ST02 を設定し確認を実施したが、石材の下面までタイルやコンクリートが混じることから、礎石でないことが判明した。また下面には、五輪塔の一部と考えられる石材が使用されている。また大型石材の南に隣接して、20cm ほどの円礫を 2 条並べた列があり、園路縁石の痕跡と考えられる。

②トレンチの西端でトレンチ 03 と同様、傾斜角度 45 度、砂漆喰にコンクリートを貼り付けた壁体構造の貯水槽枡東壁を確認している。

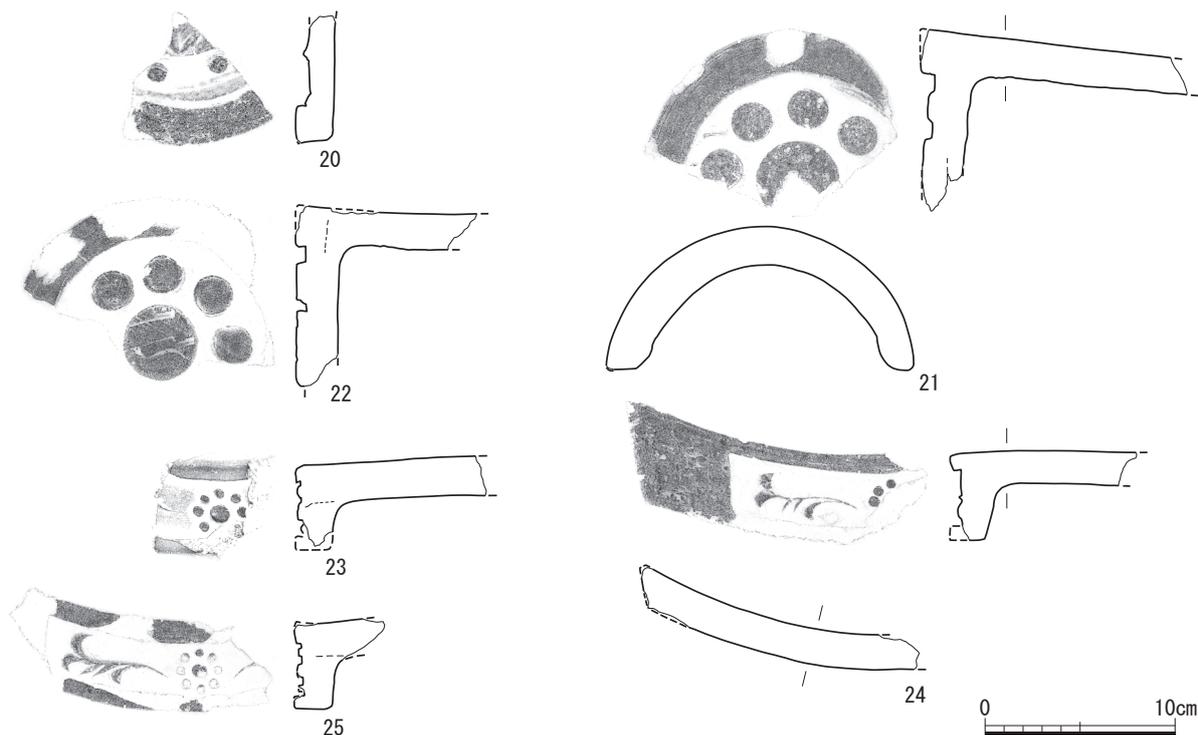
【遺物】

第 25 図 20～25 はトレンチ 04 から出土した瓦類である。20 は②トレンチ ST03 I 層、21・24・25 は②トレンチ北半部表土（I 層）、22 は①トレンチ ST02 I 層、23 は①トレンチ ST01 I 層から出土した。

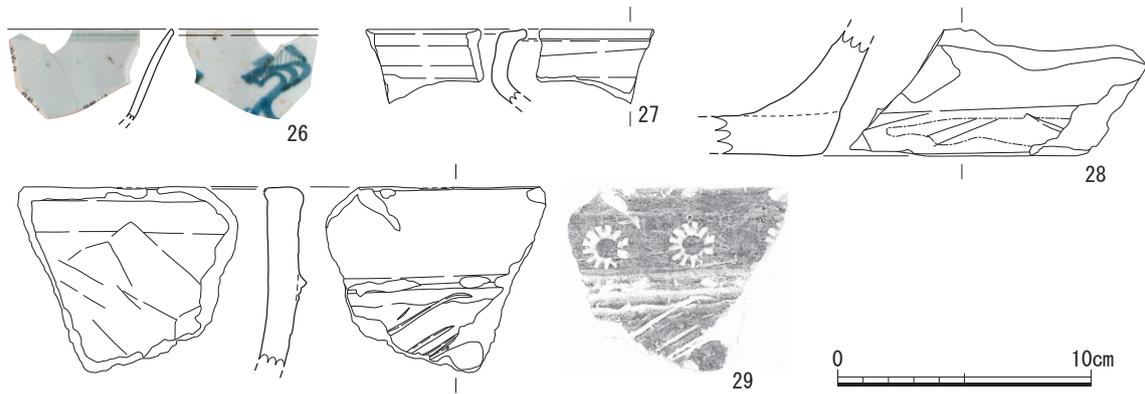
20 は桔梗紋軒丸瓦の瓦当片で、瓦当下半部 7 分の 1 程度が残存する。桔梗紋の周囲に珠文が配されるもので、珠文 2 個と花卉 1 弁のみ残存し、雌蕊と雄蕊を欠く。花卉はやや丸みを帯びるようである。瓦当周縁・側端・裏面の側縁近くは横方向のナデ、瓦当裏面の中心付近に縦方向のナデを施す。

21・22 は九曜紋軒丸瓦の瓦当片である。21 は瓦当上半部 3 分の 1 程度と丸瓦部が一部残存し、22 は瓦当上半部 3 分の 1 程度とやや丸瓦部が残存する。21 は中心曜径 4.3cm、周曜径 2.1cm、周縁幅 2.4cm を測り、22 は中心曜径 4.0cm、周曜径 2.1cm、周縁幅は 2.2cm を測る。両者ともに丸瓦は瓦当頂部付近に接合されている。瓦当周縁・側端・裏面のナデ調整仕上げ、丸瓦接合面の横方向のカキヤブリは共通する。21 の中心曜及び周曜は軽くナデが施されている。22 の瓦当面には筈ズレが認められる。また 21 の丸瓦部凸面には縦方向の丁寧なナデで仕上げ、凹面に布目痕と細い紐状の圧痕が認められる。

23～25 は九曜紋軒平瓦である。いずれも瓦当から平瓦部にかけての細片で、瓦当は 23 で瓦当中央付近 7 分の 1 程度、24 で瓦当左半部約 2 分の 1 程度、25 で瓦当左側 3 分の 1 程度残存する。瓦当は顎貼り付け技法で成形されており、25 の接合面の平瓦部に横方向のカキヤブリが認められる。瓦当文様については、



第25図 飯田丸トレンチ04出土遺物 1

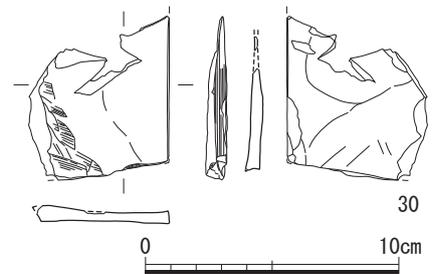


第26図 飯田丸トレンチ04出土遺物2

23 の中心飾の九曜紋はやや大きめで、左の唐草端部が僅かに残る程度で、24・25 は九曜紋の中心飾と鈎状の子葉が下・上・下に反転し、下向きの直線的な子葉が2本認められる唐草文様を配したものである。25の方が裾広の太めに造り出されている。いずれも瓦当周縁・側端・裏面に横方向のナデが施されており、瓦当上端の面取りは不明瞭であるが、23 は丸みを帯びる。24 以外は文様区面にもナデを施す。平瓦凹面には丁寧なナデ、凸面にもナデを施している。

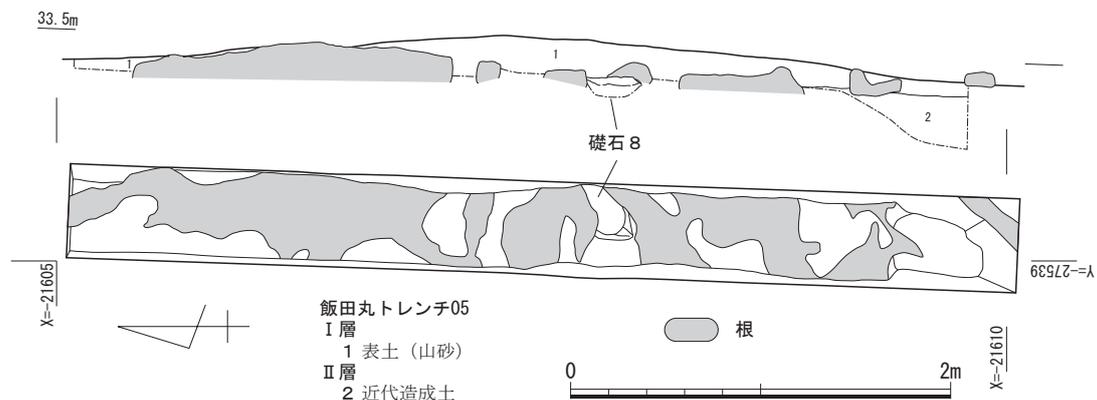
第26図 26～29はトレンチ04から出土した陶磁器類である。26・29は①トレンチST02 I層、27は①トレンチST03 I層、28は①トレンチST01 I層から出土した。

26は磁器染付端反碗である。口縁部から体部までの破片で、やや外反気味に立ち上がり、端部はやや丸みを帯びる。外面に流水が描かれ、内面の口縁部近くに2条の圈線がみられる。27は陶器小型甕の口縁部から頸部までの破片である。頸部は短くやや外傾しながら立ち上がり、口縁部は端部を外開きにするもので、頂部はやや凹面を形成する。黒柿色の釉を内外面に施す。28は陶器甕の体部下位から底部にかけての破片である。底部は平底で、厚手である。内外面に施釉されているが外底面には及んでいない。外底面には不整方向のナデを施す。また内底面に砂粒が多量に付着している。29は瓦質土器火鉢の口縁部の破片である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部はやや内側につまみ、平たく仕上げる。外面に凸帯を設け、口縁端部との間に菊花文のスタンプを配する。下位には斜め方向の工具痕がみられる。



第27図 飯田丸トレンチ04出土遺物3

第27図 30は①トレンチST02 I層から出土した砥石である。非常に薄く、右側面、表面左隅部に研磨痕が認められる。



第28図 飯田丸トレンチ05平・断面図

⑤ 飯田丸トレンチ 05 (第 28 図)

【土層】

飯田丸の東端に設定した南北 5 m × 0.5 m のトレンチである。「御城内御絵図」にみる「元塩蔵」の北側の礎石が露出しており、西側梁行の残存状況を確認するために設定した。土層は、表土（山砂）、近代造成土を確認した。トレンチ中央の標高 33.35 m で、上面平滑な 40cm 程度の石材が露出する。

【遺構】

確認した礎石は、周囲に露出する「元塩蔵」の礎石の天端の標高 33.25 m 前後に比べて 10cm ほど高いが、城内の礎石レベルも同程度の差があり、許容範囲内と判断し、「元塩蔵」の礎石と判断した。そのほかの礎石は現状では確認できなかった。

⑥ 飯田丸内露出石材

【地点 1】(第 29 図)

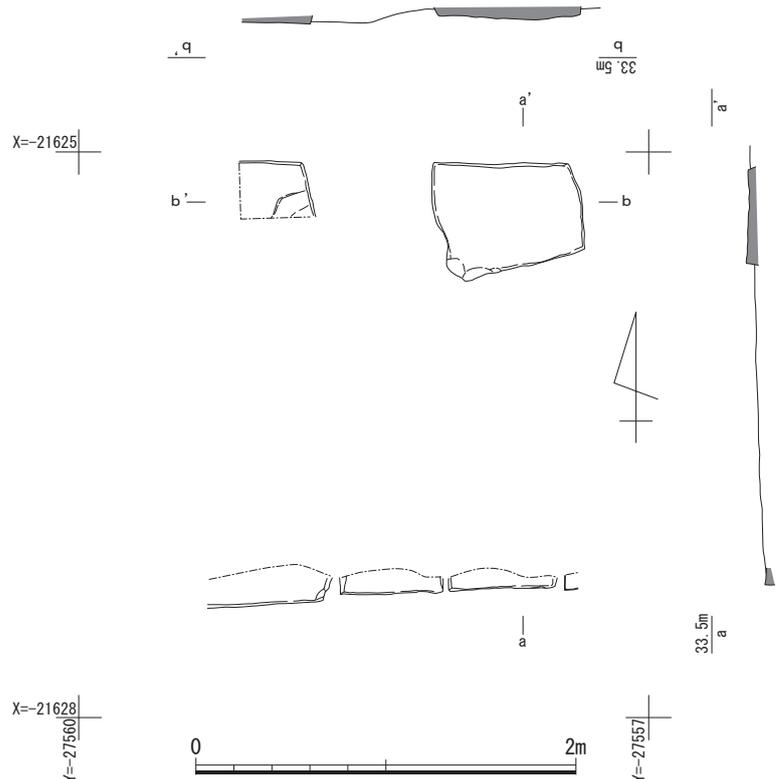
本地点には、大型石材 1 石と 4 分の 1 程度がみえる石材が露出する。東側の大型石材は上面が平滑で東西 79cm × 南北 62cm、西側の部分的にみえる石材は東西 40cm × 南北 30cm を測る。この 2 石は石垣天端から 2.0 m 前後を測り、石垣天端より石材に向かい緩やかに 10cm ほど高くなっている。左右の石材のレベル差はほとんどない。

この地点は、三階御櫓のすぐ南側に付属する櫓の北側桁行の想定位置にあたる。「御城内御絵図」では、この櫓は石垣天端から北側桁行までの長さが 1.97 m (六尺五寸) の位置にあり、絵図面の設計どおりに建物を配置する

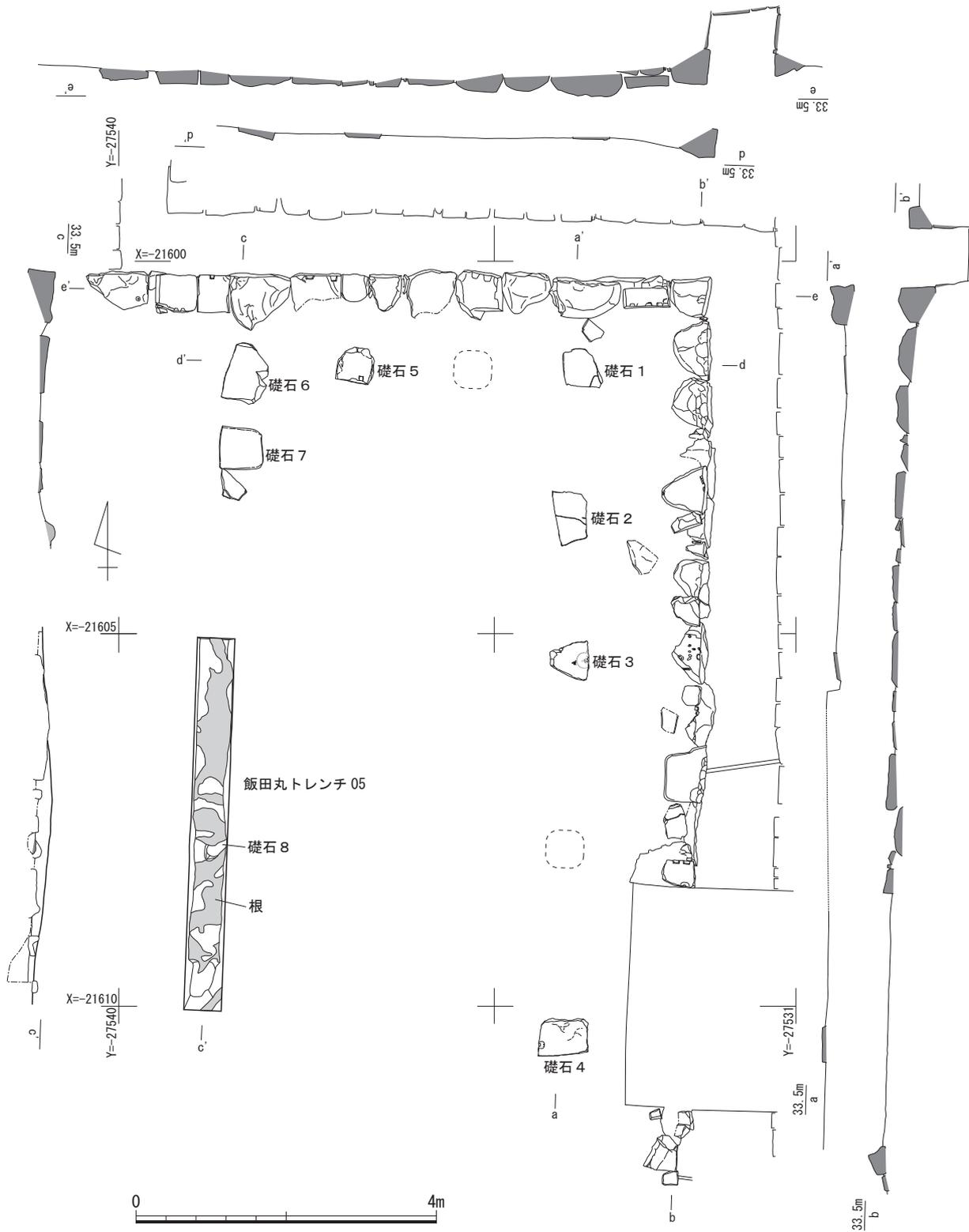
と、西側からちょうど 4 石目の礎石位置に相当することから、礎石として原位置を保っている可能性が高いと判断した。この両石材の軸線上の地表面を刺突すると、石材の反応が同じ高さで広く確認できることから、一定程度残存しているものと考えられる。

【元塩蔵内北側礎石群】(第 30 図)

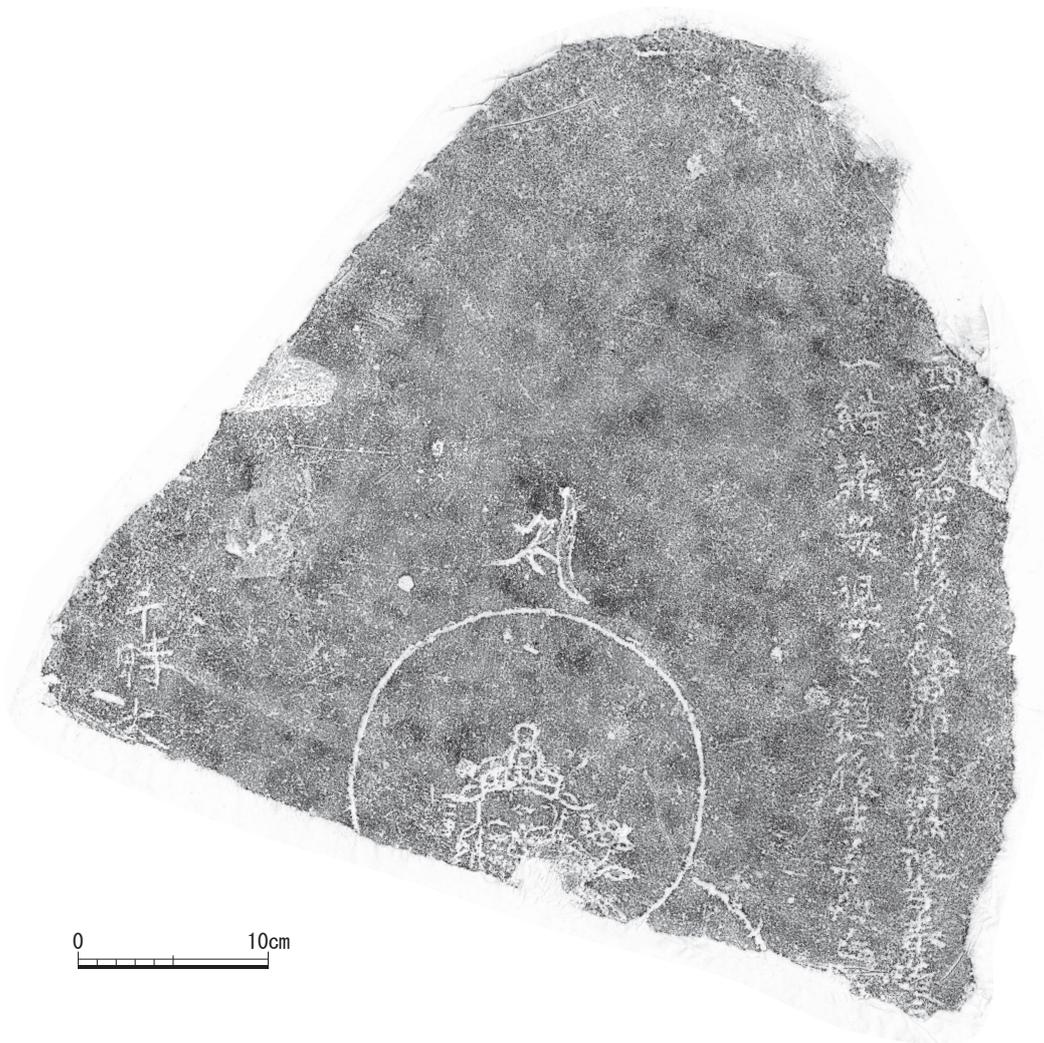
飯田丸東端の「元塩蔵」(4 間 × 14 間の南北棟)があった位置に、礎石と考えられる既に露出している石材 7 石(礎石 1 ~ 7)とトレンチ 05 で検出した石材 1 石(礎石 8)の計 8 石を確認している。石材は一边 50cm 程度の方形を指向し、上面は平滑である。なお、石材上面に墨描による文字や計画線などは確認できていない。一部の石材は樹木の根によって傾いているものもあるが、礎石上面の標高は 33.2 ~ 33.3 m 前後で、北側梁行と東側桁行の天端レベルは 33.4 m 前後を測る。梁行、桁行の礎石間距離については、北側梁行で五尺等間(1.5 m)、東側桁行で、礎石 1 ~ 3 は六尺五寸等間(1.97 m)であるが、礎石 3 ~ 4 までは芯々で 5 m 程と距離があき、六尺五寸等間とはならない。礎石 4 が後世に移動されている可能性もあるが、建物の軸線に石材が合っており、また石材上面の標高も大きな差がないことから、原位置を保っている可能性が高い。現状からは元塩蔵の基礎構造についてこれ以上言及できないので、今後の調査研究を待ちたい。



第29図 飯田丸地点 1 (礎石)



第30図 飯田丸元塩蔵内北側礎石群(露出石材)



第31図 元塩蔵内北側礎石群礎石3(板碑)

礎石3は、中世後半の板碑が半分程度に割られ転用された礎石で、本来の全体形状の上半分程度が残存する(第31図)。観音菩薩を意味する梵字「サ」、その下には月輪の中に観音菩薩が細い線彫りによって表現され、さらに右下にも月輪の一部が彫られていることから、脇侍が彫られていた可能性がある。観音菩薩の右側には願主・願文、左側には紀年銘が彫られている。右(願主)「西海路肥後口飽田郡口阿弥陀寺奉造立」の17字、左(願文)「一結諸衆現世安穩後生善処為口」の14字である。左側の紀年銘は、「于時大」の3字である。最後の文字は年号の一部を示すものと考えられ、「大」が使われる中世の年号は、「大永」のみであることから、この板碑の製作年代も大永年間、西暦1521～1527年の間に作成されたといえ、熊本城内で確認されている板碑の年代とも整合している。また紀年銘と願主・願文とは字体が異なっていることから、追刻等を考慮する必要がある。

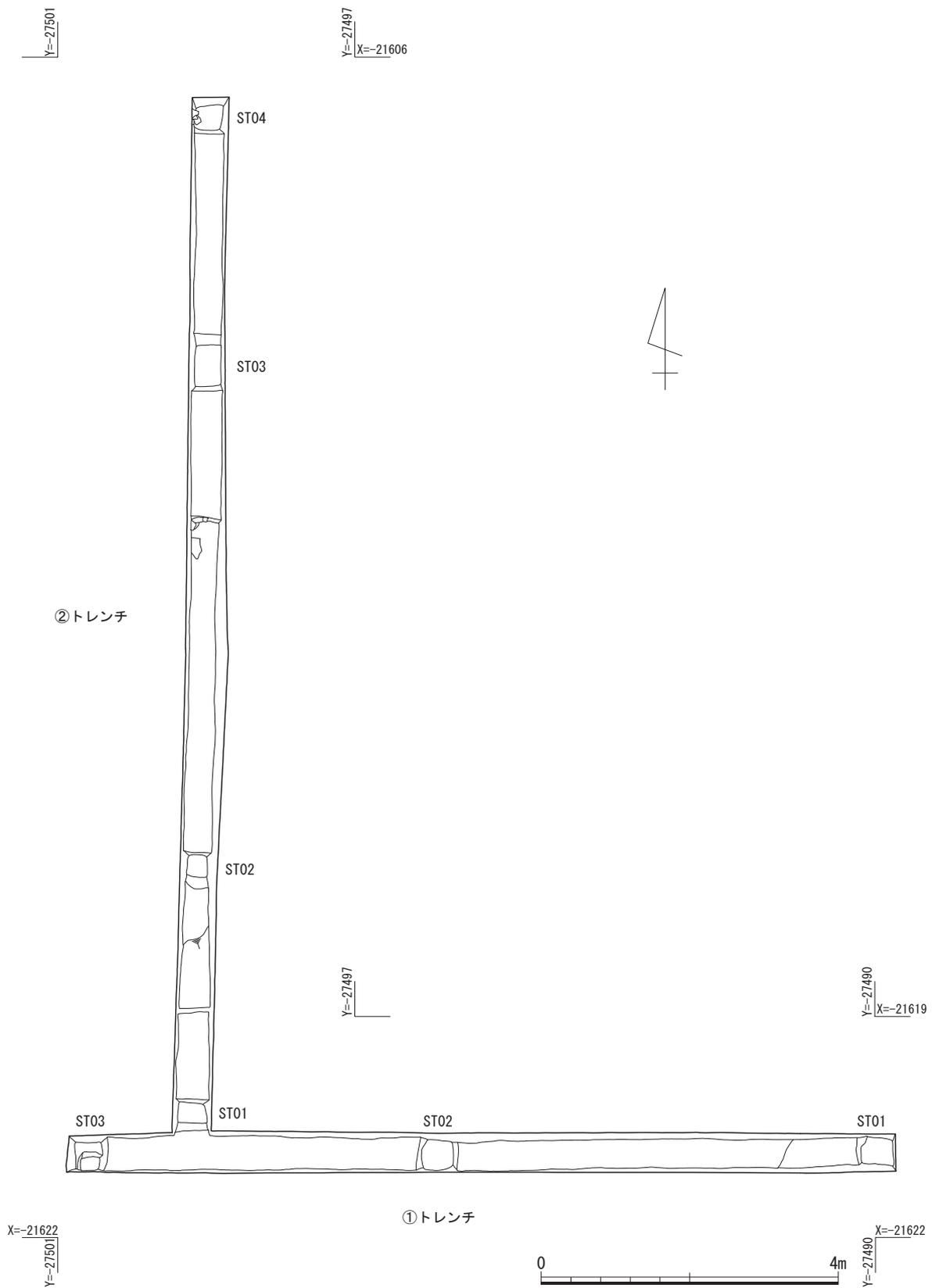
また、礎石1と礎石2も板碑であった礎石3と岩質や色調が類似していることから、下面に図像がある可能性がある。

⑦ 東竹の丸トレンチ06(第32～37図)

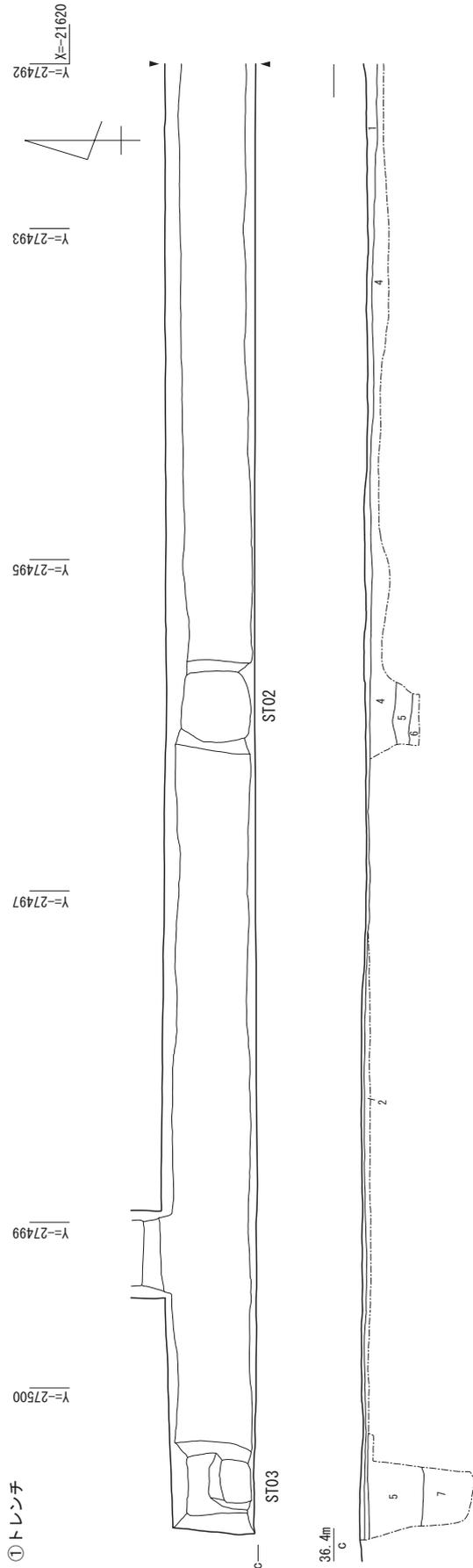
【土層】

東竹の丸西側に東西11.2m×0.5m(①トレンチ)、南北14.1m×0.5m(②トレンチ)のL字状に設定したトレンチである。「御城図」によれば、本トレンチは塀の一部の推定位置にあたる。

確認された層序は、上層から表土、近現代造成土、近世整地土である。②トレンチでは、南端を除き深



第32図 東竹の丸トレンチ06配置図



東竹の丸トレンチ06平・断面①

I層 (表土)

1 10YR2/1 黒色シルト質土 (しまり弱)

I層 (現代土)

2 5YR5/8 明赤褐色シルト質土 (しまりやや強、Aso-4ロームの二次堆積)

3 10YR3/3 暗褐色シルト質土 (しまりあり、焼土塊・炭化物多量、灰黄褐色土塊多量、プラスチック片含)

I・II層 (近現代造成土)

4 10YR4/4 褐色シルト質土 (しまりやや強、炭化物少量、φ~1cm礫中量、白色砂粒少量、瓦片少量)

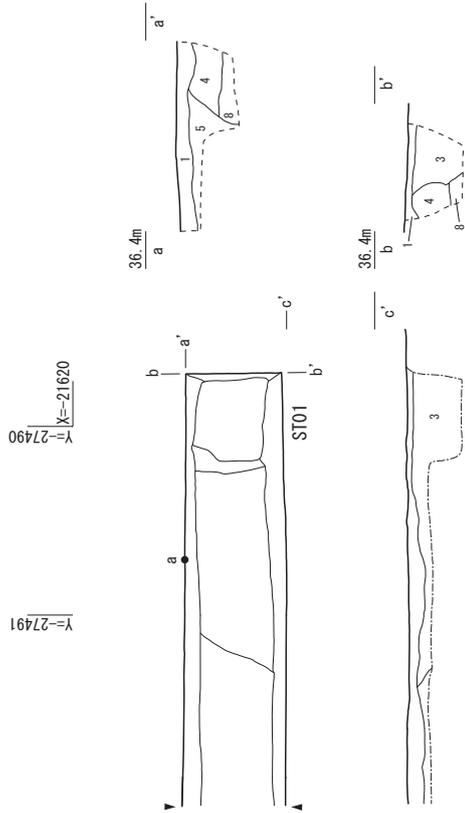
5 10YR3/1 黒褐色シルト質土 (しまりやや弱、φ~5cm礫多量、瓦片多量)

6 10YR3/3 暗褐色シルト質土 (しまり弱、φ~5cm礫多量、瓦片多量)

7 10YR3/3 暗褐色シルト質土 (しまり弱、φ~5cm礫多量、瓦片多量、6層に似るがしまりがかなり弱い)

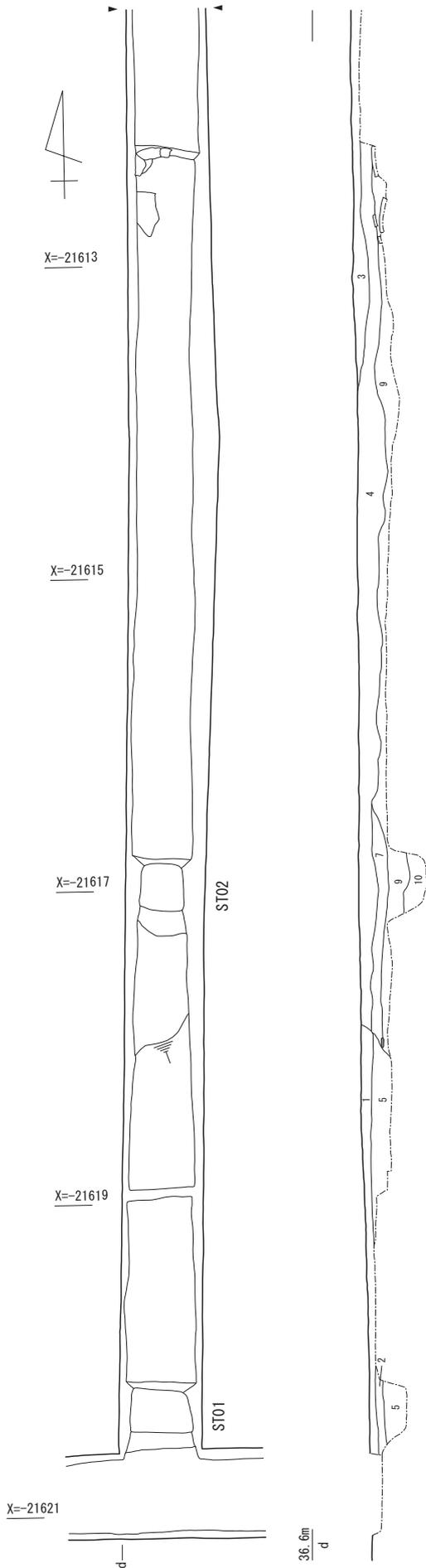
IV層 (近世以降整地土)

8 10YR3/4 暗褐色シルト質土 (しまりあり、焼土塊・炭化物微量、φ~2cm礫少量、瓦片少量)



第33図 東竹の丸トレンチ06平・断面図 1

②トレンチ



東竹の丸トレンチ06-②

I層 (表土)

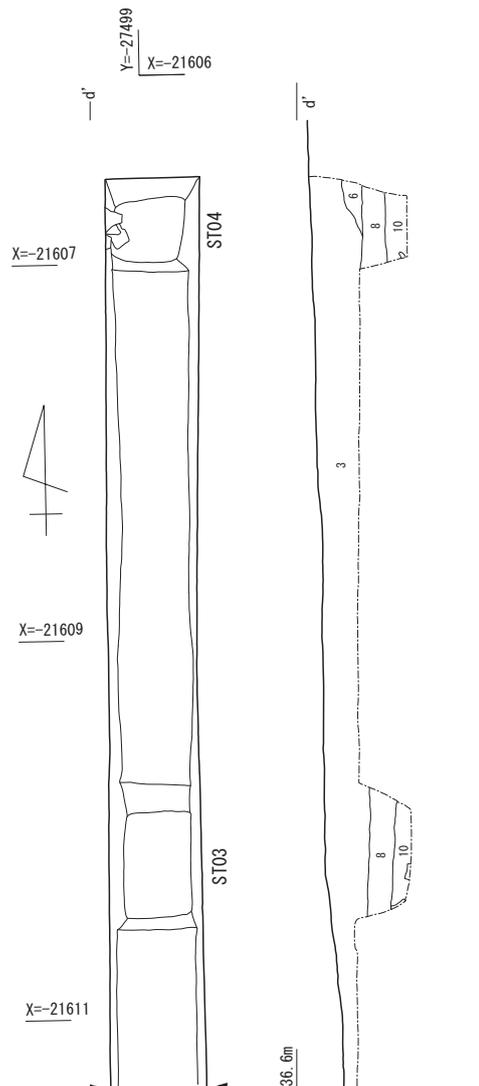
- 1 5YR5/8明赤褐色シルト質土 (しまりやや強、Aso-4ロームの二次堆積)
- 2 7.5YR3/4暗赤褐色粘質土 (しまりやや弱)
- 3 7.5YR3/3暗赤褐色砂質土
(しまりあり、腐土塊・炭化物多量、灰黄褐色土塊多量、黄褐色土塊少量)

I・II層 (近現代造成土)

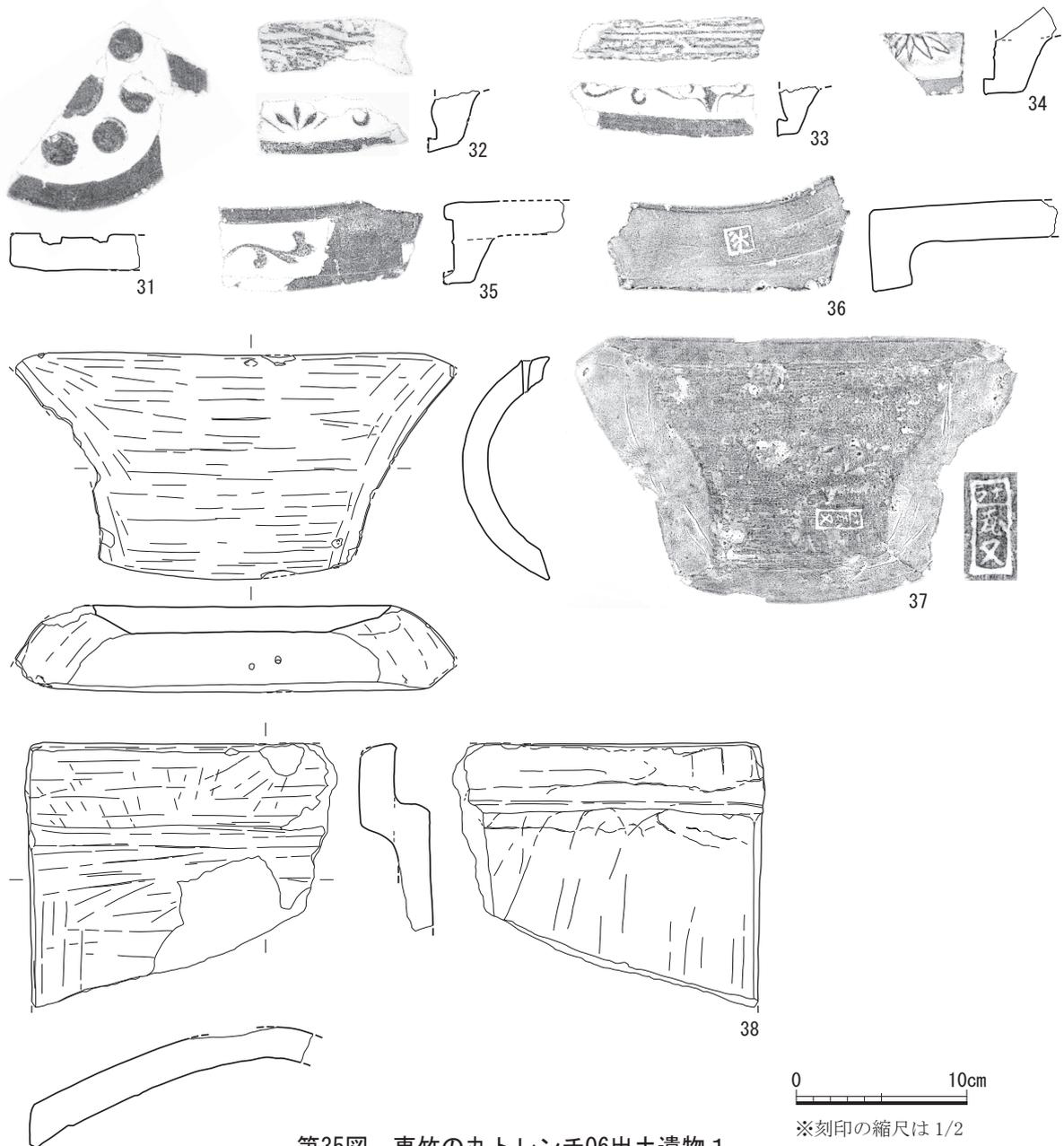
- 4 10YR3/4褐色シルト質土 (しまりあり、φ~1cm礫少量、黄褐色土塊少量)
- 5 7.5YR3/4暗赤褐色シルト質土 (しまりやや弱、瓦片・煉瓦片多量)
- 6 10YR4/1褐灰色シルト質土 (しまりあり)
- 7 7.5YR3/1黒褐色粘質土 (しまり弱、φ~1cm礫多量)
- 8 10YR3/3暗褐色シルト質土 (しまりあり、φ~2cm礫中量)

IV層 (近世以降造成土)

- 9 10YR3/4暗褐色シルト質土 (しまりあり、φ~3cm礫少量、瓦片多量)
- 10 7.5YR3/4暗赤褐色粘質土 (しまりあり、瓦片多量)



第34図 東竹の丸トレンチ06平・断面図2



第35図 東竹の丸トレンチ06出土遺物 1

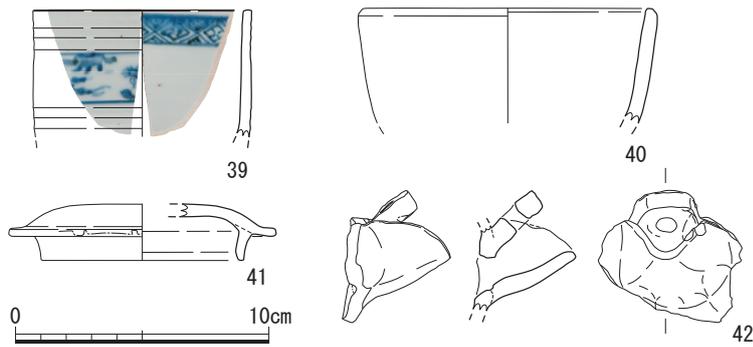
さ 12～40cm に近世整地土を確認した。②トレンチの南端と①トレンチの西半は、近代以降の客土が 70cm 以上の厚さで堆積しており、今回の調査では近世整地土は検出されなかった。①トレンチの東半は大部分が現代に攪乱されているが、部分的に近世整地土が残存していた。

【遺構】

①トレンチの第 2 層直下と②トレンチの第 1 層直下で硬化面が確認され、部分的にモルタル状の破片が面的に散っていた。この面は、層位と位置から昭和 37 年（1962）の大博覧会の際に設置された展示館（インスタント館）に関連する可能性がある。その面より下層は、近現代の造成土が 70cm 以上の厚さで堆積していた。東竹の丸南西にある虎口床面の高さと同トレンチの高さとは高低差があり、現在は間知石による石垣で段差が存在する。近現代に削平されていないならば、本来、段差は無く、緩やかな傾斜地であった可能性がある。この盛土造成が現代のいつの時期のものかは不明である。また、②トレンチでは、北に向かうほど標高が高くなり、近現代造成土も比例して厚くなることが確認できた。

【遺物】

第 35 図 31～38 はトレンチ 06 から出土した瓦類である。31・34・36 は①トレンチ表土（I 層）、32 は



第36図 東竹の丸トレンチ06出土遺物2

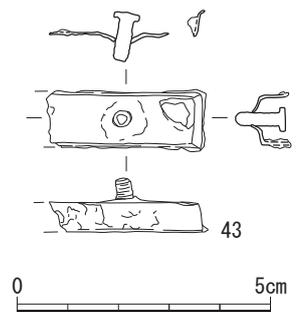
られている。瓦当周縁・側端・裏面周縁に横方向のナデ、瓦当裏面中央に縦方向のナデが施されている。瓦当面に箔ズレが認められる。

32～35は軒平瓦の瓦当片である。瓦当はいずれも顎貼り付け技法で成形されている。32は上三葉文軒平瓦で、瓦当は約4分の1程度、中心飾付近の顎部が残る。顎の接合部にやや斜方向のカキヤブリが認められる。瓦当文様は、中心飾の上三葉文と左右の唐草文端部と右側の釣針状の下向きの子葉が認められる。文様面に軽いナデと瓦当周縁・側端・裏面に横方向の丁寧なナデが施されている。33は中心飾不明の瓦当片である。瓦当の顎部3分の1程度が残存し、接合面には横方向のカキヤブリが認められる。瓦当文様は稜をもつ紡錘形の中心飾とその下端から唐草文が伸び、子葉が上・下・上に反転するものである。34は笹文軒平瓦で、瓦当左端の笹文付近の顎部が残り、ちょうど接合面で剥離している。右端部近くの笹文の5葉が確認できる。瓦当周縁・側端・裏面には横方向のナデが施されている。35は中心飾を欠く軒平瓦で、瓦当左側3分の1程度が残存し、平瓦部がやや残る。接合面には横方向のカキヤブリが認められる。中心飾は欠くものの、唐草文の形状から九曜紋軒平瓦と判断した。唐草の子葉は下・下・上に反転し、蔓の先端は膨らみを帯びる。全体的に顎部は丁寧な仕上げである。

36は掛瓦で、凸面前縁部に表面中心長5.7cm程度の顎状の突起が付く。突起表面には「菱形に永」の小型方形印が施されている。顎状突起の表面・側縁・裏面に横方向のナデ、平瓦凹面に丁寧なナデ、凸面に粗いナデを施す。37はほぼ完形の面戸瓦である。丸瓦を逆台形様に成形し、両側端部と下端部の凹面側を2.5～4.0cmと幅広に面取りする。上端側に芯々で1.7cm間隔の凸面から凹面に向けて穿孔した釘穴が2箇所認められる。また凹面には「ナラ 瓦又」の小型長方形の刻印も認められる。38は雁振瓦である。凸面に横方向の丁寧なナデを施しており、凹面に縦方向の粗いナデが施されている。

第36図39～42はトレンチ06から出土した陶磁器類である。39・41は①トレンチ表土（I層）、42は①トレンチ近現代層（II層）、40は②トレンチST04近現代層（II層）から出土した。

39は磁器染付筒形碗である。口縁部から体部にかけての破片で、口縁部までほぼ垂直に立ち上がり、端部を平たく仕上げる。文様は外面中位に2本の平行区画の中に草花文、内面の口縁近くに四方襷を施す。内面には呉須だれが生じている。外面の文様以外には段状に成形されている。40は陶胎染付碗である。口縁部から体部にかけての破片で、体部はやや外傾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。外面の口縁部下に1条の圏線が入る。内外面ともに貫入が認められる。肥前の陶胎染付と思われる。41は陶器土瓶蓋である。かえりから体部までの破片で、かえりは長く垂直に立ち、端部はやや丸い。体部は膨らみを帯び、受け部は水平に伸び、端部を丸く仕上げる。天井部のみに施釉する。42は陶器土瓶の注口部で、注口上部に型成形による把手取付部が付く。



第37図 東竹の丸トレンチ06出土遺物3

①トレンチ近現代層（II層）、33・35・37は②トレンチST04近現代層（II層）、38は②トレンチ近世以降地土（IV層）から出土した。

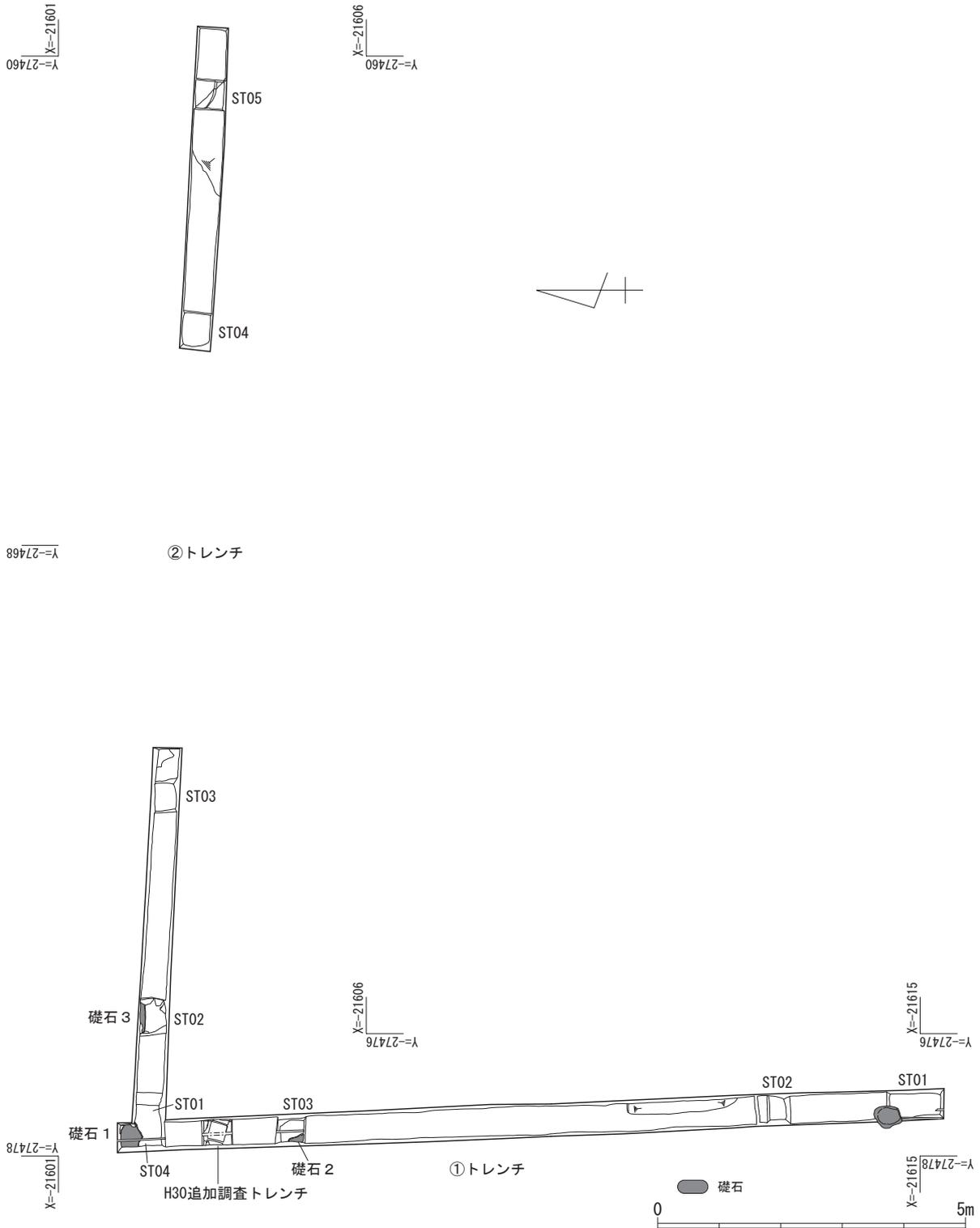
31は九曜紋軒丸瓦の瓦当片である。2破片を接合したもので、瓦当下半部約3分の1程度残存する。周曜径2.1cm、周縁幅1.8cmを測り、中心曜、周曜の一部に軽いナデが施されている。

第 37 図 43 はトレンチ 06 の②トレンチ ST04 近現代層 (Ⅱ層) から出土した銅製の装飾具と考えられる。長方形の箱状金具の底部中央にネジ穴を開け、そこに内側からネジがねじ込まれている。

⑧ 東竹の丸・トレンチ 07 (第 38 ~ 43 図)

【土層】

東竹の丸中央付近に南北 $13.4 \text{ m} \times 0.5 \text{ m}$ (①トレンチ)、東西 $6.2 \text{ m} \times 0.5 \text{ m} \cdot 5.3 \text{ m} \times 0.5 \text{ m}$ (②ト



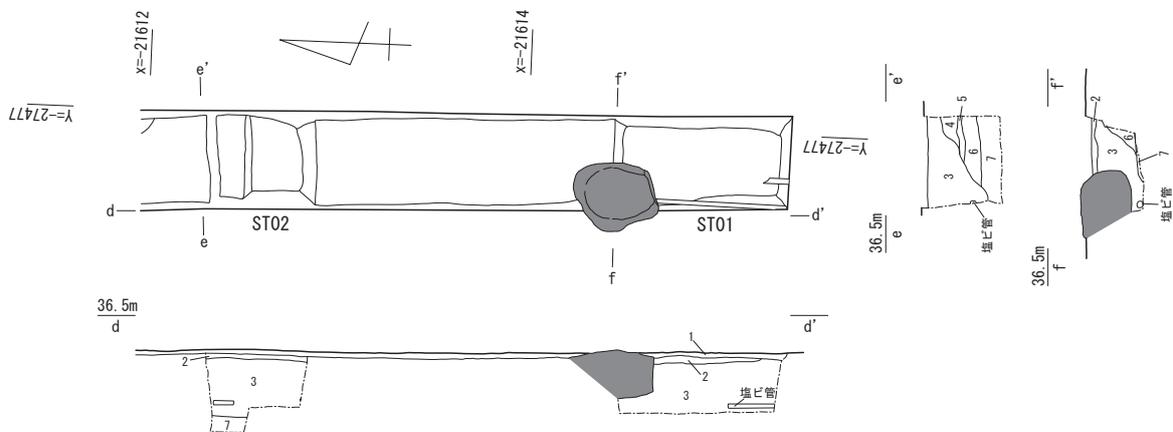
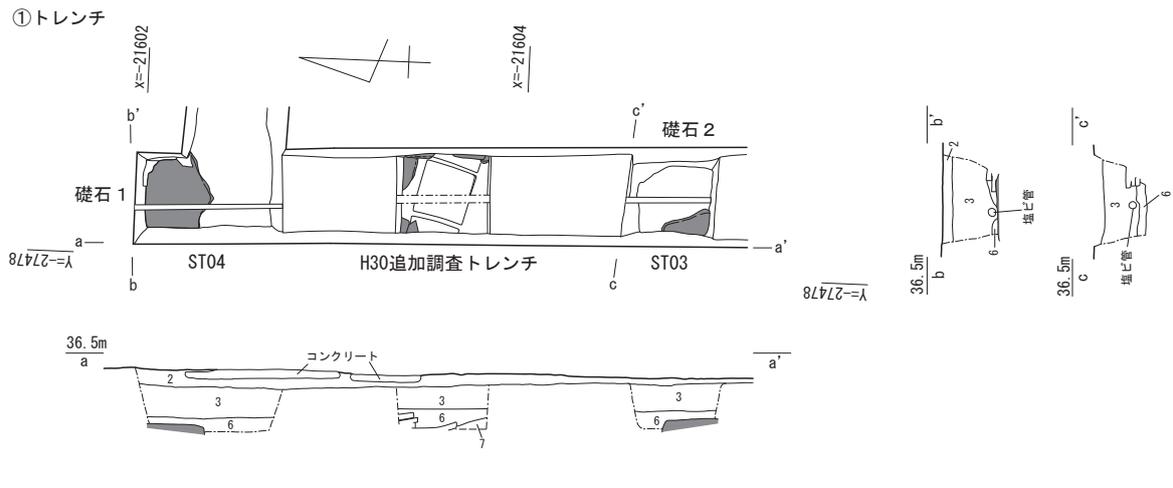
第38図 東竹の丸トレンチ07配置図

レンチ) のL字状に設定したトレンチである。「御城図」によれば、瓦葺きで白壁の建物の推定位置となる。

確認された層序は、上層から、表土、近現代造成土、近世整地土である。②トレンチの西側では、表土直下に瓦を多量に含む近世整地土が堆積していた。①トレンチの西半にトレンチに平行するように水道管と考えられる塩ビ管を埋設した攪乱土が認められた。

【遺構】

礎石状の大型石材を3石検出した。①トレンチでは、現代に敷設された塩ビ管の攪乱土直下で約2.7mの間隔で2石(礎石1・2)を確認した。②トレンチでは、①トレンチで確認された2石の軸に直交し、



東竹の丸トレンチ07-①

I層(表土)

- 1 10YR3/1黒褐色シルト質土(しまり強)
- 2 10YR3/3暗褐色シルト質土(φ~3mm礫多量)

I・II層(近現代造成土)

- 3 10YR3/3暗褐色シルト質土(しまりあり、炭化物少量、φ~1cm礫中量)
- 4 10YR3/3暗褐色シルト質土(しまりやや強、炭化物少量、φ~1cm礫中量)

IV層(近世以降整地土)

- 5 10YR4/4褐色シルト質土(しまりあり、焼土塊少量、白色砂粒少量)
- 6 10YR3.5/4褐~暗褐色シルト質土(しまりあり、焼土塊・炭化物少量、φ~1cm礫少量、瓦片微量)
- 7 10YR4/3.5暗褐~褐色シルト質土(しまりあり、焼土塊・炭化物少量、φ~1cm礫少量)



第39図 東竹の丸トレンチ07平・断面図1

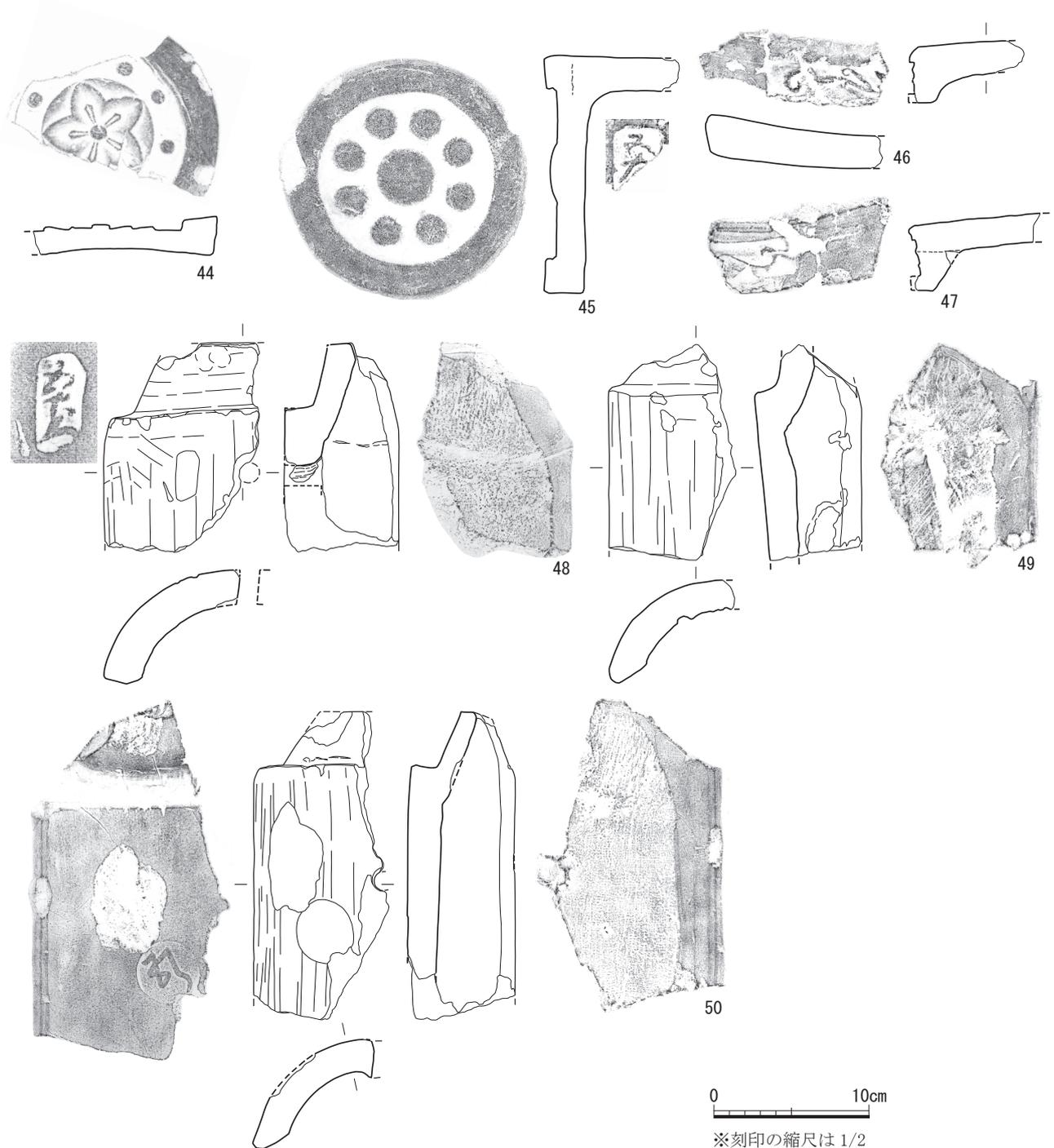
約 2 m 離れた位置に礎石（礎石 3）を検出した。今回の調査では、礎石を検出したのみで、掘方の確認までは行わなかった。

①トレンチの北端付近で地表面に露出するようにコンクリートが敷かれている状況が確認できた。また、南端付近で地表面に露出していた石材は、現代土に含まれることが確認できた。

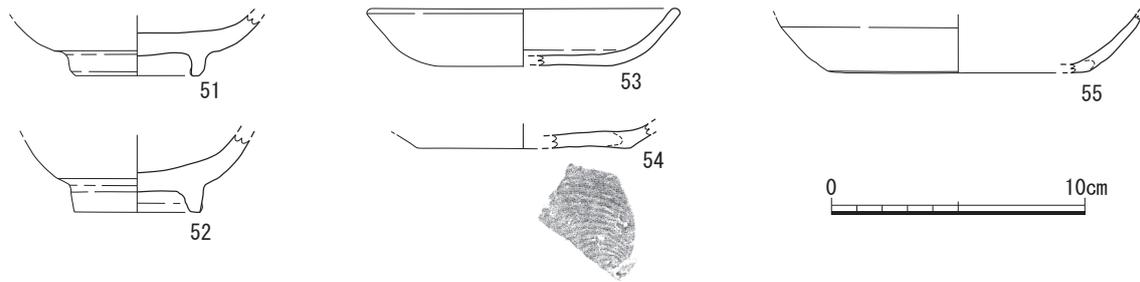
また、平成 30 年（2018）4 月の追加調査トレンチからは、近世の瓦積み排水設備を検出した。

【遺物】

第 41 図 44～50 はトレンチ 07 から出土した瓦類である。44 は②トレンチ ST04 瓦だまり（IV 層）・②トレンチ東側表土（I 層）、45 は②トレンチ西側西端瓦層（IV 層）、46 は①トレンチ中央部表土（I 層）、47 は①トレンチ北半部 I 層、48 は②トレンチ ST04 瓦だまり（IV 層）、49・50 は①トレンチ南端表土（I 層）から出土した。

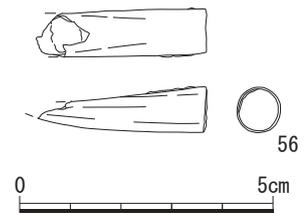


第41図 東竹の丸トレンチ07出土遺物 1



第42図 東竹の丸トレンチ07出土遺物2

44 は桔梗紋軒丸瓦の瓦当片で、2破片の接合資料である。中心飾から右側3分の1程度が残存し、丸瓦との接合部に横方向のカキヤブリが認められる。瓦当文様は桔梗紋の周囲に珠文が配されるもので、雌蕊と雄蕊、花卉4弁と珠文4個が残る。雌蕊と雄蕊の境が明瞭で、雄蕊は中心に沈線、先端は剣先状に尖る。花卉はやや丸みを帯び、各弁は雄蕊に向かって緩やかに窪む。雌蕊と珠文の頂部は丸みを帯びる。瓦当周縁・側縁は丁寧なナデ、瓦当裏面の側縁近くは横方向のナデ、瓦当裏面の中心付近に縦方向のナデを施している。45 は九曜紋軒丸瓦で、瓦当は周縁をやや欠くほかほぼ完形で、丸瓦部がやや残る。丸瓦は瓦当頂部にに取り付き、接合部にはカキヤブリが認められる。文様区径11.0cm、中心曜径3.9cm、周曜2.3cm、周縁幅2.1cmを測る。中心曜、周曜ともにナデを施しており、丸みを帯びる。瓦当周縁・側端・裏面周縁に横方向の丁寧なナデ、瓦当裏面中央に縦方向のナデが施される。丸瓦凸面に小型長方形の刻印が認められる。



第43図 東竹の丸トレンチ07出土遺物3

46 は軒平瓦の瓦当片で、瓦当左側2分の1程度が残存する。瓦当は顎貼り付け技法で成形されており、接合面に横方向のカキヤブリが認められる。瓦当文様は僅かに残る一葉から中心飾は上三葉文と考えられ、唐草文は、破損がひどく判然としないが、釣針状の下向きの子葉が確認できる。瓦当周縁・側端・裏面には丁寧な横方向のナデが施されている。47 は中心飾を欠く軒平瓦の瓦当片で、瓦当左側端部3分の1程度が残存する。瓦当は顎貼り付け技法で成形されており、接合面にカキヤブリが認められる。瓦当文様は、釣針状を呈する上向きの唐草文端部が認められる。瓦当周縁・側端・裏面には丁寧な横方向のナデが施されている。平瓦凹面はナデが施されているが、横方向のカキ目がやや残る。凸面体部は縦方向の粗いナデが施されている。

48～50 は丸瓦片である。凸面はいずれも玉縁部から後端部にかけて横方向の丁寧なナデを施し、体部は縦方向の工具ナデを施す。48の凸面に「五右衛門」の小型隅丸長方形印、50の凸面に「五郎」の大型丸印が認められる。凹面については玉縁部に布目痕と布の撚れ痕が認められるほか、50には布目痕が体部まで認められる。また体部には48に横方向の条痕、49のくびれ部から体部にかけて斜方向の条痕と紐状圧痕が認められ、49には鉄錆も付着する。いずれも側端部、玉縁端部に面取りが認められる。48・50の後端寄り中央には釘穴が認められる。

第42図51～55はトレンチ07から出土した陶磁器類である。51・53・54は②トレンチ東側表土（I層）、52は①トレンチ南端表土（I層）、55は②トレンチ東側ST05近世以降整地土（IV層）から出土した。

51は陶胎染付碗で、体部下位から高台までの破片で、3破片の接合資料となる。体部は内湾しながら立ち上がる。高台は断面逆台形を呈し、底部端よりやや内側に付き、内傾する。外底面及び高台内にそれぞれ1条の圈線が入る。高台端部内側に付着物がある。52は陶器碗の体部下位から高台部の破片で、体部は内湾しながら立ち上がる。高台は高く断面逆台形を呈し、端部は平たい。高台端部及び高台内は無釉となる。肥前の陶器IV期⁵の碗と考えられる。

53～55は土師器坏である。53は底部から体部下位にかけての破片で、7破片の接合資料である。外底面に糸切り痕跡が認められる。内外面ともに回転ナデが認められ、内底面中央には不整方向のナデを施す。54は底部片で、外底面に糸切り痕跡が認められる。内底面には回転ナデを施している。55は底部から体部下位にかけての破片で、体部内外面に回転ナデを施す。底部はヘラ切りと考えられる。

第43図56はトレンチ07①トレンチ南端表土（I層）から出土した銅製煙管である。煙吐口の金具部分で、煙吐口は欠損する。

⑨ 東竹の丸トレンチ08（第44図）

【土層】

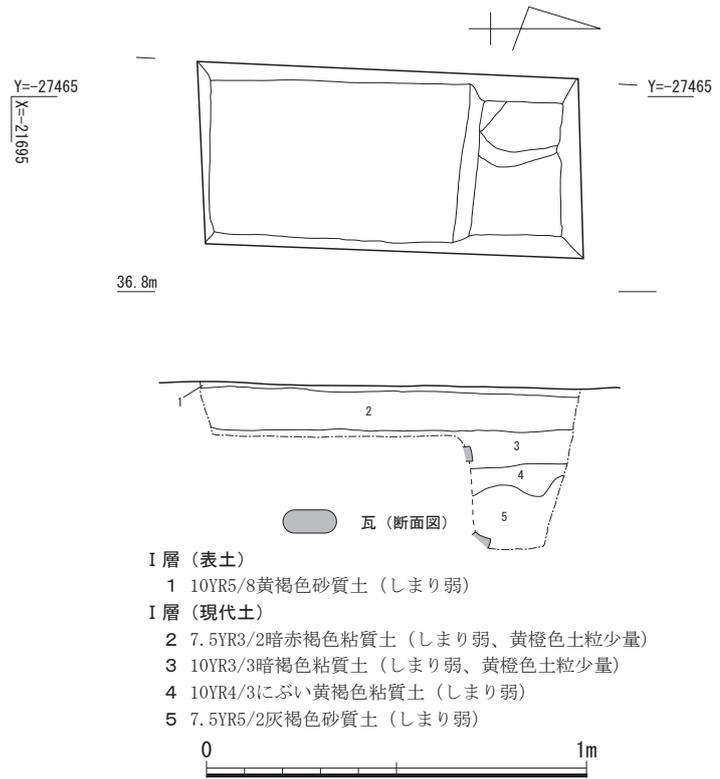
東竹の丸の中央よりやや北寄りに1.0m×0.5mの範囲で設定したトレンチである。トレンチ07とトレンチ09の中間地点にあたる。深さ42cm以上が現代に攪乱されていることを確認した。近くに貯水槽口が位置しているため、確認された攪乱土はその設置工事時によるものと考えられる。

⑩ 東竹の丸トレンチ09（第45・46図）

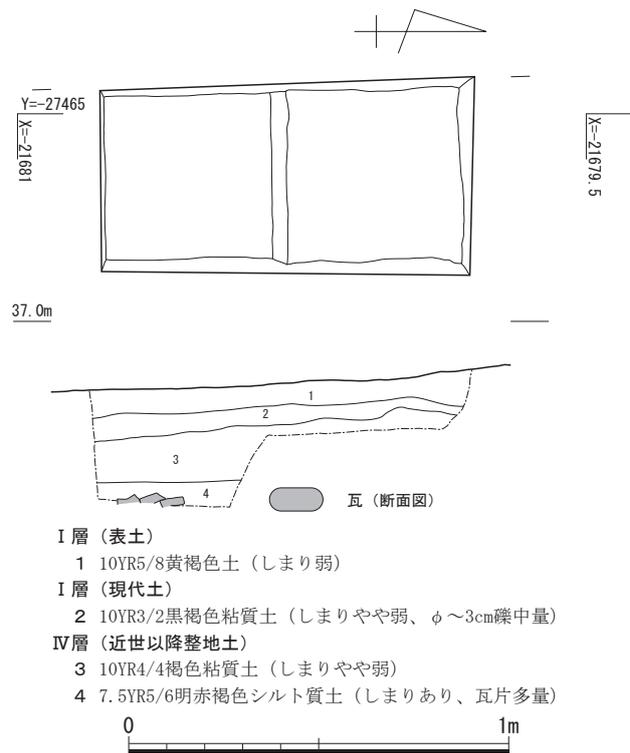
【土層】

東竹の丸北側、月見櫓南面の石垣直下付近に1.0m×0.5mで設定したトレンチである。昭和58年（1983）刊行の『重要文化財熊本城田子櫓他四棟修理工事報告書』中に瓦が廃棄された状況の写真があり、その位置については特定できていない。写真によると、石垣に近接している位置に廃棄土坑が掘られており、トレンチ周辺が該当する可能性があった。

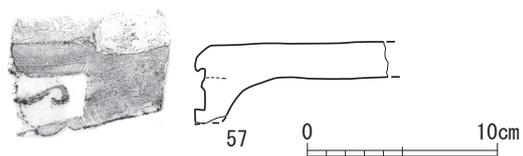
地表下10cm程度で近世と考えられる整地土を確認し、その下層から多量の瓦片を検出した。瓦の出土状況から、トレ



第44図 東竹の丸トレンチ08平・断面図



第45図 東竹の丸トレンチ09平・断面図



第46図 東竹の丸トレンチ09出土遺物

ンチ 07 で見られるように近世造成の際に一括して廃棄されたと考えられる。

【遺物】

第 46 図 57 は、トレンチ 09 瓦層 (IV 層) から出土した中心飾を欠く軒平瓦の瓦当片である。瓦当右側端部 4 分の 1 程度が残存する。瓦当は顎貼り付け技法で成形されている。瓦当文様は下を向くやや鉤状の端部が残る唐草文が認められる。瓦当周縁・側端・裏面に丁寧な横方向のナデ、瓦当上部に面取りが施されている。平瓦凹面は縦、斜方向のナデ、凸面端部近くは横方向のナデ、体部には縦方向の粗いナデが施されている。

⑪ 東竹の丸露出石材 (第 47・48 図)

東竹の丸の曲輪内に石材が露出している箇所が 4 地点 (地点 1～4) で確認できた。

地点 1 では源之進櫓の西側で、石列状に並ぶ礎石を 8 石 (露出石材 1) を確認した。この石列は位置関係から「御城図」に見られる建物の基礎と考えられる。源之進櫓他周辺の重要文化財櫓群と同じように、布基礎の石列であろう。

また、地点 2～4 における露出石材 2～4 は、トレンチ 06・07 の土層状況から、現代に廃棄された石材である可能性が高い。

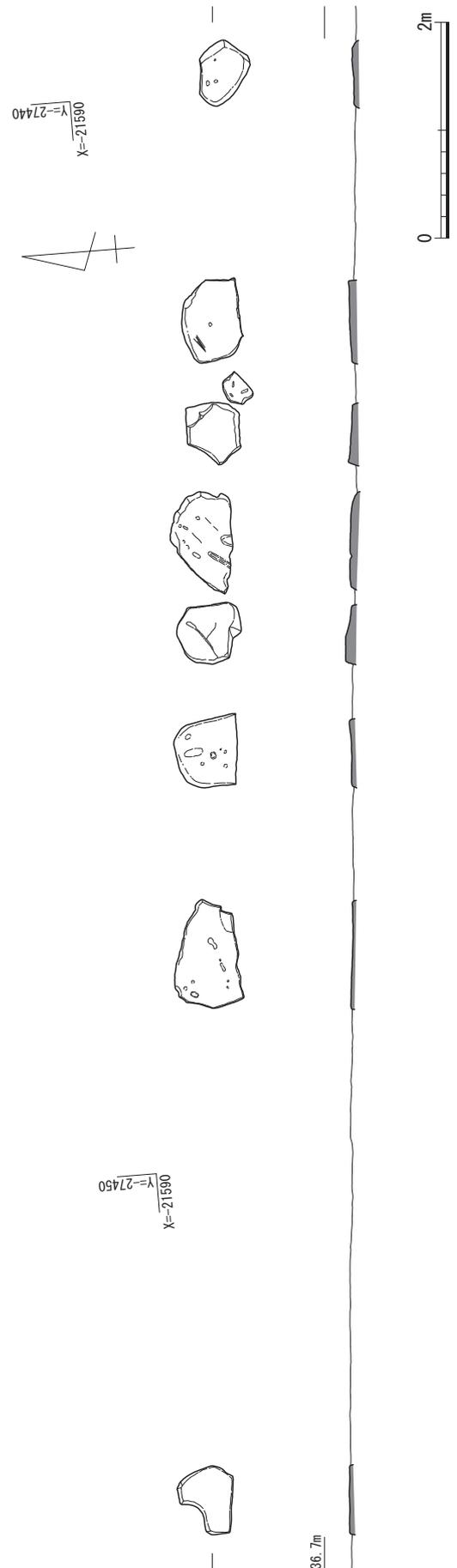
⑫ 飯田丸トレンチ 10 (第 49～52 図)

【土層】

「御城内御絵図」などに記載された「飯田屋敷御台所」の北西角に梁行 (南北) 方向に沿って 5.2 m × 0.5 m で設定したトレンチである。飯田丸造成に伴う土層や近世から近代初頭の包含層を確認した。包含層は 4 層に細分できる。生活面に対応する遺構を検出できていないが、生活面が複数面あると想定できる。

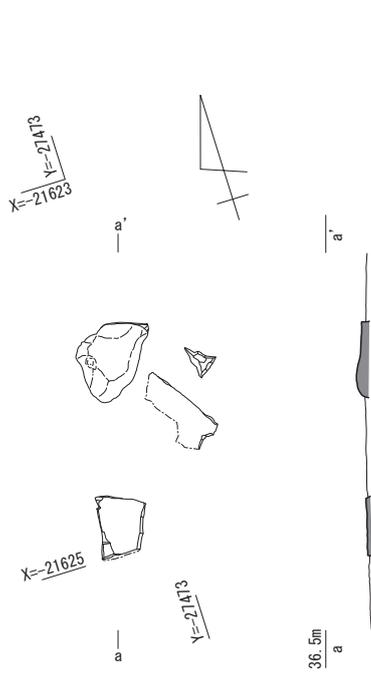
【遺構】

トレンチ北端および南側約 3 m では、現代の造作が認められる。北端は現地表面から下へ 70cm ほどの掘削がみられた。南側では、石を両脇に並べおき、その中に砂利を敷き詰めた園路を検出した。昭和 37 年 (1962) の大博覧会を中心とした時期に整備され、

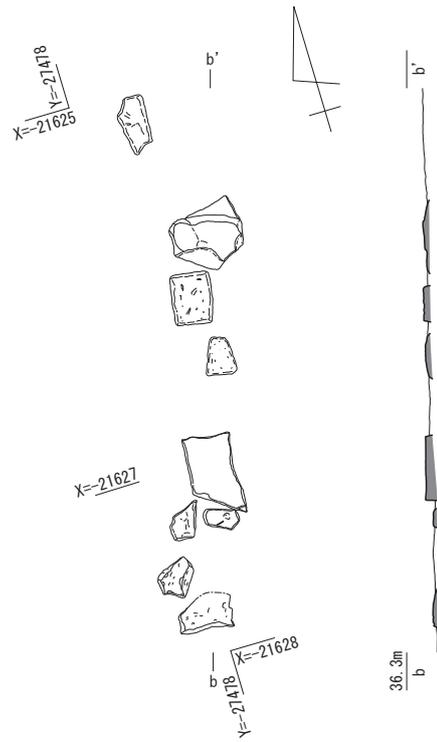


第47図 東竹の丸露出石材 1 平・断面図

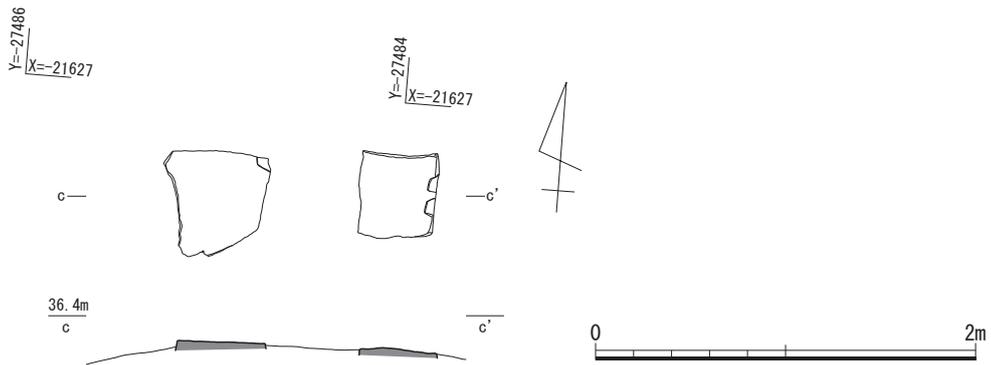
地点2
東竹の丸 露出石材2



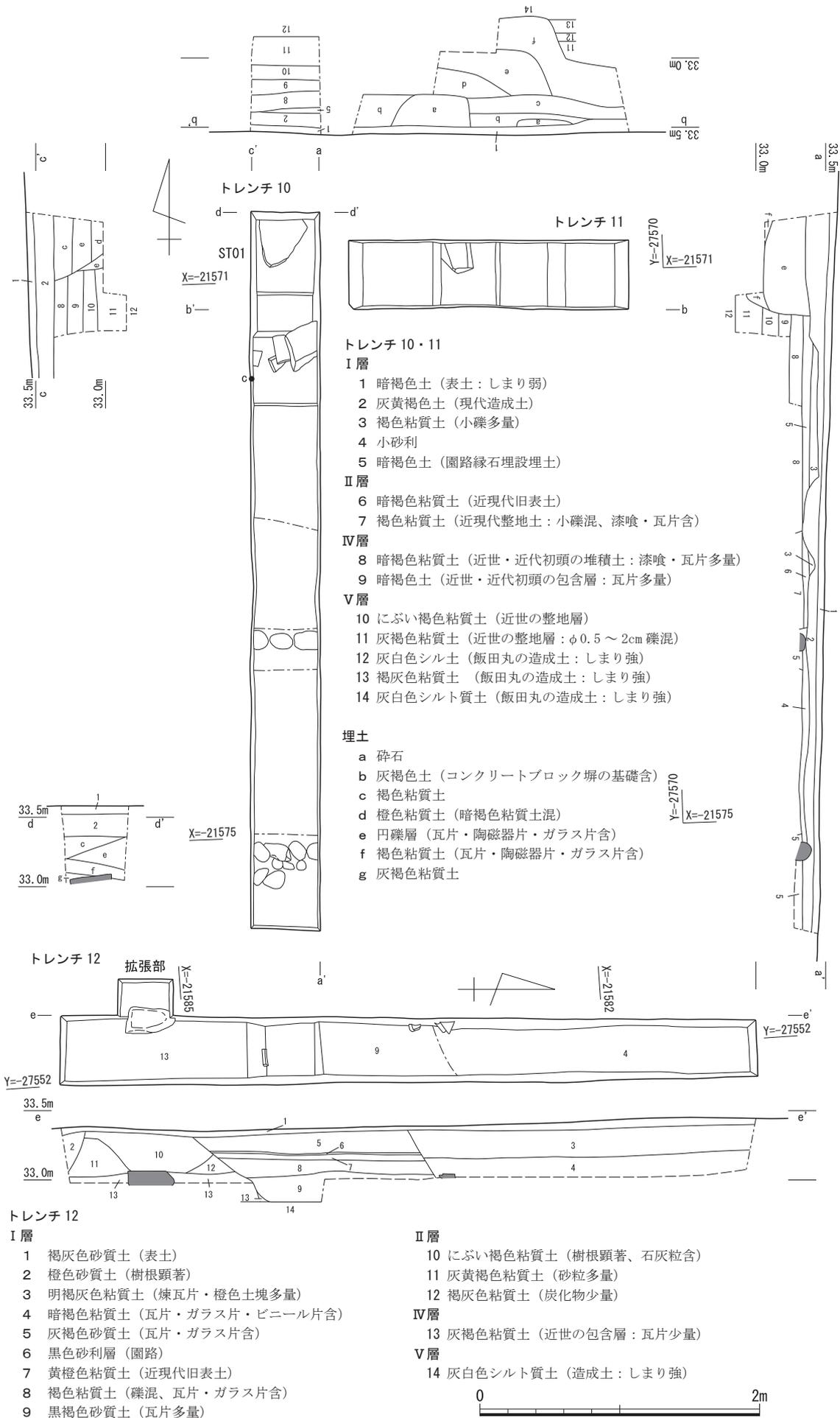
地点3
東竹の丸 露出石材3



地点4
東竹の丸 露出石材4



第48図 東竹の丸露出石材2～4平・断面図



第49図 飯田丸トレンチ10～12平・断面図

終了後、現状復旧に伴い解体や埋め戻しが行われたと捉えられる。トレンチ北側において、江戸時代末期もしくは明治時代初期に取り壊された建物に由来する瓦や漆喰などの壁材を多く含む土層を現地表下 20cm で確認した。この層よりも下層には江戸時代の生活面が 2 面以上確認できる。建造物が更新されるごとに整地を行った可能性が指摘できる。

【遺物】

第 50 図 58～60 はトレンチ 10 から出土した瓦類である。いずれも I 層中から出土した。

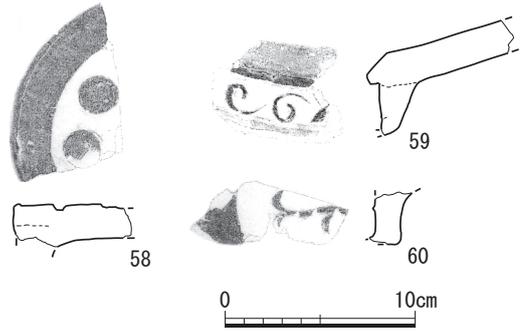
58 は九曜紋軒丸瓦の瓦当片である。2 破片を接合したもので、瓦当左上半部 4 分の 1 程度が残存し、丸瓦との接合部に横方向のカキヤブリが認められる。中心曜径は不明であるが、周曜径 2.1cm、周縁幅も 2.1cm を測る。周曜には軽いナデが施され、丸みを帯びる。瓦当周縁・側端・裏面周縁に横方向のナデ、瓦当裏面中央に縦方向のナデが施される。瓦当面にキラコが認められる。

59・60 は軒平瓦片である。59 は瓦当左半部 6 分の 1 程度が残存し、下三葉文軒平瓦と考えられる。瓦当は顎貼り付け技法で成形されており、カキヤブリが確認できる。唐草文は釣針状の下、上向きの子葉がつく。瓦当周縁・側端・裏面には丁寧な横方向のナデ、瓦当上端部に面取りが施されている。平瓦凹面は斜め方向のナデ、凸面端部に横方向のナデ、体部には縦方向の粗いナデが施されている。60 は瓦当顎部の破片で、中心飾を欠く。顎貼り付け技法で成形されている。唐草文は端部が上向き、下向きの子葉 2 片が認められる。瓦当周縁・側端・裏面には丁寧な横方向のナデが施されている。

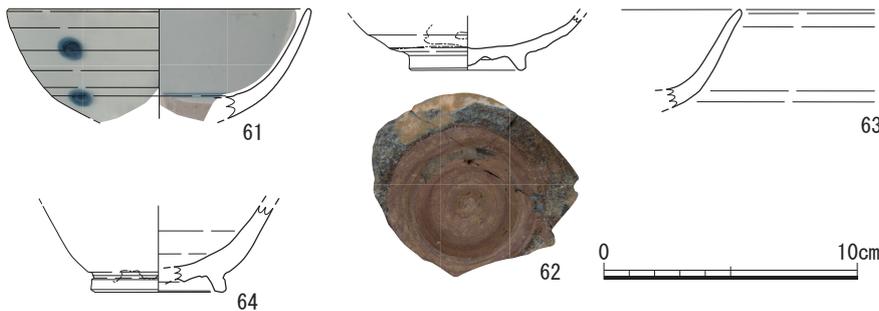
第 51 図 61～64 はトレンチ 10 から出土した陶磁器類である。61・64 は ST01 I 層、62・63 は I 層から出土した。

61 は磁器染付碗である。口縁部から体部にかけての破片で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。外面に珠文 2 個と 1 条の圈線、内底面に 2 条の圈線が描かれ、内底面に蛇の目釉剥ぎが認められる。波佐見の V-4 期⁶と思われる。62～64 は陶器碗である。62 は高台から体部にかけての破片である。高台は巴高台で、高台端部はナデによりやや丸みを帯びる。高台から体部にかけての外面は回転ヘラケズリで器面を整えており、釉は内面及び体部外面に施し、高台に釉垂れが認められる。63 は口縁部から体部にかけての破片である。口縁部がやや外反し、端部をやや尖り気味に仕上げる。釉は透明で、細かな貫入が認められる。64 は高台から体部にかけての破片で、高台は底部端よりやや内側に付き、断面長方形の形状を呈する。62 と同様、巴高台となる。

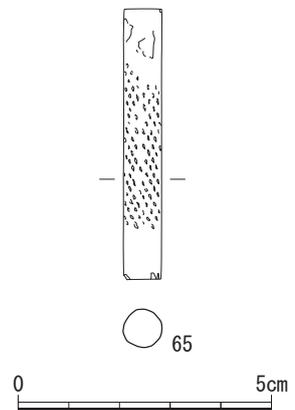
第 52 図 65 はトレンチ 10 I 層から出土した炭素棒である。長さ 5.4cm、径



第50図 飯田丸トレンチ10出土遺物 1



第51図 飯田丸トレンチ10出土遺物 2



第52図 飯田丸トレンチ10出土遺物 3

0.8 cmのもので、表面に細かな菱形状の模様が認められる。

⑬ 飯田丸・トレンチ 11 (第 49・53・54 図)

【土層】

「飯田屋敷御台所」北西角の桁行(東西)方向に沿って2.0 m×0.5 mで設定したトレンチである。トレンチ 10 に直交する。飯田丸造成時の盛土層や近世の包含層を確認した。トレンチ 11 の大部分には、現代の造作が認められ、その深さは飯田丸造成時の盛土層(現地表から 85cm)まで達している。

【遺構】

現代の掘方がトレンチの多くを占めており、上位層の様相は不明瞭であったが、現代の掘方の壁面において下位の土層堆積状況を確認した。灰白色シルトと褐灰色粘質土が互層になっていることが明らかになり、いずれの土層も固く締まっており、造成土と捉えられる。この土層は、「二様の石垣」の根石部分の確認調査⁷においても同様の土層が確認されている。いずれの調査区でも灰白色粘質土を用いた造成土内から下層では遺物が出土していない。この造成土は、飯田丸造成時の最上面と捉えられ、本丸御殿の拡幅とほぼ同時期に整備された遺構面と考えられる。

【遺物】

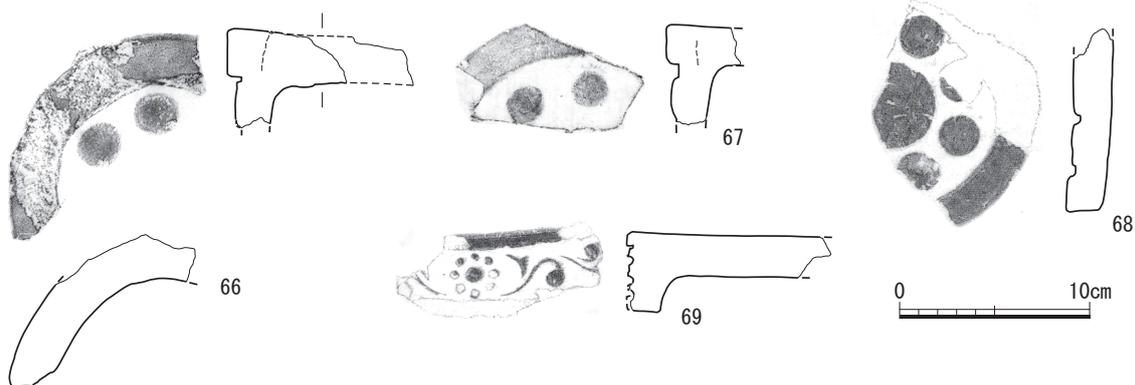
第 53 図 66～69 はトレンチ 11 から出土した瓦類である。66 はIV層、67～69 は I 層から出土した。

66～68 は九曜紋軒丸瓦である。66・67 は瓦当左上部 5 分の 1 程度、68 は瓦当下半部 3 分の 1 程度残存する。66・67 は丸瓦部がやや残り、66 は瓦当頂部のやや下方、67 は瓦当頂部に取り付くようである。瓦当文様については、いずれも文様区径、中心曜径が不明であるが、66 で周曜径 2.4cm、周縁幅 2.5cm、67 で復元文様区径 14.0 cm、周曜径 2.2cm、周縁幅 2.1cm、68 で復元文様区径 10.8 cm、中心曜径 4.6 cm、周曜径 2.1cm、周縁幅は 2.0cm を測る。66・68 の周曜はナデにより丸みを帯びる。いずれも瓦当周縁・側端・裏面周縁に横方向の丁寧なナデが施されている。66 の丸瓦凸面には縦方向のナデ、凹面には布目痕と横方向の条痕が 2 本認められる。67 に範ズレが認められる。

69 は九曜紋軒平瓦の瓦当片で、瓦当中央 3 分の 2 程度残存する。瓦当は顎貼り付け技法で成形される。瓦当文様は九曜紋の中心飾と左右の唐草文の付け根付近が残存する。九曜紋は比較的大きく、各曜は未調整のため凹凸状をなす。瓦当周縁・側端・裏面に横方向の丁寧なナデが施され、瓦当上端にやや面取りを施す。平瓦凹面には丁寧なナデ、凸面にも粗いナデを施す。2 次被熱のため色調は橙色を呈する。

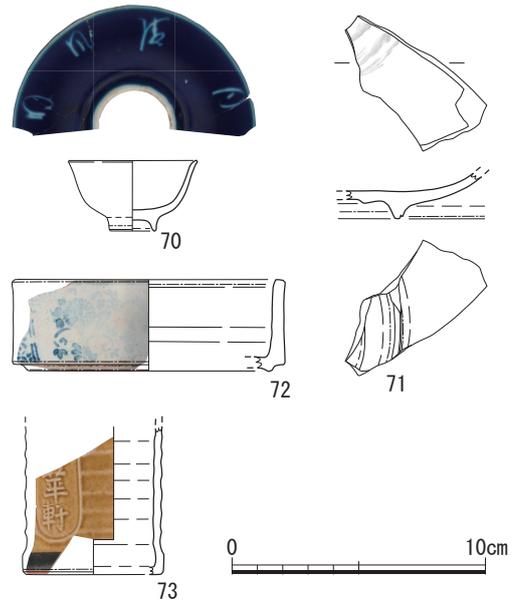
第 54 図 70～73 はトレンチ 11 から出土した陶磁器類である。いずれも昭和 37 年(1962)大博覧会に伴う掘り込みの I 層から出土した。

70 は磁器小坏で、ほぼ完形である。高台径は小さく、端部は尖り気味に仕上げる。体部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。体部外面に紺地に白抜きで四面に「清風明月」の文字が認められる。



第53図 飯田丸トレンチ11出土遺物 1

71は青磁皿で、高台から体部にかけての破片である。高台は断面逆台形で、端部はやや丸みを帯び、施釉されていない。高台内の中央に蛇の目状の窪みがある。内底面に文様が認められる。72は磁器染付（印判手）段重である。口縁部から高台にかけての破片で、高台は底部端より内側に付き、やや外端が丸みを帯びるほか、輪高台状となる。体部はやや外に反りながら直線的に伸び、口縁端部を平たく仕上げる。釉は体部内外面に施し、口縁端部・高台部をかきとる。外面に草花文を施しているが、薄れが掛っている。73は陶器の筒形碗である。底部端から体部にかけての破片で、3破片の接合資料となる。型成形で体部に横方向の凸線が6条、中央には隅丸長方形の区画の中に「[] 平軒」の文字が認められる。



第54図 飯田丸トレンチ11出土遺物 2

⑭ 飯田丸トレンチ 12 (第 49・55～57 図)

【土層】

「飯田屋敷御台所」の南東角に 5.0 m × 0.5 m で設定したトレンチである。近世の包含層や飯田丸造成時の盛土最上層を確認した。

【遺構】

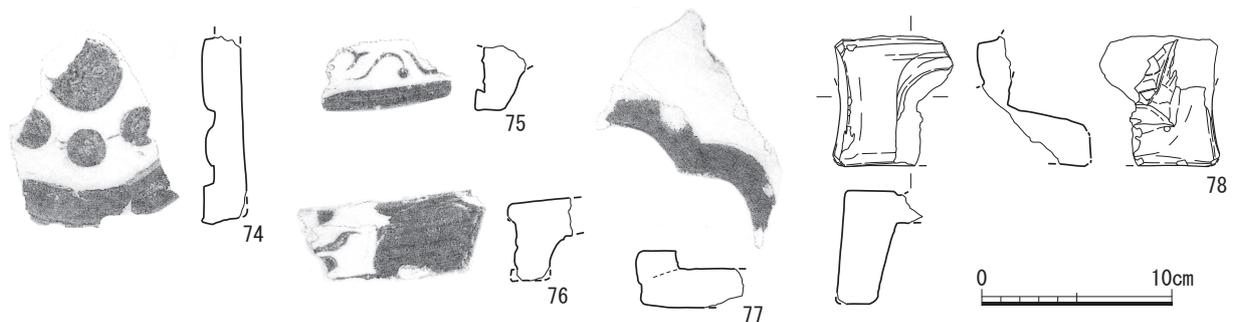
上位層は、近現代の造作により改変を受けているが、トレンチ南端付近は包含層などの土層が比較的良好な状態で残存している。近世の包含層と飯田丸造成時の造成土を検出した。

【遺物】

第 55 図 74～78 はトレンチ 12 から出土した瓦類である。74～76、78 は I 層、77 は拡張部 IV 層から出土した。

74 は九曜紋軒丸瓦で、瓦当左下半部約 4 分の 1 程度が残存する。瓦当文様については、中心曜径 3.8cm、周曜径 1.9cm、周縁幅 1.9cm を測る。中心曜、周曜にはナデを施しており、丸みを帯び、指頭圧痕も認められる。このほか周曜間の一部に「一」の浮彫が認められる。瓦当周縁・側端・裏面周縁に横方向のナデが施され、瓦当裏面中央に不整方向のナデが施されている。

75・76 は軒平瓦の瓦当片で、瓦当は顎貼り付け技法で成形されている。75 は九曜紋軒平瓦で、瓦当部 5 分の 1 程度残存する。瓦当文様は、九曜紋の周曜と思われる突起が 2 個、右側に子葉の先端が珠文状となる唐草文が認められる。瓦当周縁・側端・裏面には丁寧な横方向のナデが施されている。瓦当面、側端部



第55図 飯田丸トレンチ12出土遺物 1

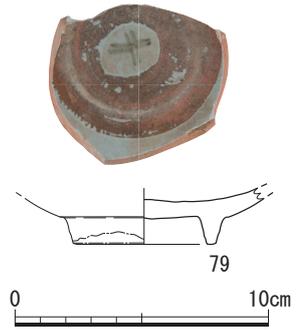
にキラコが認められる。76は中心飾を欠く軒平瓦で、瓦当右半部3分の1程度と、やや平瓦部が残存する。瓦当文様には、右端の唐草文のゆるやかに伸びる端部と下向きの子葉が僅かにみえる。瓦当周縁・側端・裏面には横方向の丁寧なナデが施され、上端隅に面取りの痕跡が僅かに認められる。胎土に砂粒が多く、瓦当面にキラコが認められる。

77は隅木鬼瓦である。左下半部の破片で、文様部分を欠いている。周縁は波状で、粘土を表面側に貼り付けて造り出しており、丁寧なナデを施す。裏面は粗いナデが施されている。78は用途不明の瓦片である。全長7.0cm、幅6.3cm、厚さ6.0cmを測るもので、下端部は緩やかに湾曲する。表面に丁寧なナデを施す。

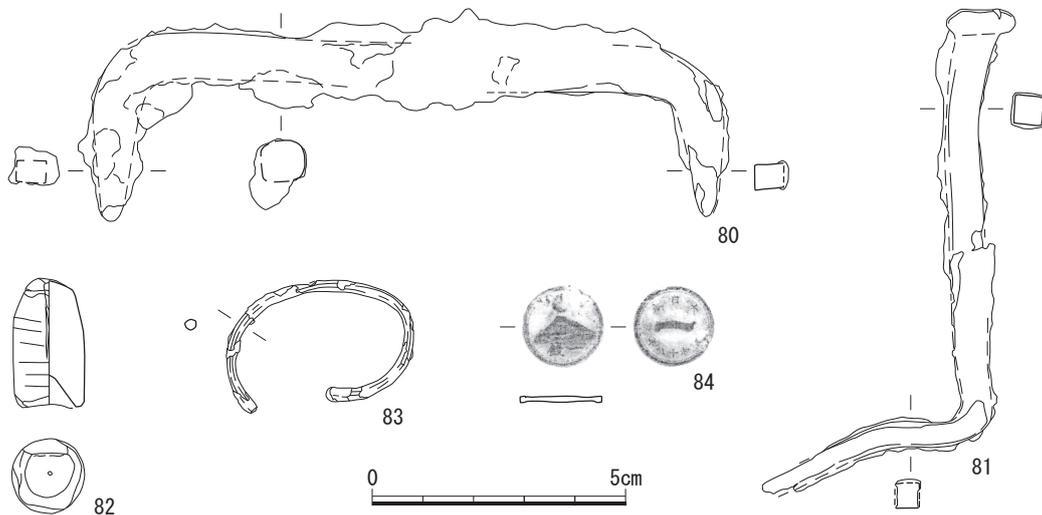
第56図79はトレンチ12 I層から出土した磁器染付皿である。高台から体部にかけての破片で、高台は断面逆三角形を呈する。内底面中央には「井」状の文様が認められる。釉は内底面全体には及んでおらず、蛇の目釉剥ぎと重ね焼きによる高台圧痕が認められる。高台端部内外面に釉の爛れも認められる。

第57図80～84はトレンチ12 I層から出土した金属製品である。

80は鉄製の丸鍔で、コの字状に折り曲げた先の部分は角錐状に先端を尖らせている。81は鉄釘である。平頭釘⁸類で、下位は屈曲している。82はエンフィールド銃の銃弾で、傷や歪みが認められる。弾底凹部壁に木栓表面の木質と思われる部分が残る。83は用途不明の銅製金具である。細長い針金状のもので、丸く巻いた形状となる。84は一銭アルミ貨で、表面には「菊・富士」の文様と「一銭」の文字、裏面に「大日本」「一」「昭和十八年」の文字が確認できる。



第56図 飯田丸トレンチ12出土遺物2



第57図 飯田丸トレンチ12出土遺物3

(4) 小結

① 飯田丸

【江戸期の遺構】

飯田丸に設定したトレンチ 01・トレンチ 03・トレンチ 05 では、「御城図」、「御城内御絵図」に描かれた建物を確認した。

トレンチ 01 では、「御道具蔵」（4 間×6 間の東西棟）と考えられる礎石と抜取を確認しており、すべての礎石は確認していないが、絵図との対比からおそらく南の桁行を確認しているものと考えられる。トレンチ 03 では、近代の造成土直下の近世の整地層内に玉石があり、その質や形状がトレンチ 01 で確認した礎石の根石と近似している。以上より本位置に礎石があった可能性があるだろう。またこの位置にあった蔵の表現は「御城図」と「御城内御絵図」では少し異なっており、「御城図」で描かれた少し北に張り出している建物の部分が確認した玉石部分に相当する可能性がある。トレンチ 05 では、「元塩蔵」の西側桁行の可能性のある礎石を確認しており、「元塩蔵」の礎石は、露出石材 7 石と合わせて 8 石となった。このほか、三階御櫓に接続する続塀の礎石 2 石も確認された。

また、飯田丸内では江戸期の整地層を各所で確認している。大きくはトレンチ 01 周辺での褐色系を主体とする整地層、トレンチ 02 より東側一帯に広がる互層になる整地層である。東側でみられる整地層は二様の石垣（新段階）の前面にもあり、幾度かの補修で薄い整地が互層となったのか、一帯のものであるか、今後のデータの蓄積によって明らかとなるだろう。

【近代】

貯水槽をトレンチ 03 からトレンチ 04 の西端で確認した。これは昭和 37 年（1962）に開催の大博覧会の期間中の写真にもみられることから、比較的新しい時期まで残存していたものと考えられる。また、西櫓門の東側にあった宿舍の土間と考えられる面的に広がる土と三階御櫓のすぐ北側の位置にあった熊本調達事務所と考えられるコンクリート基礎が露出しており、それらの位置についてもほぼ特定できたものと考ええる。

【飯田屋敷御台所の変遷】

「御城内御絵図」に記された「飯田屋敷御台所」にかかわる明確な遺構は検出できなかったが、「飯田屋敷御台所」とその周辺の来歴を窺い知る上で参考になる土層堆積状況を確認した。「飯田屋敷御台所」推定地に建てられた最も古い建物は、灰白色粘質土上面に建築された可能性がある。標高では 32.8 m である。また、最上位に堆積する包含層の上端は、標高 33.4 m である。最上位の包含層には大型の漆喰片や瓦片が豊富に含まれており、「飯田屋敷御台所」の廃絶に伴う土層と捉えられる。最古の遺構面と最上位の包含層の間には 0.4 m の高低差が存在する。その間の土層は 4 層に分けることができ、近世瓦の出土も確認できる。複数面の遺構面があったと推定できる。

【飯田丸の構築と遺構面の高さ】

造成時（V 層上面）の飯田丸には、西から東へ向けて緩やかに低くなる傾斜が設けられたことが判明した。飯田丸西側に設定したトレンチ 01 では標高 33.0 m、東端のトレンチ 12 では標高 32.8 m、東が低い構造である。現在、飯田丸の東端には北から南へ向けて排水設備が整備されている。飯田丸造成当初から、同様の経路で排水を行っていたとみられる。

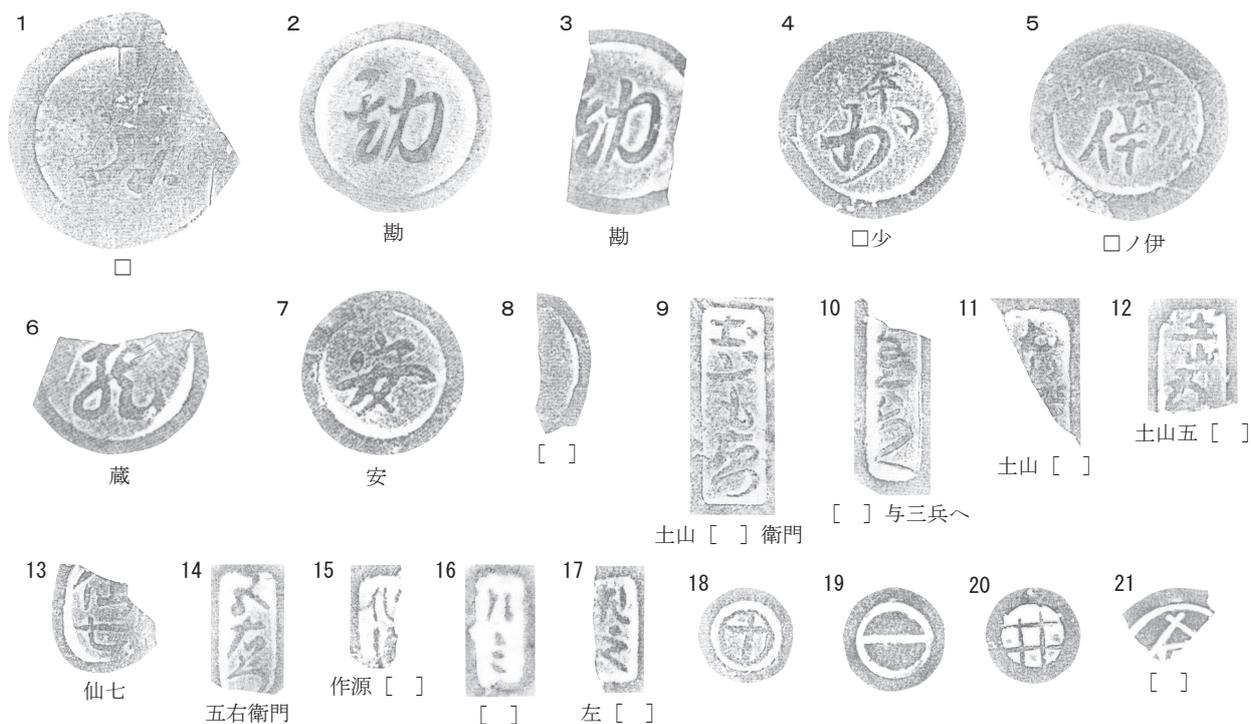
② 東竹の丸

東竹の丸域の広範囲で、地表面から深さ 4～40cm に近世整地土が残存していることが確認された。トレンチ 06 では、遺構は検出されなかった。近現代に南西部で盛土造成が行われたことが土層から判断でき、近世時の地表面の様子がうかがえる。トレンチ 07 とトレンチ 09 で検出した近世整地土の深さや、重要文

化財櫓群の布基礎の高さから、北東から南西に向かって低く傾斜していたことがわかる。トレンチ 07 では、現代の攪乱土が目立ったが、その直下層で礎石が残存しており、「御城図」に描かれている建物の位置特定の手がかりとなった。地表面から浅いところで 5 cm 程度の深さで、近世整地土が確認できたことから、東竹の丸の東半は近世以降大きく改変されていないと考えられる。トレンチ 09 でも、地表下 10cm と比較的浅いところで近世整地土と考えられる土層が確認されている。

註

- 1 熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書 2－本丸御殿の調査－』熊本城調査研究センター報告書第 2 集 2016 年
- 2 1 と同じ
- 3 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』 2000 年
- 4 1 と同じ
- 5 3 と同じ
- 6 3 と同じ
- 7 1 と同じ
- 8 熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書 1－飯田丸の調査－』熊本城調査研究センター報告書第 1 集 2014 年の P114 の分類に従った。



第58図 飯田丸・東竹の丸出土瓦刻印

第12表 飯田丸・東竹の丸刻印瓦一覧

No.	種別	刻印位置	刻印形状	出土年度	出土箇所	出土層位	備考
1	丸瓦	凸面	大型円形	H 29	飯田丸トレンチ 03	I 層	□
2	平瓦	凹面	大型円形	H 30	飯田丸トレンチ 11	I 層	勘
3	平瓦	凹面	大型円形	H 29	東竹の丸トレンチ 06-② ST04	近現代層 (II層)	勘
4	平瓦	凹面	大型円形	H 29	飯田丸トレンチ 04-②北半	表土 (I層)	□少
5	丸瓦	凸面	大型円形	H 29	東竹の丸トレンチ 07-②西端	IV層	□ノ伊
6	丸瓦	凸面	大型円形	H 29	東竹の丸トレンチ 01-② ST04	近現代層 (II層)	藏
7	平瓦	凹面	大型円形	H 29	飯田丸トレンチ 04-② ST01	I 層	安
8	丸瓦	凸面	大型円形	H 29	東竹の丸トレンチ 06-①	近現代層 (II層)	[]
9	平瓦	凹面	長方形	H 29	東竹の丸トレンチ 09	IV層	土山 [] 衛門
10	平瓦	凹面	長方形	H 29	東竹の丸トレンチ 07-②東側	表土 (I層)	[] 与三兵へ
11	平瓦	凹面	長方形	H 29	飯田丸トレンチ 04-② ST03	I 層	土山 []
12	丸瓦	凸面	長方形	H 30	飯田丸トレンチ 12	I 層	土山五 []
13	平瓦	凹面	小型楕円形	H 29	飯田丸トレンチ 04-② ST03	I 層	仙七
14	平瓦	凹面	小型長方形	H 30	飯田丸トレンチ 11	I 層	五右衛門
15	平瓦	凹面	小型長方形	H 29	東竹の丸トレンチ 07-②東側	表土 (I層)	作源 []
16	丸瓦	凸面	小型長方形	H 30	飯田丸トレンチ 10 ST01	I 層	[]
17	平瓦	凹面	小型長方形	H 30	飯田丸トレンチ 12	I 層	左 []
18	平瓦	凹面		H 29	東竹の丸トレンチ 07-②東側	表土 (I層)	
19	丸瓦	凸面		H 29	東竹の丸トレンチ 06-①	表土 (I層)	
20	丸瓦	凸面		H 29	東竹の丸トレンチ 06-①	表土 (I層)	
21	棧瓦	凸面	大型円形	H 29	飯田丸トレンチ 01-②西半	表土 (I層)	[]

第13表 飯田丸・東竹の丸出土遺物観察表1

第13～17表の出土位置の「I」は「飯田丸」、「H」は「東竹の丸」の略。また、法量の単位はcm、()は復元・残存値を示す

挿図No.	遺物No.	出土位置	出土層位	法量						残存率	調整		胎土	色調		備考			
				瓦当直径	文様区径	中央厚さ	内区		外区		外面	内面		焼成	外面		内面		
							直径	雌蕊径	雄蕊径									幅	珠文数
25	20	I04-② ST03	I層	(16.8)	(12.8)	-	(8.0)	-	1.7~ 2.4	1.1	1.9	0.5~ 0.8	2.0	ヨコナデ、ナデ	密	やぶ 不良	灰 (N4)	灰 (N4)	範ズレ
41	44	H07-② ST04・ 東側	瓦だまり (IV層)・ 表土 (I層)	(15.4)	(9.3)	1.6	7.2	1.2	4.0	1.8	1.0	0.7	2.5	ヨコナデ	密	良	灰 (7.5Y6/1)	灰白 (7.5Y7/1)	

軒丸瓦 (九曜紋)

挿図No.	遺物No.	出土位置	出土層位	法量						残存率	調整		胎土	色調		備考			
				瓦当直径	文様区径	中央厚さ	九曜紋		周縁部		外面	内面		焼成	外面		内面		
							中心曜径	周曜径	中心曜と周曜の間隔									曜と外縁の間隔	幅
16	1	I01-① ST01	近世以降 造成土 (IV層)	(15.0)	(11.0)	-	1.7	0.7	0.7	2.0	0.8	-	瓦当部 約1/3残存	ヨコナデ、ナデ	粗	良	灰 (N4)	灰 (5Y5/1) 灰 (N4)	範ズレ
16	2	I01-① 南半	表土 (I層)	(18.0)	(11.6)	2.1	2.0	1.0	0.8	2.0	0.3	2.1	瓦当部 約1/3残存	ナデ	密	良	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	範ズレ 瓦当面キラコ附着
25	21	I04-② 北半	表土 (I層)	(16.0)	-	2.2	4.3	2.1	0.6	2.4	0.8	-	瓦当部約 1/3、丸瓦部 一部残存	工具ナデ、ヨコ ナデ、ナデ	密	良	灰 (N4) 灰 (5Y6/1)	灰 (N4)	
25	22	I04-① ST02	I層	(15.8)	(10.6)	2.2	4.0	2.1	0.4	2.2	0.6	-	瓦当部 約1/3残存	工具痕、ハケ状 によるナデ、 指頭圧痕、 ヨコナデ、 工具ナデ	密	良	灰 (5Y5/1) 暗灰 (N3/)	灰 (N4)	範ズレ
35	31	H06-①	表土 (I層)	(15.6)	(12.0)	2.1	(4.0)	2.1	0.8	1.8	0.7	1.9	瓦当部 約1/3残存	ヨコナデ、ナデ、 指頭圧痕	密	良	灰 (5Y5/1) 灰 (N4)	灰 (5Y5/1)	範ズレ
41	45	H07-② 西側西端	瓦層 (IV層)	15.4	11.0	2.3	3.9	2.3	0.7	2.1	0.8	2.6	瓦当部 一部 残存	工具ナデ、 ヨコナデ、ナデ	密	良	灰 (7.5Y6/1) 灰白 (N7/)	灰 (7.5Y6/1) 灰白 (7.5Y7/1)	漆喰・紙分附着 凸面に刻印
50	58	I10	I層	(15.0)	(11.0)	-	-	2.1	0.7	2.1	0.3	-	瓦当部 約1/4残存	ナデ、ヨコナデ	粗	良	灰 (5Y4/1)	黄灰 (2.5Y5/1)	瓦当面キラコ附着
53	66	I11	IV層	(16.2)	-	-	-	2.4	-	2.5	0.8	-	瓦当部 約1/5残存	工具ナデ、 ヨコナデ、ナデ、 指頭圧痕	密	良	灰 (N4)	灰 (N4)	
53	67	I11	I層	(16.0)	(14.0)	-	-	2.2	-	2.1	0.7	-	瓦当部 約1/5残存	ヨコナデ、ナデ	密	良	灰 (N4) 灰 (5Y6/1)	灰黄 (2.5Y6/2)	範ズレ
53	68	I11	I層	(14.6)	(10.8)	2.1	(4.6)	2.1	0.4	2.0	0.5	1.8	瓦当部 約1/3残存	ヨコナデ、ナデ	粗	良	灰 (N4)	黄灰 (2.5Y6/1)	瓦当面いぶし
55	74	I12	I層	(16.0)	(11.6)	2.1	3.8	1.9	0.8	1.9	0.5	2.3	瓦当部 約1/4残存	ヨコナデ、ナデ、 指頭圧痕	粗	良	黄灰 (2.5Y5/1)	黄灰 (2.5Y5/1)	

第14表 飯田丸・東竹の丸出土遺物観察表2

軒平瓦

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	文様種	法量										調整	胎土	焼成	色調		備考					
					中心飾	左右飾	上幅	下幅	弧深	上外縁幅	下外縁幅	文様区高	文様区幅	左脇区幅				右脇区幅	面取り幅		頸部下厚	頸部高	残存率	外面	内面
16	3	I01-① 北半	表土 (I層)	九曜紋	唐草文	-	-	-	1.0	0.9	2.1	-	-	-	2.0	1.9	2.2	瓦当部 約1/2残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	灰(7.5Y5/1) 灰(7.5Y4/1)	灰(7.5Y5/1) 灰(7.5Y4/1)	良	密	
25	23	I04-① ST01	I層	九曜紋	唐草文	-	-	-	0.8	0.7	3.0	-	-	2.4	1.8	2.4	瓦当部約1/7、 平瓦部一部残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	灰(5Y5/1)	オリーブ黒 (5Y3/1)	良	密		
25	24	I04-② 北半	表土 (I層)	九曜紋	唐草文	(27.4)	(25.8)	(3.4)	0.8	-	2.9	(16.8)	5.3	0.4	2.2	-	2.8	瓦当部 約1/2残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	灰(5Y5/1) 灰(5Y7/2) 灰(7.5Y5/1)	灰(N4/) 暗灰(N3/) 灰(N4/) 黄灰(2.5Y5/1)	良	密	内面漆喰 付着
25	25	I04-② 北半	表土 (I層)	九曜紋	唐草文	-	-	-	1.2	0.7	(2.8)	(16.0)	-	2.1	2.0	2.6	瓦当部 約1/3残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ	灰(N4/) 灰(5Y7/2) 灰(7.5Y5/1)	灰(N4/)	良	密		
35	32	H06-①	近現代層 (II層)	上三葉文	唐草文	-	-	-	-	0.8	-	-	-	2.0	2.0	3.6	瓦当部 約1/4残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ	灰(5Y6/1) 灰(N5/)	灰(N5/)	良	密		
35	33	H06-② ST04	近現代層 (II層)	-	唐草文	-	-	-	-	1.0	-	-	(2.5)	1.2	(2.8)	瓦当部下 約1/3残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ	灰白(5Y7/1)	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	良	密		
35	34	H06-①	表土 (I層)	笹文	-	-	-	-	-	0.9	-	-	-	2.9	2.3	3.1	瓦当部破片	工具ナデ	工具ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1) 灰(N5/)	良	密	頸部漆喰 付着	
35	35	H06-② ST04	近現代層 (II層)	-	唐草文	-	-	-	0.8	(0.7)	2.9	-	(5.5)	2.5	1.8	2.7	瓦当部 約1/3残存	工具ナデ、 ヨコナデ	工具ナデ、 ヨコナデ	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	良	密		
41	46	H07-① 中央	表土 (I層)	上三葉文	唐草文	-	-	-	1.0	-	2.1	-	-	2.3	-	1.3	瓦当部約1/2、 平瓦部一部残存	工具ナデ、 ヨコナデ	工具ナデ、 ヨコナデ	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	良	密		
41	47	H07-① 北半	I層	-	唐草文	-	-	-	0.8	0.9	(2.3)	-	4.8	2.8	1.4	2.5	瓦当部約1/3、 平瓦部一部残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	灰(N6/) 灰(N5/)	灰(N6/)	良	密		
46	57	H09	瓦層 (IV層)	-	唐草文	-	-	-	0.8	0.8	2.0	-	4.1	2.4	(1.3)	(1.8)	瓦当部約1/4、 平瓦部一部残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	灰白(2.5Y7/1) 灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/1) 灰黄(2.5Y7/2)	やや 不良	密		
50	59	I10	I層	下三葉文	唐草文	-	-	-	0.5	-	-	-	-	1.9	-	(2.8)	瓦当部約1/6、 平瓦部一部残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、 ナデ	黄灰(2.5Y7/3) 灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y7/2)	やや 不良	粗		
50	60	I10	I層	-	唐草文	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.8	瓦当部破片	ヨコナデ、 ナデ	ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	灰(5Y4/1)	良	粗		
53	69	I11	I層	九曜紋	唐草文	-	-	-	0.6	-	2.6	-	-	2.2	-	1.7	瓦当部約2/3、 平瓦部一部残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	良	粗	2次被熱	
55	75	I12	I層	九曜紋	唐草文	-	-	-	-	1.0	2.3	-	-	-	1.6	-	瓦当部 約1/5残存	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ	灰(N5/)	灰(N4/)	良	粗	瓦当部側 端部キラコ 付着	
55	76	I12	I層	-	唐草文	-	-	-	-	-	2.5	-	0.3	2.6	-	(2.4)	瓦当部 約1/3残存	工具ナデ	工具ナデ、 ヨコナデ	灰(N4/)	灰(N4/)	良	粗	瓦当凹面 キラコ付着	

丸瓦

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	法量			調整	胎土	焼成	色調		備考
				全長	体部幅	厚さ				凸面	凹面	
21	19	I03	I層	(17.9)	(14.5)	2.0	凸面	凹面	良	灰(10Y6/1) 灰(10Y5/1)	灰(7.5Y6/1)	凸面に「元緑口小山[]」の刻印
41	H07-② ST04	瓦だまり (IV層)	瓦だまり (IV層)	(18.1)	(9.7)	2.4	凸面	凹面	良	黄灰(2.5Y5/1) 灰黄(2.5Y6/2)	黄灰(2.5Y5/1) 暗灰黄(2.5Y5/2)	釘穴 凸面に「五右衛門」の刻印

第15表 飯田丸・東竹の丸出土遺物観察表3

丸瓦

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	法量		残存率		調整		胎土	焼成	色調		備考
				全長	体部幅	厚さ	凸面	凹面	胎土			細・密	凸面	
41	49	H07-①南端	表土 (I層)	(14.1)	-	2.2	破片	工具ナデ、ナデ	斜方向の条痕、紐状圧痕、布目痕	密	良	灰白 (7.5Y7/1) 灰 (N5/)	灰白 (7.5Y7/1) 灰 (N5/)	鉄錆付着
41	50	H07-①南端	表土 (I層)	(23.5)	-	2.1	破片	工具ナデ、ヨココナデ、ナデ	布目痕 (縫い目痕あり)	密	良	灰 (N5/)	灰 (N6/)	釘穴 凸面に「五郎」の刻印

軒棧瓦・軒目板棧瓦

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種類	法量		厚さ	調整		胎土	焼成	色調		備考
					全長	幅		外面	内面			外面	内面	
16	4	I01-①南半	表土 (I層)	軒棧瓦	5.7	12.6	5.8	ヨココナデ、ナデ	ヨココナデ	密	良	暗灰 (N3/)	灰 (N4/)	全面キラコ付着 瓦当面に「㊦」の浮彫
16	5	I01-①南半 (H30年調査)	近世整地土 (IV層)	軒目板棧瓦	27.1	(17.6)	6.3	工具ナデ、ナデ、ヨココナデ	工具ナデ、ナデ、ヨココナデ	粗	良	灰 (N4/)	灰 (N5/)	釘穴 平瓦部凹面に「茂」の刻印

道具瓦

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種類	法量		厚さ	調整		胎土	焼成	色調		備考
					全長	幅		外面	内面			外面	内面	
35	36	H06-①	表土 (I層)	掛瓦	(10.5)	12.6	2.3	ヨココナデ、ナデ	ヨココナデ、ナデ	密	良	灰 (7.5Y4/1)	灰 (7.5Y4/1)	頸部上厚2.9cm、頸部下厚2.3cm、頸部高2.7cm 瓦当面に「菱形に永」の刻印
35	37	H06-②ST04	近現代層 (II層)	面戸瓦	13.3	(25.7)	1.5	工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	密	良	灰 (N6/)	灰 (N6/)	釘穴2箇所 凹面に「ナラ 瓦又」の刻印
35	38	H06-②	近代以降整地土 (IV層)	雁振瓦	(15.7)	18.7	2.1	工具ナデ、ヨココナデ、ナデ	ヨココナデ、ナデ	密	良	灰華 (2.5Y6/2) 黄灰 (2.5Y5/1)	灰黄 (2.5Y6/2) 黄灰 (2.5Y5/1)	角棧伏間 粘土折り曲げ?
55	77	I12 拡張部	IV層	隅木鬼瓦	(13.2)	(9.5)	2.1	ナデ	ケズリ、ナデ	粗	良	灰 (N5/)	灰 (5Y4/1)	
55	78	I12	I層	道具瓦	(7.0)	(6.3)	(6.0)	工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	密	良	灰 (N4/)	灰白 (5Y7/1)	

陶磁器・土器

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種類	器種	法量		残存率	成形・調整		胎土	焼成	年代	産地	備考
						口径	底部径		器高	外面					
17	6	I01-①ST01	近世以降造成土 (IV層)	磁器	小碗	(7.5)	-	(4.3)	口縁~体部約1/4残存	施文、施釉	施釉	良			吹き絵 (エアースプレー)
17	7	I01-①ST04	近代以降 (II層)	青磁	鉢	-	-	(6.4)	口縁~体部破片	施文、施釉	施釉	良		龍安窯系	貫入
17	8	I01-②東半	表土 (I層)	磁器	不明	-	-	(2.2)	穿孔部破片	施釉	-	良			穿孔、外面化粧コバルトの小班 (飛沫) 型成形
17	9	I01-②東半	表土 (I層)	磁器	碁子	2.7	2.6	4.1	完形	施文、施釉	施釉	良			正面「㊦1957」
17	10	I01-①ST05	表土 (I層)	磁器染付	皿	12.3	-	3.5	全体の約2/3残存	施釉	施文、施釉	良		網田?	内底面蛇の目軸剥ぎ 高台・内底軸繻れ

第16表 飯田丸・東竹の丸出土遺物観察表4

陶磁器・土器

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種類	器種	法量			残存率	成形・調整		胎土	焼成	年代	産地	備考
						口径	底部径	器高		外面	内面					
17	11	I01-①ST04	近代以降 (II層)	陶器	瓶	-	-	(9.1)	体部~高台破片	施釉	回転ナデ	精	良	肥前	高台端部・高台内砂付着	
17	12	I01-①ST01	近世以降造成土 (IV層)	陶器	鉢	-	(17.0)	(4.7)	体~底部破片	カキメ	回転ナデ	微細~1mmの砂粒を含む	良		外底部付着物	
17	13	I01-①北半	表土 (I層)	陶器	土瓶	-	-	(3.9)	体~底部破片	回転ナデ、ヘラケズリ、回転ナデ、指頭圧痕	回転ナデ	微細~1mmの石英、白色粒、微細~2mmの黒色粒を含む	良		脚貼りつけ	
17	14	I01-①ST05	表土 (I層)	陶器	壺	-	-	(6.15)	体~底部破片	回転ナデ、指頭圧痕、回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、指頭圧痕	微細~1mmの白色粒、黒色粒を含む	良			
17	15	I01-①北半	表土 (I層)	陶器	甕	11.8	-	(11.8)	口縁部と胴上部約1/8残存	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	1mm以下の砂粒、黒色粒を含む	良		口縁部刻印・ヘラ書き 細拭き取り	
26	26	I04-①ST02	I層	磁器染付	端反碗	-	-	(3.6)	口縁~体部約1/8残存	施文、施釉	施文、施釉	精	良			
26	27	I04-①ST03	I層	陶器	甕	-	-	(3.0)	口縁~頸部破片	施釉	施釉	微細な砂粒を含む	良			
26	28	I04-①ST01	I層	陶器	甕	-	-	(5.0)	体~底部破片	工具ナデ、工具痕、施釉	施釉	微細~1mmの砂粒を少量含む	良		内底面・外底面砂付着	
26	29	I04-①ST02	I層	瓦質土器	火鉢	-	-	(7.2)	口縁部破片	ヨコナデ、工具痕、スタンプ (印花)	ヨコナデ、工具ナデ	微細な雲母を多量に含む。微細~1mmの褐色粒、角閃石を含む	良			
36	39	H06-①	表土 (I層)	磁器染付	筒形碗	(8.6)	-	(5.1)	口縁~体部約1/7残存	施文、施釉	施文、施釉	精	良	肥前		
36	40	H06-②ST04	近現代層 (II層)	陶胎染付	碗	(11.8)	-	(4.6)	口縁~体部約1/6残存	施文、施釉	施釉	微細な黒色粒を含む	良	肥前	貫入	
36	41	H06-①	表土 (I層)	陶器	土瓶 (蓋)	(8.0)	-	2.3	全体の約1/7残存	回転ナデ、施釉	回転ナデ	微細~1mmの白色粒を含む	良			
36	42	H06-①	近現代層 (II層)	陶器	土瓶	-	-	(5.3)	注口および把手取付部残存	施釉	施釉	微細~1mmの白色粒を含む	良		把手取付部は型成形	
42	51	H07-②東側	表土 (I層)	陶胎染付	碗	-	-	(2.4)	体部~底部約1/3残存	施文、施釉	施釉	精	良	肥前	貫入 高台付着物	
42	52	H07-①南端	表土 (I層)	陶器	碗	-	-	(3.1)	体部~高台約1/4残存	施釉	施釉	砂粒含む	良	肥前	高台付着物	
42	53	H07-②東側	表土 (I層)	土師器	坏	(12.2)	(6.9)	2.3	体~底部約1/6残存	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	角閃石、黒色粒、赤褐色粒を含む	良			
42	54	H07-②東側	表土 (I層)	土師器	坏	-	(8.5)	(1.0)	底部約1/5残存	回転ナデ、糸切り 離した後ナデ	回転ナデ、ナデ	石英、白色粒、黒色粒、赤褐色粒を含む	良			
42	55	H07-②ST05	近世以降造成土 (IV層)	土師器	坏	-	(10.3)	(2.3)	体~底部約1/7残存	回転ナデ、ヘラ切 り離した後ナデ	回転ナデ	角閃石、白色粒、赤褐色粒を含む	良			
51	61	I10 ST01	I層	磁器染付	碗	(11.8)	-	(4.4)	口縁~底部約1/6残存	施文、施釉	施文、施釉	精	良	V-4 期	波佐見	内底面蛇の目釉剥ぎ
51	62	I10	I層	陶器	碗	-	-	(2.1)	体部~高台破片	回転ナデ、ヘラケズリ 施釉	施釉	微細な白色粒をわずかに含む	良	小代カ	巴高台	
51	63	I10	I層	陶器	碗	-	-	(3.9)	口縁~体部破片	施釉	施釉	精	良		貫入	
51	64	I10 ST01	I層	陶器	碗	-	-	(3.5)	体部~高台約1/5残存	回転ナデ、ヘラケズリ 施釉	施釉	精	良	小代カ	巴高台	

第17表 飯田丸・東竹の丸出土遺物観察表5

陶磁器・土器

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種類	器種	法量		残存率	成形・調整		胎土	焼成	年代	産地	備考
						口径	底部径		器高	外面					
54	70	I11	I層	磁器	小坏	5.1	-	2.8	口縁一部欠損	施文、施軸	精	良			外器面口縁下四面に文字
54	71	I11	I層	青磁	皿	-	-	(1.8)	体部～高台破片	施軸	精	良			内底面文様
54	72	I11	I層	磁器染付 (印判手)	段重	(10.6)	-	(3.7)	口縁～高台 約1/6残存	施文、施軸	微細な砂粒を含む	良			型成形「[]平軒」の文字
54	73	I11	I層	陶器	筒形碗	-	5.4	5.9	体部約1/7残存	施文、施軸	微細な黒色粒を含む	良			内底面蛇の目軸剥ぎ
56	79	I12	I層	磁器染付	皿	-	-	(2.3)	体～高台 約3/4残存	施軸	精	良			網田？ 高台細爛れ

金属製品

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種別	名称	重量 (g)	法量			備考
18	16	I01-①ST04	近代以降 (II層)	金属製品	葉莢	(4.1)	全長 (1.3)	底径 1.7		スナイドル銃の葉莢
18	17	I01-①ST05	表土 (I層)	金属製品	葉莢	(10.8)	全長 (5.4)			スナイドル銃の葉莢。錆化著しい
18	18	I01-①ST04	近代以降 (II層)	金属製品	銅製卸	(2.3)	全長 1.2	幅 1.1	厚さ (0.7)	シャックボタン (脚付きボタン) ?
37	43	H06-②ST04	近現代層 (II層)	金属製品	銅製装飾具	(1.9)	高さ 1.1	長さ 1.2	幅 (3.1)	
43	56	H07-①南端	表土 (I層)	金属製品	銅製煙管	(1.9)	残存長 (3.4)	最大径 0.9		煙吐口 付着物
57	80	I12	I層	金属製品	丸錠	75.4	全長 12.5	幅 3.8	胴奥行 (1.0)	釘長さ左不明 右 2.3
57	81	I12	I層	金属製品	鉄釘	22.7	頭幅 (1.4)	頭幅 0.7	奥行 0.7	ねじれ 付着物 錆化著しい
57	82	I12	I層	金属製品	銃弾	36.1	全長 2.6	底径 1.5		エンフィールド銃の銃弾
57	83	I12	I層	金属製品	不明 (銅製品)	2.1	幅 2.7	長さ 3.7	厚さ 0.2	錆化

銭貨

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	銭種	鑄造地、通称	始鑄年主な年代	法量				備考		
							外径	内径	方孔縦幅 / 横幅	外厚上 / 左下 / 右下			
57	84	I12	I層	アルミ硬貨			1.6	1.3	-	0.2	0.2	0.2	表「菊、富士」「一銭」、裏「大日本」「一」「昭和十八年」のデザイン 白い付着物

石製品

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種別	器種	法量		備考		
27	30	I04-①ST02	I層	石製品	砥石	全長 (6.5)	幅 (5.6)	厚さ 0.7	重量 (25.6g)	右側面、表面の左側欠損部付近を主に使用？

その他

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種別	名称	重量 (g)	法量	備考	
52	65	I10	I層	炭素棒		4.3	全長 5.4	径 0.8	外面細かい菱形状模様

※第13～17表記載の遺物部位名称および計測箇所については、熊本市熊本城跡発掘調査報告書1「飯田丸の調査」熊本城跡発掘調査報告書1集 2014年並びに熊本市熊本城跡発掘調査報告書2「一本丸御殿の調査」第2分冊 熊本城跡発掘調査報告書2集 2016年に準じる。